

学 位 論 文

菅原道真における白居易の受容

二〇一二年九月

潘怡良

岡山大学大学院  
社会文化科学研究科

# 目 次

凡 例.....	1
序 論.....	2
第一章 研究の目的と背景.....	3
第二章 従来の研究.....	5
第三章 研究の構成と概要.....	8
本 論.....	9
第一部 比較表現を中心として.....	10
第一章 菅原道真における比較表現の受容.....	10
第一節 はじめに.....	10
第二節 道真詩における比較表現.....	10
第三節 道真における白詩の比較表現の受容.....	18
第四節 受容のちがい——讃岐の守の時期と太宰府の時期.....	35
第五節 まとめ.....	37
第二章 菅原道真の子供を詠ずる詩.....	39
第一節 はじめに.....	39
第二節 子供を論ずる詩における比較表現の受容について.....	40
第三節 家学、文章道の継承への望みと子供に対する勸戒.....	45
第四節 子供を悼む詩.....	52
第五節 まとめ.....	59
第二部 見立て表現を中心として.....	61
第一章 道真詩における「雪」の見立て.....	61
第一節 はじめに.....	61
第二節 喩詞としての雪.....	61
第三節 被喩詞としての雪.....	78
第四節 まとめ.....	89
第二章 道真詩における「月」の見立て.....	91
第一節 はじめに.....	91
第二節 道真にとっての月.....	92
第三節 道真独特の月の見立て.....	106
第四節 まとめ.....	122
第三章 道真詩における「梅」の見立て.....	124
第一節 はじめに.....	124

第二節 「梅」の見立て表現.....	124
第三節 被喩詞としての「梅」.....	129
第四節 分身としての梅.....	138
第五節 まとめ.....	144
第四章 道真詩における「舞妓」の見立て.....	145
第一節 はじめに.....	145
第二節 「早春内宴、侍仁壽殿、同賦春娃無氣力、應製一首」における舞の表現 .....	146
第三節 踊りの最高潮での悲しみ.....	154
第四節 道真詩における喩詞としての「舞妓」.....	159
第五節 まとめ.....	166
結 論.....	170
参考文献.....	174
初出一覧.....	177

## 凡 例

一、菅原道真の詩については、川口久雄校註『菅家文草・菅家後集』（岩波書店、一九六六年）を用いる。その訓読は、「平安初期の古訓に近づくべく努力」（九七頁）されたものだが、拙文では、基本的には川口氏の訓読に基づきつつ、特殊なものについては、現代の通常の訓読を用いることとした。また、難解な詩文の解釈についても、主に川口氏の解釈を参照した。

二、道真詩の詩題に付す作品番号は川口久雄『菅家文草・菅家後集』（同上）に依る。

三、白居易の詩文については、顧学頤校点『白居易集』（中華書局、一九七九年）を用いる。著者の判断により他のテキストに拠る場合はその旨を記す。訓読は、おおむね佐久節『白楽天全詩集』（日本図書センター、一九七八年）に従った。

四、白詩の前に付す番号は、花房英樹氏が『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九六〇年）において定めた白居易の詩文の作品番号である。

# 序 論

## 第一章 研究の目的と背景

菅原道真（八四五～九〇三）は平安朝漢詩人の最高に位置する詩人である。  
行論の便のため、ここで、その一生をごく簡単に述べておく。

菅原道真は字は三、幼名は阿古。祖父清公、父是善、共に文章博士に任ぜられた。紀伝道の家学を継ぐ者として、幼少から厳しい教育を受けて、島田忠臣に師事した。家風に甚大な影響を受けた道真は、少年時代から、「詩臣」であることを目標として詩文の創作に研鑽を積んだ。少青年時代は順風満帆、十八歳で文章生試に及第し、三十三歳で文章博士に任ぜられた。だが、四十二歳、讃岐守に移され、三年後、帰京した。その後は、五十五歳、右大臣に任じられ、位人臣を極めのだが、二年後、太宰府に左遷され、二年後、太宰府で没した。

道真の作品は、昌泰三年（九〇〇）、醍醐天皇の求めに応じられ、道真が自己の手で編定した『菅家文草』十二巻、及び延喜三年（九〇三）、太宰府流謫中の詠詩を選び、紀長谷雄に送付された『西府新詩』によって編成された『菅家後集』一卷が現存している。『菅家文草』は進献当時の原型を受け継いでいると思われ<sup>1</sup>、詩四百六十八首、散文百五十九編、『菅家後集』は詩四十六首を収めている。これらの作品には、道真の生涯が忠実に記録されている。

菅原道真が白居易の影響を強く受けているのは周知のことである。留学僧慧萼が会昌四年（八四四）に蘇州南禅寺で写した『白氏文集』六十七巻本が菅家に伝えられたと言われ<sup>2</sup>、道真の詩の先生である島田忠臣は「坐して吟じ臥して詠じ詩媒をもてあそぶ、白家をのぞけ除却ば余り能はず（坐吟臥詠翫詩媒、除却白家

<sup>1</sup> 川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究上』（明治書院、一九五九年）に依る。

<sup>2</sup> 丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』（東京女子大学大会、一九六四年）64頁。

余不能)」「吟白舎人詩)」と、白詩への酔心ぶりを表現している。道真は家風の影響を受けて、忠臣以上に白詩を愛読し、技法の上において、また精神と感情の面においても、白居易の影響を深く全面的に受けている。

道真は平安朝漢詩文芸の展開において独自の位置を占めていると評価されている。道真は自己の詩歌創作の中によく『白氏文集』を取り入れて、白詩の表現を広げて深化させている。その中で、筆者は以下の点に着目した。

第一に、道真詩においては、比較表現がしばしば見え、特に讃岐客居、太宰府謫居の時に詠じた「比較表現」を含む詩には、白居易の影響を受けて、道真の「兼済」、「独善」の思想が見えることである。道真は白居易の「…より…ました」(「譲歩」―「比較」―「肯定」の比較図式)の比較表現を学んで、自分自身を慰めている。

第二に、道真の見立ての表現にも白居易の影響が見えることである。藤原克己氏は、「道真は、見立ての技巧に最も彫心鏤骨した詩人であった」<sup>3</sup>と述べている。『菅家文草』の初めの一首 001「月夜見梅花」及び『菅家後集』の巻末最後の一首 514「謂居春雪」は、ともに雪、月、梅花を素材として詠じたものである。それは偶然かもしれないが、私には道真の文学において、「雪月花」の表現がその中軸を占めるものであることの象徴のように思える。道真における白詩の受容を考察するに当たっては、雪月花の表現を精密に比較研究しなければならない。そして、道真詩において、雪月花としばしば同時に登場する「舞妓」も、都の繁華生活の象徴として、白詩に強く影響を受けたことがうかがえる。

---

<sup>3</sup> 藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』(東京大学出版会、二〇〇一年) 270 頁。

拙文では、菅原道真における、比較表現、子供を詠ずる詩及び見立て表現に典型的な「雪」、「月」、「花」、「舞妓」の表現を対象としつつ、道真がどのように白居易の影響を受けているのか、また影響を受けつつも、そこにどのような独創が見られるのか、さらには、こうした分析を通して、道真の精神と思想の白居易との違い、及びその一生における変化をも考察することを目的とする。これを基礎として、道真の詩における白詩の影響について、表現形式そのものに密着して全面的に考察していく。

## 第二章 従来の研究

本章では、道真及び道真詩の研究史についてまとめておく。道真を天神崇拝の対象とすべきではなく一人の詩人とすべきだと指摘したのは、高山樗牛の『菅公伝』（同文館、一九〇〇年）、及び井上哲次郎の『菅原道真』（北海出版社、一九三六年）である。それ以降、道真の詩人としての意識に関する研究が展開された。秋山虔氏の「古代官人の文学思想」（東京大学『国語と国文学』三十四一十、一九五五年）は、当時の政治状況を論じて、「文章経国」の詩人としての論理的な道真の姿を提示している。大曾根章介氏は「菅原道真—詩人と鴻儒—」（『大曾根章介 日本漢文学論集』第一巻、汲古書院、一九九九年）において、道真の「鴻儒」から「詩人」への変遷過程より道真の思想の根幹を指摘している。後藤昭雄氏の「文人相軽—道真の周辺—」（『平安朝文学論考』桜楓社、一九八一年）は、「詩人無用論」が盛んであり、文人社会における派閥党争として「儒家」派と「詩人」派が対立している背景の下で、詩人としての道真の立場について論じている。藤原克己氏は「平安朝の知識人—文章道と菅原道真—」



『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学出版会、二〇〇一年）において、道真における「詩道」の本質は風月言志であり、道真は本質的に風月言志の詩人であったと論じて、この思想の下での道真の政治参加について考察した。波戸岡旭氏は「菅原道真〔九月十日〕の詩について」（『宮廷詩人菅原道真―「菅家文草」「菅家後集」の世界』笠間書院、二〇〇五年）において、道真の宮廷詩人としての矜持を強調した。谷口孝介氏は「詩人の感興―菅原道真〔讃州客中之詩〕啓進の意図」（『菅原道真の詩と学問』塙書房、二〇〇四年）において、道真の「詩人」、「詩臣」の問題を繞って、「客意」と「応制」という詩の主題の違いと統一、律令官人としての道真等の問題について考察した。

次に、道真の作品における白居易の影響を検討した研究について述べる。金子彦二郎氏の『平安時代文学と白氏文集―道真の文学研究篇第一冊―』（芸林舎、一九七七年）は、道真における白居易の影響を綿密に指摘した。さらに、川口久雄氏の『平安朝日本漢文学史の研究上』（明治書院、一九五九年）、同氏の「菅原道真の文学と元稹・白樂天の文学―太宰府における敍意一百韻詩をめぐって―」（『平安朝漢文学の開花―詩人空海と道真―』吉川弘文館、一九七五年）、金原理氏の『平安朝漢詩文の研究』（九州大学出版社、一九八一年）、菅野礼行氏の『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』（大修館書店、一九八八年）など、道真における白居易の受容を繞って、多くの論著、論考が積み重ねられている。

その中で、道真詩の表現については、藤原克己氏の「比喻と理知―菅原道真の詩の表現―」（『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学出版会、二〇〇一年）において、道真詩における見立て表現の特徴が論じられている。藤原氏は、「修辞

的」表現（在京時代作）と「直叙的」表現（讃岐客居と太宰府謫居）という二つの指標を設定して、『菅家文草』、および『菅家後集』により、例を挙げつつ、道真の見立て表現を論理的に分析して、「まことに、見立てこそは詩人の痼癖であった。しかして、道真が、白居易の詩から徹底した影響を受けることを通して、独自の詩人形成を遂げたのであったとすれば、その独自性を生み出したゆえんのものもまた、まさにこの痼癖であったと言ってよいのである」<sup>4</sup>と論じている。波戸岡旭氏は、「菅原道真〔九月十日〕の詩について」（『宮廷詩人菅原道真―「菅家文草」「菅家後集」の世界』笠間書院、二〇〇五年）において、「道真詩と雪月花」、「詠雪詩考」、「詠月詩考」、「詠梅詩考」など各章に、おおよそ詩の詠出された時間の順番に、道真の各時代の雪、月、花の詩作を検討した。白居易の影響を受けた所についても多数指摘している。道真の見立て表現における白詩の影響については、専論としては論じていないが、行文中にしばしば論じられている。そのほか、江藤高志氏は、「菅原道真の擬人的表現と尤物の受容―雨中の花と汗に潤う妓女との重なり」（都留文科大学国語国文学会編『国文学論考』第四十七号、二〇一一年）において、道真詩における「雨中花」の表現をはじめとして、「舞汗」など、花に見立てた「尤物」に関する表現について論じている。また、白居易の受容、及び道真の「尤物」が後世に与えた影響も論じている。

拙文はこれらの論を踏まえた上で、道真における詩作の表現、及び思想的にどのように白居易の影響を受けているのか、また道真の精神と思想について白居易とどのような違いがあるのか、及びその一生においてこういった変化

---

<sup>4</sup> 藤原克己著・前掲註（3）・293頁

があるのかを検討したい。

### 第三章 研究の構成と概要

拙文の構成は以下のようである。

「第一部 比較表現を中心として」では、『菅家文草』『菅家後集』における比較表現を中心として、白居易の影響を考察する。

そのうち、「第一章 菅原道真における比較表現の受容」では、道真詩における白居易の比較表現の受容の考察により、讃岐に赴任した時、白居易の「兼済」と「独善」の精神をよく取り入れ、太宰府に追放された時には、白居易の「…より…ました」という表現の力を借りて、自分自身を慰めていることを明らかにする。続く「第二章 菅原道真の子供を詠ずる詩」では、道真が上述の白居易の「…より…ました」のパターンを使って、自分自身また子供たちを慰めることをはじめとして、道真の子供を詠ずる詩に見られる白居易の影響を論じる。

白詩には「雪月花の時最も君を憶う」(2565「寄殷協律」)の句がある。道真の文学においても、前述のように「雪月花」の表現がその中軸を占めるものであるように思える。また道真詩における「舞妓」は、「雪月花」としばしば同時に登場して、道真の都での宮廷生活と強い繋がりがあると思われる。「第二部 見立て表現を中心として」では、道真詩における「雪」、「月」、「花」及び「舞妓」の表現について、どのように白居易詩及びその他の影響を受けているのかを考察する。

# 本論

## 第一部 比較表現を中心として

### 第一章 菅原道真における比較表現の受容

#### 第一節 はじめに

道真の作品には、比較表現がしばしば見えるが、この比較表現には白居易の影響が見られる。本章は、道真の詩における比較表現について、それが技法の上において、また精神と感情の面において、白居易からどのような影響を受けているのかを考察することを目的とする。これを通じて、道真の詩における白詩の影響につき、表現形式そのものに密着して精密に考察したい。

#### 第二節 道真詩における比較表現

道真の詩で比較表現が見えるのは二十首である。そのうちよく使われる比較表現は、「猶……に勝る」、「豈に……若かんや」、「縦い」、「不若」、「不如」などである。二十の用例の比較表現の部分をも、作詩の年代順に挙げる。

01. 夜深纔有微光透 夜深けて 纔に微光の透ること有り

珍重猶勝到曉無 珍重す 猶お 曉に到るまで無きに勝れり

(012「八月十五夜、月亭遇雨待月」)

この比較は、「纔に微光が透る」が「譲歩」、「曉に到るまで無きに」が「比較」、「勝れり」がましだ即ち「肯定」という図式である(「譲歩」—「比較」

—「肯定」の比較の図式は、澤崎久和に拠る。後述)。以下、同様に、比較表現の特徴を簡単に記す。

02. 若向公庭論 若し公庭に向いて論ぜば

應知兩取身 知るべし 兩つながら身に取ることを

(028「仲春釋奠、聽講孝經、同賦資事父事君。并序」)

この二句は、もし「孝道」ということを、朝廷に仕える者の立場から論ずるなら、君には忠、親には孝、この二つをともに身に体験しなければならないの意。これは語法上は比較ではなくて假定表現である。けれども、内容的には、ただ孝であるのではなくて(曾子や晋の王祥がひたすらに孝であるのと比較して)、孝と忠の両方を体現しなければならないとしているから、一種の比較とみなすことができる。

03. 知音皆道空消日 知音は皆な道う 空しく日を消すなるなりと

豈若家風便詠詩 豈に 家風の詩を詠ずるに便りあるに若かんや

(038「停習彈琴」)

これは、琴を弾くことより、家風の詩を詠ずることが大切だと言っている。

04. 縱使清光纔透出 縱使 清光 纔に透り出ずとも

當勝徹夜甚簷疏 當に徹夜甚簷の疏きに勝らん

(039「八月十五夕、待月、席上各分一字」)

用例 01 とほぼ同じ表現。たとえ僅かの光が雲を透して出るだけでも(讓歩)、夜通しまっくらであるよりは(比較)ましだ(肯定)の図式である。

05. 當家好爵有遺塵 當家の好爵 遺塵有り

不若槐林苦出身 若かじ 槐林に 苦に出身するには

(131「絶句十首、賀諸進士及第、賀橘風」)

二句は、「あなたの家は高い位を有し先祖の遺してくれた業績がある。だから三公の位にまで出世するのがいいですよ」の意。比較される状態は、無為に過ごして出世しないことが想定されている。

06. 餘音縦在微臣聽 餘音は 縦い微臣が聴きに在りとも

最歎孤竹海上沙 最も歎くは 孤り海の上なる沙を行かんことを

(183「早春内宴、聴宮妓奏柳花怨曲、應製」)

早春の宮中の宴会で、宮妓の舞は最高潮に達した。その音がどれほど私の心に響こうとも、独り讃岐に行かねばならない私の悲しみこそは最も嘆かわしいものなのだ。「最」の字は、「どんな感動よりも、私の悲しみは深い」の意で用いられている。

07. 就中何事難仍舊 就中に何れの事か 舊に仍ること難けん

明月春風不遇時 明月春風 時に遇わず

(221「路遇白頭翁」)

二句は道真の前の国司、安氏(安部興行)と保氏(藤原保則)の二人が、讃岐の民のために奔走してすばらしい政治を行ったとの白頭の翁の話を受けたもの。この二人の長官の善政に感嘆し、「なかでも彼らのまねをしにくいのは、明月の美しい時や春風の心地よい時を顧みずに民のために働くことだ」の意。

08. 風月能傷旅客心 風月 能く傷ましむ 旅客の心

就中春盡淚難禁 就中に春盡くるときに 涙禁め難し

(224「春盡」)

この詩は、白居易の「春盡」の影響を受けている(後に詳述)。そのことは川

口氏が『白氏文集』に、「春盡日」、「春盡勸客酒」、「春盡日天津橋醉吟」などの詩があると、すでに指摘している<sup>5</sup>。

09. 不用春庭無限色 用いず 春の庭の限りなき色を

欲看秋畝有餘糧 秋の畝に 餘れる糧有るを看んことを欲す

(286「誄藤司馬詠廳前櫻花之作」)

「春、庭先で限りなく美しい色に咲く桜の花はすばらしいが、それは華美にすぎない。秋の実りが豊かで、どっさり余分のかてまで収穫があるかどうかを見極めたいものだ」の意。

10. 只合萬家知採用 只だ合に萬家採り用いることを知るべし

縱焚筋骨不焚名 縦い筋骨を焚くとも 名を焚かじ

(293「端午日賦艾人」)

「只合……」の句は、端午の節日に、どこの家でも、「艾人」、邪気を除くよもぎで作った人形をかざる風習があることをいう。その「艾人」の筋骨は焼いても、名までは焼いて失ってしまいたくないの意。川口氏の注に、「私はどんなことがあっても秩満まで立派につとめあげたい、名を汚したくないとの意をこめる。」<sup>6</sup>とある。

11. 滿衙僚吏雖多俸 滿衙の僚吏 俸多しと雖も

不若東風一片雲 若かず 東風一片の雲には

(295「喜雨」)

役人たちの俸禄が多いことよりも、東風が吹き、雨が降って、庶民の耕作に役立つことのほうがもっと嬉しいの意。白居易の兼濟の志を意識している。

<sup>5</sup> 川口久雄校註『菅家文草・菅家後集』(岩波書店、一九六六年) 279 頁。

<sup>6</sup> 川口久雄校註・前掲註(5)・341 頁。



12. 從始南來長鬱悵　　始めて南に來たりしときより　長に鬱悵たり

就中此夜不勝悲　　就中に此夜は　悲しみに勝えず

(298「八月十五日夜、思舊有感」)

「南」は讃岐。「不勝」の二字があって、比較の意は明らかである。この詩については後で言及する。

13. 縱使春聲天地滿　　縱使　春聲の天地に滿てりとも

不如萬歲報山椒　　萬歲　山椒(山頂に同じ)に報ぐるに如かず

(364「早春侍内宴、同賦開春樂、應製」)

川口氏は、「たとい春樂の聲が天地にみちようとも、かの武帝の寿を賀して山神が万歳と呼んだように、わが君の万歳を呼ぶのにこしたことはない」<sup>7</sup>と述べている。

14. 每憶脂膏多渥潤　　毎に憶う　脂膏の渥潤多きことを

那勝恩澤繞身來　　那んぞ恩澤の身を繞りて來たるに勝えん

(380「賦雨夜紗燈、應製、并序、于時九月十日」)

恩沢の潤いを強調するために、潤いの典型ともいえる「脂膏」の「渥潤(ねとねとしてうるおいがあること)」を比較の対象とし、それよりも潤っているとす

15. 年有一秋秋有三　　年に一たび秋あり　秋に三有り

就中季白意難堪　　就中に季白ぞ　意堪え難き

(436「九日後朝、同賦秋深、應製」)

一年の中、秋には初秋、中秋、晩秋があるが、なかでも晩秋九月は人の心をたえがたく悲しませるの意。

<sup>7</sup> 川口久雄校註・前掲註(5)・341頁。

16. 雖云昨翫新英菊 昨 新英の菊を翫<sup>もてあそ</sup>ぶと云うと雖も

豈若有心難老容 豈にに 有心 老い難き容に若かめ

(449「九日後朝、侍宴朱雀院、同賦秋思入寒松、應太上皇製」)

菊の花は、松の葉の四時を貫いていつまでも老いない千年の緑を茂らせる  
様子に及ばないの意。

17. 微臣把得簾中滿 微臣(菊花を)把ること得て 簾<sup>かざ</sup>の中に滿つとも

豈若一經遺在家 豈に 若かんや 一經<sup>のこ</sup>の遺りて家に在らんには

(460「九日侍宴、同賦菊散一叢金、應製」)

「菊花」をどれだけたくさん摘み、かごいっぱいになろうとも、家に先賢の  
書いた一經があり、それを子孫に伝えるほうがましだの意。家業・家学を大切  
に思う気持ちを詠じている。

18. 思量汝於彼 汝を彼らに思量するに

天感甚寛恕 天感 甚しく寛恕なり

(483「慰少男女」)

自分も子供も不遇(讓歩)だが、かつて栄華を誇った都の官僚の子供、「南助」・  
「弁御」の落ちぶれているのに比べると(比較)、「甚寛恕」だ(肯定)との図式  
である。白詩の「贈内子」(1015)を意識している。この詩については、第二  
章で詳述する。

19. 忘卻是身偏用意 是の身を忘卻して 偏えに意<sup>こころ</sup>を用うれば

優於誼舎在長沙 誼<sup>ぎ</sup>が舎<sup>いえ</sup>の長沙に在りしに優れたらまし

(504「官舎幽趣」)

もしも我が身の上にとらわれることから離れて、もっぱら衣食など身辺の間

題に心を使うなら、賈誼が長沙という卑湿の地に謫居していたのよりは、自分の方がましだと、仮定の情況(心境)と賈誼の貶謫の状況とを比較している。

20. 涼秋月盡早霜初 涼秋 月盡きて 早霜の初め

残菊白花雪不如 残りの菊の白き花は 雪も如かず

(505「秋晚題白菊」)

秋の終わり、冬になろうという時、雪の白さも残菊の白さには及ばないの意。

比較の内容を以下の表により示す。

	題名	比較の 文字	比較内容	制作時期・場 所
01	012「八月十五夜、 月亭遇雨待月」	猶勝	微光の透る>暁に到るまで 無き	貞観七年(八 六五)・都
02	028「仲春釋奠、聽 講孝經、同賦資事父 事君、并序」	若	忠・孝両方>ただ孝	貞観九年(八 六七)・都
03	038「停習彈琴」	豈若	詩を詠ずること>琴を弾く こと	貞観十二年 (八七〇)・ 都
04	039「八月十五夕、 待月、席上各分一 字」	縱使	清光が僅かに透り出す>徹 夜甚簷の疏き	貞観十二年 (八七〇)・ 都
05	131「絶句十首、賀	不若	出身>出身しないこと	元慶八年(八

	諸進士及第、賀橘 風」			八四）・都
06	183「早春内宴、聽 宮妓奏柳花怨曲、應 製」	最歎	独行の悲しみの深さ＞歌舞 の与える感動の深さ	仁和二年（八 八六）・讃岐
07	221「路遇白頭翁」	就中	最も難しい事（最高級）	仁和三年（八 八七）・讃岐
08	224「春盡」	就中	風月の悲しみの中で春尽の 悲しみは最も深い（最高級）	仁和三年（八 八七）・都
09	286「訓藤司馬詠廳 前櫻花之作」	不用	秋の畝に余分の糧がある＞ 春の庭の限りなく美しい景 色	仁和五年（八 八九）・讃岐
10	293「端午日賦艾人」	縦	名を焚かじ＞筋骨を焚く（仮 定）	仁和五年（八 八九）・讃岐
11	295「喜雨」	不若	東風一片の雲＞満衙の僚吏 が俸多し	仁和五年（八 八九）・讃岐
12	298「八月十五日 夜、思舊有感」	就中	此夜の悲しみ＞始めて南に 来りしときよりこのかた、長 に鬱悒	仁和五年（八 八九）・讃岐
13	364「早春侍内宴、 同賦開春樂、應製」	縦使… 不如	万歳が山椒に報ぐ＞春声の 天地に満てり	寛平五年（八 九三）・都
14	380「賦雨夜紗燈、	那勝	恩沢の身を繞りて来る脂＞	寛平六年（八

	應製、并序、于時九月十日」		膏の渥潤多きこと	九四）・都
15	436「九日後朝、同賦秋深、應製」	就中	秋の悲しみの中で晩秋の悲しみは最も深い(最高級)	寛平九年（八九七）・都
16	449「九日後朝、侍宴朱雀院、同賦秋思入寒松、應太上皇製」	雖云… 豈若	有心、老い難き容＞昨、新英の菊を翫ぶ	寛平九年（八九七）・都
17	460「九日侍宴、同賦菊散一叢金、應製」	豈若	家に先賢が書いた一経があって、子孫に残せる＞菊をかごにいっぱい抱む	昌泰二年（八九九）・都
18	483「慰少男女」	甚寛恕	自分の子供がまだ恵まれている＞南助、弁の御	昌泰四年（九〇一）・太宰府
19	504「官舎幽趣」	優於	自分が太宰府に左遷された苦しさ＞賈誼の謫居の苦しさ	延喜二年（九〇二）・太宰府
20	505「秋晩題白菊」	不如	雪＞残りの菊の白い花	延喜二年（九〇二）・太宰府

### 第三節 道真における白詩の比較表現の受容

以上の道真の詩の比較表現には、白居易の影響がはっきり見てとれる。その中には、白居易の兼済<sup>8</sup>の志の影響を受けたものがある。それは、道真が讃岐の守の時の詩に最も多く見られる。

例えば次の句。

不用春庭無限色　　用いず　春の庭の限りなき色を  
欲看秋畝有餘糧　　秋の畝<sup>うね</sup>に　餘<sup>あま</sup>れる糧<sup>かて</sup>有<sup>あ</sup>るを看<sup>み</sup>ることを欲す  
(用例 09、286「訓藤司馬詠廳前櫻花之作」)

これは、仁和五年（八八九）、道真が讃岐の守の時の作。二句は、「春、庭先で限りなく美しい色に咲く桜の花はすばらしいが、それは華美にすぎない。秋の実りが豊かで、どっさり余分のかてまで収穫があるかどうかを見極めたいものだ」の意。これは、白居易の「独善」<sup>9</sup>——自分一身の快適を思うにつけても、「兼済」——民の平安こそ大切だと思ふ思想を摂取している。

道真には、また次のような詩がある。

満衙僚吏雖多俸　　満衙の僚吏　俸多しといえども

---

8 「兼済」——「兼<sup>か</sup>ねて済<sup>すく</sup>う」、広く人民を救済するの意。政治とほぼ同義。また白居易においては「独善」に対する語として、公務の意味を持つ。

9 「独善」——「兼済」に対応する語。「窮すれば独り其の身を善くし、達すれば兼ねて天下を済う（不遇の時には自分の人格の修養に努め、よい君主にめぐりあつてポストを得るならば天下の民を救う）」とは、もと孟子の言葉である。白居易は、この「独善」を、親友元稹に送った手紙「元九に与うる書」の中で、公務から離れて一人でいる時のプライベートの快適という意味に変え、しかも「兼済」＝公務と、「独善」＝プライベートの快適とを、同じ価値のものだと言いきった。

不若東風一片雲　　若かず　東風一片の雲には

（用例 11、295「喜雨」）

これも仁和五年の作。役人たちの俸禄が多いことよりも、東風が吹いて、雨が降って、庶民の耕作に役立つことのほうがもっと嬉しい。讃岐の地方長官だから、民の幸福を考えるのは当然といえるが、この表現は、白居易の独善よりも兼済という思想を摂取している。

ここで、白詩の表現を確かめておこう。例えば次のような詩が、独善——自己一身の快適を感じることにつけても、兼済——民の幸福こそが大切だという思いを表している。

白居易は元和二年（八〇七）、整屋県尉の時の五古 0013「月夜登閣避暑」に次のように詠っている。

……

開襟當軒坐　　襟を開きて　當に軒に坐すべし

意泰神飄飄　　意泰<sup>やす</sup>らかにして　神飄飄

迴看歸路傍　　迴り見て　路傍に歸れば

禾黍盡枯焦　　禾黍　盡く枯焦す

獨善誠有計　　獨り善きは　誠に計有るも

將何救旱苗　　將た　旱苗を救うに何れぞ

襟を開いて軒下に座ると、気持ちが安らかでのんびりする。ふりかえって路

のそばを見ると、禾黍はすべて枯れていた。自分一身の「独善」は工夫すれば何とかなるものだが、旱の苗を救うのはいったいどうすればいいのだろう。

道真の思ひは、白居易のこの詩と同じだろう。

諷諭詩 0055「新製布裘(新たに布裘を製る)」(元和二年[八〇七]～元和十年[八一五]の作)は、こう詠う。

.....

中夕忽有念	中夕 忽ち念う有り
撫裘起逡巡	裘を撫して起きて逡巡す
丈夫貴兼濟	丈夫は 兼濟を貴ぶ
豈獨善一身	豈に獨り一身を善くせんや
安得萬里裘	安くにか <sup>いず</sup> 萬里の裘を得て
蓋裏周四垠	蓋い裏みて 四垠に <sup>あま</sup> 周ねからしめん
穩暖皆如我	穩かに暖かなること 皆な我れの如くにし
天下無寒人	天下に寒き人無からしめん

ふと夜中にいきなり思うことがある。綿入れの上着を撫でながらいきつもどりつする。一人前の男は「兼濟」の志が大切だ、どうして「独善」、自分一人のことばかり考えていてよかろう。世の中の民のすべてがあたたかい綿入れの上着を手に入れて、私のように暖かく、安らかに暮らして、天下に寒さを訴える人がないようにしたいものだ。

この詩には、「兼濟」「独善」の語が、二つとも出ている。自分一身の「独善」



よりも、世の中の民、皆が幸福になるようにと願う、「兼濟」の志が、ここに典型的に見られる。

さらにもう一例だけ挙げておく。

大和五年（八三一）、河南尹の時の七言排律 2893「新製綾襖成感而有詠」は、次のように歌っている。

水波文襖造新成	水波の文襖 造りて新たに成る
綾軟綿勻温復輕	綾軟かに綿 <sup>ととの</sup> 勻い 温かにして復た輕し
晨興好擁向陽坐	晨に興きては擁するに好し 陽に向かつて坐す
晚出宜披蹋雪行	晩に出でては披 <sup>き</sup> るに宜し 雪を蹋 <sup>ふ</sup> んで行く
……	
百姓多寒無可救	百姓 <sup>ひやくせい</sup> 多く寒 <sup>こご</sup> ゆるも救う可き無し
一身獨煖亦何情	一身 獨り煖かなるも 亦た何の情ぞ
心中爲念農桑苦	心中 農桑の苦を念うが爲に
耳裏如聞飢凍聲	耳裏 飢凍の聲を聞くが如し
爭得大裘長萬丈	爭 <sup>い</sup> でか 大裘の長さ萬丈なるを得て
與君都蓋洛陽城	君と都 <sup>よ</sup> て 洛陽城を蓋わん

波のもようの上着ができあがった。綾絹はやわらかいし、中の綿も整っていて、暖かいうえに軽くて、気持ちがいい。朝起きて、太陽の下に座っても、夜出かけるときに着て、雪を踏んで歩いても大丈夫だ……だが、民はほとんどが寒いのをどうすることもできない、私一人だけ暖かいのはたえがたいことだ。

心の中で、畑仕事や養蚕の辛さがよくわかるので、耳の中で飢え凍えている人たちの声が聞こえるようだ。どうにかして洛陽と同じぐらいの大きさの上着を手に入れて、洛陽の民みんなをおおってやりたい。

下定雅弘氏は、「[裘]は白居易の身体を暖かく包み、幸せにしてくれるものであり、ただそのことを歌う詩もあるのですが、白居易は[裘]の暖かさに接すると、[独善]だけではなく、[兼濟]を思う癖があるので、年をとっても、しばしばこういう歌い方になります。」<sup>10</sup>と述べている。「裘」は白居易にとっては、寒さをしのぎ、快い暖かさをもたらしてくれる、「幸福」の一つの象徴である。自分の幸福だけではなく、民の幸福がもっと大切だという思い、これは、「兼濟」の志である。

白居易は、「元九に与うる書」において、自分の志は「兼濟」だが、左遷された今、その生き方は「独善」だと述べている。「兼濟」と「独善」の語は、『孟子』に拠っている。しかし、白居易の「独善」の内実は、『孟子』の「独善」とは異なる。下定氏は「独善」について次のようにいう。「孟子の[独善]は、[窮]した時にも義を失わないという意味なのだが、ここでは、それだけでなく、[閑適詩]の根拠づけであることから、逆に直前に述べた閑適詩の定義をも吸収する意義を担っているはずである。即ち[窮]した時に義を失わないことには限定されず、[或退公独處、或移病閑居、知足保和、吟玩情性]という、広く閑居の快適に向かつて開放される内容をも支える概念であるはずである。」<sup>11</sup>白居易においては、「兼濟」は「[器を畜え用を貯め]——才能を生かして活躍する」<sup>12</sup>、「独善」は「[志を養い名を忘れ]——心を気高く保ち名利を求めず、[独善]を楽し

<sup>10</sup> 下定雅弘『白樂天の愉悅——生きる叡智の輝き』（勉誠出版、二〇〇六）250頁。

<sup>11</sup> 下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠社、一九九六）373頁。

<sup>12</sup> 下定雅弘・前掲註（10）・46頁。

む人なら一生何の悩みもない」<sup>13</sup>。白居易は、江州に左遷される前には、その思想において兼済が大部分の比重を占めている。江州左遷以降、白居易の政治への熱情は沈静し、「兼済」と拮抗・並立する「独善」の観念が確立したとされる<sup>14</sup>。

以上、白居易の兼済・独善について、その意義を確かめ、典型的な用例を挙げた。以下、比較表現の検討からはやや離れるが、白居易の兼済・独善と、道真の兼済・独善のちがいについて、少し述べておきたい。

白居易は、江州に左遷される前、その思想において、兼済が大部分の比重を占めていたのに対して、道真は、讃岐への赴任の後、兼済を意識する作品が多くなっている。「何れの人にか寒気早し」、冬になってどのような人に寒気のつらさがもっとも早く感じられるだろうか、で始まる 200～209「寒早十首」、221「路遇白頭翁」、228「問蘭筍翁」、229「代翁答之」、230「重問」、231「重答」などは、その代表的なものである。だが、道真の「兼済」への思いは、白居易と同じものであったのだろうか？

道真の讃岐への赴任について、坂本太郎氏はこういう。道真が「父祖代々の学者であって、少壮より中央に重きをなした者が、博士の任十年で突如地方に転出したことは意外である…その事情として、学者の間の対立抗争がはげしく、菅家門徒の勢いが増大するのを恐れて、一時道真を地方にやって、その勢いを抑えようとした学者の運動が功を奏したのではないか、ということがかんがえられよう」<sup>15</sup>。道真は白居易と同じように、都で朝臣として勤めてきたのに、四十二歳で初めて都から離れることになったのである。悲しみは深い。だが、

<sup>13</sup> 下定雅弘・前掲註（10）・46頁。

<sup>14</sup> 下定雅弘・前掲註（11）・386頁。

<sup>15</sup> 坂本太郎『菅原道真』（吉川弘文館、一九九二）67頁。

彼は悲しみに沈むのではなく、讃岐に着いてからは、本格的に一人前の地方官として、その責務を果たすべく努力し始めた。道真は、仁和三年（八八七）に、次の詩を詠じている。

離家四日自傷春	家を離れて四日 自らに春を <sup>いた</sup> 傷む
梅柳何因觸處新	梅柳 何に因りてか觸るる處に新たなる
爲問去來行客報	爲に去來する行客の報 <sup>へ</sup> ぐることを問う
讃州刺史本詩人	讃州刺史 本詩人

（243「題驛樓壁」）

京都の家から離れて四日目、自ら春を傷み悲しむ。梅の花、柳の木、なぜいたるところでこうも鮮やかで、私の心にしみいるのか？往来の旅人を見ればその理由がわかるかと思ったが、彼らは梅や柳に何の興味もない、ならば、讃岐の長官となっていく私は本来やはり詩人であるらしい。

遠藤光正氏はこういう、「この詩を見ると、道真は嘗て学儒であった己れを措き、今は讃岐の国司である身に徹し切っていることが分かる。かように彼は誠実な態度で政治に精励していたことが伺い知られるが、彼の本質は[詩人]と詠じている」<sup>16</sup>。道真は讃岐にいる時、前任国司の安部興行、藤原保則に学んで、清廉を心掛け、「兼濟」の志を果たそうとした。ただし、自ら、「四時 王澤を歌わんことを<sup>や</sup>廢めず、長く詩臣の外臣たらんことを斷たん（四時不廢歌王澤、長斷詩臣作外臣）」（324「三月三日、侍於雅院、賜侍臣曲水之宴、應製」）、とい

---

<sup>16</sup> 遠藤光正「讃州時代の菅原道真と[寒早十首]」（大東文化大学東洋研究所『東洋研究』第一一三号、一九九四年）104頁。

うように、道真にとって、一番大切なのは、文章道であり、天皇との親しい関係であり、天皇のおそばにあつて「詩臣」であることである。

道真にはまた、天皇側近の儒臣でありたいとの思いを述べた次のような作がある。寛平三年（八九一）の作、353「金吾相公、枉賜遣懷、答謝之後、偶有御製、有感更押本韻、事君之道、盡于此篇。某不勝助喜、兼敘私情、有如白日、敬以呈上」。

遣懷兩字千金價	遣懷の兩字 千金の價
忠信兼陳一筆端	忠信兼ねて陳ねたり 一筆の端
分藥莫嫌爲口苦	藥を分ちて嫌うこと莫し 口の苦きを爲さんことを
履冰誰道不心寒	冰を履みて誰か道わん 心寒きことあらずと
精誠底露新章句	精誠底露す 新たなる章句
努力奔波舊素飡	努力奔波す 舊き素飡
偏欲播揚肝膽曲	偏に肝膽の曲を播き揚げんことを欲す
慙將碎瓦報幽蘭	慙ずらくは 碎けし瓦を將ちて幽蘭に報いんことを

これは道真が讃岐から帰って、宇多天皇に奉じた作である。「遣懷」は藤原時平が道真に贈った述懷の詩作をさす。大意は以下の通り。

「遣懷」の二字には千金の価値がある。この詩の筆端には、「忠」と「信」とが兼ねて述べられている。藥を分け与えて飲む人（君主）の口に苦いのを嫌ってはいけない、氷を踏めば心がひやりとすることがないわけがない（この二句、主君への諫言を厭うてはならないことをいう）。

時平公のこの新たな詩句には真実の誠が現れている。努力して、昔からの俸禄を盗む汚名を返上しよう。後漢の竇融のようにまごころの「歌」を歌い広めたい、砕けた瓦のような役立たずの身だが幽蘭白雪の曲のような、貴い恩顧にお酬い申し上げたい。

この詩は、自分の本来のありようが、やはり、天皇のおそばにあって、詩臣としてお仕えすることにあるとの思いを、改めて確認しているものだといえる。

道真のこの思いは彼の生涯を貫き、終始一貫している。だが、讃岐の守という地方長官として行政に直接責任を持つようになった時、道真は、白居易の「兼濟」への志をとりわけ強く意識し、自分なりにその実現に努めようと最大限の努力をした。それは、まさに道真の性格、その常人ならぬ生真面目さを証するものだろう。そしてそれだけではなく、道真は、まさにその真面目さによって、独善ばかりではだめで、兼濟こそ大切という、白居易独特の心動きをも正確につかんでいたのである。

道真は、白詩の「就中」を用いた表現を摂取している。中でも、その悲しみの表現の影響を強く受けている。「就中」は一種の最高級の表現である。比較の用法の一つと見ていいだろう。白居易が「就中」を使う比較表現は十首に見えるが、それは半分以上である六首が悲しみの表現である（後掲）。道真も「就中」を使って、「最高級」の悲しみを表す作品がいくつかある。まず、悲しみとは関係がないが、白居易の影響を受けている例を見る。

仁和三年（八八七）、讃岐での作。

就中何事難仍舊　就中に何<sup>いず</sup>れの事か舊に仍<sup>よ</sup>ること難けん

明月春風不遇時　明月　春風　時に遇わず

（用例 07、221「路遇白頭翁」）

これは、安氏（安部興行）と保氏（藤原保則）の二人の国司が、讃岐の民のために奔走してすばらしい政治を行ったとの白頭の翁の話を受け、この二人の長官の善政に感嘆しての句。「なかでも彼らのまねをしにくいのは、明月の美しい時や春風の心地よい時を顧みずに民のために働くことだ」の意である。この二句の上句は、「兼濟」に当たり、下句の「明月春風」は、「雪月花」にほぼ等しく、白居易の「独善」に相当する。

これは、やはり白居易の「兼濟」の思想を我がものとし、やはり白居易がよく用いる「就中」の語によってそれを強く表現したものといえる。

以下二例は悲しみの表現である。仁和三年（八八七）、讃岐での作。

風月能傷旅客心　風月　能<sup>よ</sup>く傷<sup>いた</sup>ましむ　旅客の心

就中春盡涙難禁　就中に春盡くるときに　涙<sup>なみだ</sup>禁め難し

（224「春盡」）

これは解釈の必要がない。読めばすぐに白居易の「春盡」の影響を受けていることがわかる。白居易に「春盡日」「春盡勸客酒」「春盡日天津橋醉吟」などの詩があること、川口氏がすでに指摘している（上述）。ここでは、川口氏が挙げていない「春盡」の詩 3446「春盡日宴罷感事獨吟」を見ておく。

五年三月今朝盡	五年三月 今朝盡く
客散筵空獨掩扉	客散じて筵空しく 獨り扉を掩う
病共樂天相伴住	病は樂天と共に 相い伴いて住し
春隨樊子一時歸	春は樊子に隨いて 一時に歸る
閑聽鶯語移時立	閑に鶯語を聽きて 時を移して立ち
思逐楊花觸處飛	思は楊花を逐 <sup>お</sup> つて 處に触れて飛ぶ
金帶縋腰衫委地	金帶は腰に縋わりて 衫は地に委す
年年衰瘦不勝衣	年年 衰え瘦せて衣に勝 <sup>た</sup> えず

道真は、白詩の「春盡」、即ち嘆老惜春の感傷を深く意識しつつ、その悲哀の情感を「就中」の語を用いることで、いっそう鋭く際立たせているのである。

仁和五年（八八九）、讃岐での作。

從始南來長鬱悒	始めて南に來りしときより 長 <sup>つね</sup> に鬱悒たり
就中此夜不勝悲	就中に此夜は 悲しみに勝えず

（用例 12、298「八月十五日夜、思舊有感」）

この詩には「不勝」の二字があることで、比較の意は明らかである。川口氏註に、「四年前の早春、はじめてこの南海の地に赴任してきた日より、長い間憂鬱の気持ちをいだきつづけてきたが、なかでも今宵はかなしみにたえない」<sup>17</sup>

---

<sup>17</sup>川口久雄校註・前掲註（5）・344 頁。



とある。

また、381「暮秋、賦秋盡翫菊、應令、并序」の序には、「古の七言詩(白詩0790「暮立」……潘)に曰く、大底四時心惣て苦<sup>すべ</sup>なり、就中<sup>ねんごろ</sup>腸斷<sup>はらわた</sup>ゆることは是れ秋天」と、はっきり白居易を意識することを記している。

道真の「就中」を使う詩作は、讃岐での時が一番多い。道真の、その「就中」を用いた深い悲しみの表現は、白詩の影響を強く受けている。

白詩の「就中」の用例を挙げておく。元和九年(八一四)、下邳で詠じた句、「大抵四時心総て苦しめども、就中腸斷つは是れ秋天(大抵四時心総苦、就中腸斷是秋天)」(0790「暮立」)、元和十三年(八一八)、江州で詠じた「但だ是れ詩人多くは薄命、就中淪落すること君に過ぎず(但是詩人多薄命、就中淪落不過)」(1056「李白墓」)、元和十四年(八一九)、忠州での「漠漠淒淒愁眼に滿つ、就中惆悵するは是れ江離(漠漠淒淒愁滿眼、就中惆悵是江離)」(1135「和萬州楊使君四絶句 江邊草」)、元和二年(八〇九)以前、盤屋で詠じた「就中 今夜は最も人を愁えしめ、涼月 清風 床席に滿つ(就中今夜最愁人、涼月清風滿床席)」(1200「獨眠吟二首」二)、長慶四年(八二四)、杭州で詠じた「處處頭を回らして盡く戀ふに堪えたり、就中別れ難きは是れ湖邊(處處回頭盡堪戀、就中難別是湖邊)」(2355「西湖留別」)等々。

道真は、これら白詩の「就中」を用いた表現を自ずとわがものにして表現している。白居易が「就中」を用いるのは、おおむね江州、忠州などに在って、不遇で悲哀に陥りやすい時の作である。道真は、讃岐にいるとき、言葉や表現だけではなく、不遇の意識そのものについて白居易の影響を受けていることがよくわかる。

澤崎久和氏「白居易の詩の比較表現」によると、「白居易の詩には、自分が置かれている現状を他と比較してよりましなものと考え、慰めと救いを得、自身を肯定して生きていこうとする表現が頻繁に見られる」<sup>18</sup>。道真の詩にも、白詩のように「譲歩－比較－肯定」(澤崎氏の整理)という定式化された表現が、四首見える。

夜深纔有微光透　　夜深けて　　纔に微光の透ること有り  
珍重猶勝到曉無　　珍重す　　猶お曉に到るまで無きに勝れり

(用例 01、012「八月十五夜、月亭遇雨待月　探運得無」)

川口氏は言う、「夜がふけてから、やっと月の光が雲を透してぽっと明からんできた。……これはありがたい、おかげでやはり夜明けになるまで夜通し月がないよりましだ」<sup>19</sup>。澤崎氏の図式に照らせば、「纔に微光の透る」は「譲歩」にあたり、「曉に到るまで無きに」は「比較」、そして、「勝れり」が「肯定」になる。

もう一首同じ意識の詩作は、039「八月十五夕、待月、席上各分一字、得疏」其四(用例 04)である。

縦使清光纔透出　　縦使　清光　わずか　纔に透り出ずとも  
當勝徹夜甚簷疏　　當に徹夜甚簷の疏きに勝らん

<sup>18</sup> 澤崎久和「白居易の詩の比較表現」(中唐文学会『第五回中唐文学会大会資料集』、一九九四) 1 頁。

<sup>19</sup> 川口久雄校註・前掲註(5)・117 頁。

川口氏補注は、「甚簷は写し誤りなどあるか。慈本（未詳。「興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点」<sup>20</sup>を指すか……潘）いう、「甚簷は、黠黯などの写誤にはあらぬにや。可考。」<sup>21</sup>としつつ、意味については「一晚中うとましいまっくらやみであるよりもましたの意か」という。これに従う。十五夜、月が姿を見せるのを待つが、なかなか現れずじれったい。たとえ僅かの光が雲を透して出るだけでも（譲歩）、夜通しまっくらであるよりは（比較）、「勝る」、ましたと肯定して終わっている。

この比較表現は、例えば、白詩 2859「和微之歎槿花」に「朝に榮ゆ殊に惜しむ可し、暮れに落つ實に嗟くに堪えたり（花の命が短い、譲歩）。若し花中に向いて比ぶれば（他の花と比較すれば）、猶お應に眼花（目が霞むこと）なには勝るべし（朝榮殊可惜、暮落實堪嗟。若向花中比、猶應勝眼花）」とあるのを学んだのだろう。「花の命は短いけれど」は「譲歩」、後の二句、花は花でも「眼花」、「眼がかすむという花」に比べればと「比較」して、「勝らん」と「肯定」して終わっている。

以上は、主に技法のレベルでの白詩の「…より…ました」という比較表現の吸収である。

次は、太宰府での一首。「…より、…ました」の用例がある。

塙中不得避諠譁	塙中 <small>かくちゅう</small> 諠譁を避くことを得ず
遇境幽閑自足誇	境に遇える幽閑 自らに誇るに足れり

<sup>20</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・97 頁。

<sup>21</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・646 頁。

秋雨濕庭潮落地	秋の雨 庭を濕す 潮の落つる地
暮煙縈屋潤深家	暮の煙 屋を縈る 潤 <sup>うる</sup> いの深き家
此時傲吏思莊叟	此の時 傲 <sup>ごう</sup> 吏 莊叟を思ふ
隨處空王事尺迦	處に隨いて 空王 尺迦 <sup>しゃか</sup> を事とす
依病扶持藜舊杖	病いに依りて扶持す 藜 <sup>あかざ</sup> の舊 <sup>ふる</sup> りにたる杖
忘愁吟詠菊殘花	愁いを忘れて吟詠す 菊の殘れる花
飡支月俸恩無極	飡 <sup>くいもの</sup> は月の俸に支えられて 恩 極まり無く
衣苦風寒分有涯	衣は風の寒きを苦しみて 分 涯 <sup>かぎ</sup> り有り
忘卻是身偏用意	是の身を忘卻して 偏 <sup>ひとえ</sup> に意を用いれば
優於誼舍在長沙	誼 <sup>ぎ</sup> が舍 <sup>いえ</sup> の長沙 <sup>ちやうさ</sup> に在りしに優 <sup>すぐ</sup> れたらん

(用例 19、504「官舍幽趣」)

これも道真が延喜二年(九〇二)、太宰府での作である。大意は以下の通り。

町の中では庶民の喧噪を避けるのは無理だ。この環境でも、静かなところに住めるのは誇らしい。秋のながあめで庭が潤っており潮が引いた後の落地面のようだ。夕方のもやが谷の奥にある家にまでただよっている。此の時、傲吏(もと莊子を指す、世間の習いに従わない官人……)である私は莊子のことを思い、どこにいても空王である釈迦に事える。病のためにあかざの古い杖に頼り、憂いを忘れて散り残っている菊の花を詠じる。食事は月俸に不自由はなくご恩はまことに大きい、だが左遷の身の上ゆえ服が足りず寒い風に耐えられない。このように自分の不幸を忘れて身辺のことにばかり気を使うなら、昔長沙に流謫されて苦しんだ賈誼よりはましだろう。(川口氏注を参照した)。

結句は比較表現である。賈誼は前漢の人。少年の頃から文才があり、二十歳で文帝に召されて文章博士となった。皇帝から厚く信頼されるが、群臣の讒言により、長沙に左遷された。賈誼は長沙にいる時、不吉な鳥とされる「鵬鳥」が家に飛んできて自分のそばに止まったのを見て、自分の命も長くあるまいと思ひ、名篇「鵬鳥賦」を作っている。道真にとって、賈誼はまさに同病相憐れむ人だった。川口氏は、道真は「太宰府ではそういうこと（「鵬鳥賦」を詠じたこと……潘）もなく幽閑を楽しむことができることを思っていましたといったのであろうか。（しかし実は賈誼よりも道真の方がより悲惨だったようである。）」<sup>22</sup>と述べている。道真は自分が太宰府に左遷されて苦しい（讓歩）ののだが、同じく左遷された賈誼より（比較）は、まし（肯定）だという。ここにも、「…より…ました」の比較表現をはっきり認めることができる。だが、身辺・日常に関心を集中するならば、謫地での死を思って「鵬鳥賦」を詠じた賈誼より自分の苦しみはましだろうというのは、道真が太宰府での死の思いに囚われていることを意味している。「…より…ました」の比較表現は、かえって道真の悲痛をいっそうはっきりと示すことになっているだろう。

澤崎氏は白居易の比較表現についてこうもいう。「白居易が詩に持ち込む比較の対象は、決まってより不幸な存在である。…比較による表現は、多角的な視点を導入して事態を相対化して見つめるために（むろんこのこと自体に新たな意義がある）、客観的な判断を示すもののように見えるが、白居易にとっては自己（あるいは他者）救済の意欲に基づいた、主観的意識的・選択的な表現手法であったと思われる」<sup>23</sup>。

---

<sup>22</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・738頁。

<sup>23</sup> 澤崎久和・前掲註（18）・8頁。

道真が「官舎幽趣」において、九・十句で衣食の状態(讓歩)をいい、衣食に関心を集中すれば(讓歩)、賈誼よりもました(肯定)としているのは、白居易に学んでいるのである。

太宰府では、もう一首「…より、…ました」という比較表現の用例、483「慰少男女」があるが、次章で論ずる。

#### 第四節 受容のちがい——讃岐の守の時期と太宰府の時期

以上、道真における白詩の比較表現の受容について、実例を挙げて考察した。ここでは、讃岐の守の時期と、太宰府謫居の時期の、比較表現の受容に見える相違を簡単に整理しておきたい。

道真は讃岐に滞在した時に、白居易の比較表現の影響を強く受けている。では、同じく地方官として太宰府にあった時はどうだろうか？讃岐にいる時の比較表現を用いる詩作は六首であり、太宰府にいる時は三首(用例 18・19・20)に比較表現が見える。

まず、数量の問題。道真は讃岐にいるとき、四年余りの期間に百四十首の詩を作った。これに対して、太宰府の期間は、左遷から死ぬまでわずか二年で、ほぼ四十首の詩が作られた。詩作の総数と、比較表現の分量の比率を考えれば、讃岐の時のそれは、四パーセント強、太宰府のそれは、七パーセント強であり、両者に統計的な有意の差はない。

内容のちがいを考えよう。讃岐では、兼済・独善の思想と、地方の行政官である悲哀とを白詩の比較表現から吸収していた。

兼済・独善の思想が意識されたのは、地方長官としての責任感による。200～

209「寒早十首」、221「路遇白頭翁」、228「問藺筍翁」、229「代翁答之」、230「重問」、231「重答」、236「舟行五事」、255「寄雨多縣令江維緒一絕」、262「丙午之歲、四月七日…」、263「憶諸詩友、兼奉寄前濃州田別駕」、276「客居對雪」、277「酬藤十六司馬對雪見寄之作」、286「酬藤司馬詠廳前櫻花之作」、293「端午日賦賦艾人」、295「喜雨」、296「納涼小宴」、など、讃岐では、「兼濟」の思想を表現した詩作が二十五首もある。

地方の行政官である悲哀、「客愁」は、たしかに多くの作に見られる。しかし讃岐では、四年後、「佚満」の時期が来れば、都にもどれると信じているから、不遇感はあるとしても、「兼濟」の責務を果たそうとする思いも強いのである。

要するに、讃岐の守時代、道真は、地方長官としての職掌への責任感と、また同時にそれには満足することのできない不遇感を持って、白詩の比較表現を吸収していたのである。

太宰府ではどうだろうか？

道真の太宰府に左遷されて以後の心境は、哀切を極める。その心境は、「萬事皆な夢の如し（萬事皆如夢）」（476「自詠」）、「萬死兢兢たり蹢躅の情（萬死兢兢蹢躅情）」（478「不出門」）、「哀しきかな放逐せらるる者、蹉跎として精靈を喪えり（哀哉放逐者、蹉跎喪精靈）」（479「讀開元詔書」）、「貶し降されて芥よりも輕し（貶降輕自芥）」（484「叙意一百韻」）、「見るに随い聞くに随い皆な慘慄（隨見隨聞皆慘慄）」（485「秋夜」）、「我は天崖放逐の羣に泣く（我泣天涯放逐羣）」（493「南館夜聞都府禮佛懺悔」）、「春に入りてよりこのかた、未だ一事の春の情を動かすことを知らず（自入春來五十日、未知一事動春情）」（499「二月十九日」）と、ひたすら放逐された身を嘆くばかりであり、「自らに年の豊稔

なることあれども、都て口に<sup>かな</sup>叶<sup>く</sup>う<sup>いもの</sup> 喰ぞ無き（自有年豊稔、都無叶口喰）」（507「風雨」）と、環境に適応しようという意欲もない。「鳥の頭に<sup>き</sup>點<sup>つ</sup>し著きて（鳥の頭が雪で白くなるのを見てはの意、不可能を示す……潘）は家に歸らんことを思う（鳥頭點著思歸家）」（514「貶謫居」）と、不可能を知りつつそれでも都への帰還の願いを詠わずにはおれない。「ただ願わくは我が障難を拔除したまわんことを（唯願拔除我障難）」（506「晚望東山遠寺」）、「此の賊逃るるに處無し、觀音に念ずること一廻（此賊逃無處、觀音念一廻）」（513「偶作」）と、窮境からの脱却を仏に頼むことがしばしばである。彼は、万事休した自分の身の上を思い、ただ悲嘆に暮れるばかりであり、その悲嘆は凄絶である。

道真の関心の全ては、究極の逆境にある我が身の上にあったのであり、讃岐の時のような「兼濟」や帰る期待と隣合わせの不遇感は、太宰府の心境と無縁である。この時道真は、この絶体絶命の不遇を、ほんのわずかでも、絶体絶命からは遠ざけて、その悲痛をやわらげようとした。それが、太宰府の詩に見えた二例（もう一つの例は次章で論ずる）の「……より、……ました」の表現である。かつてわかかくして都で詠ったのとは、全く別の深い意味をもって、「…より、…ました」の比較表現は、道真の心をとらえた。白居易が不遇による悲痛から脱却しようとする時にいつも用いたこの比較の手法と思想（「知足」の人生観）を学ぶことで、道真は少しでも自分の傷みを少なくしようとしたのである。

## 第五節 まとめ

以上、道真の比較表現の全てが白詩の比較表現の影響を強く受けていることが分かった。いまは、二つの観点から、仮のまとめとさせていただく。



一、道真の詩の比較表現は、その表現手法の上で、さまざまに白詩の影響を受けている。けれども、単に白詩の技法を摂取しているのではない。兼済の思想や、「就中」で表される悲哀、「譲歩」―「比較」―「肯定」の表現に見たように、どの詩でも、白居易の思想と感情を深く理解し、共感して、自分の比較表現にアレンジしている。

二、道真は、他の誰よりも、白詩の影響を深く受けている。例えば、島田忠臣の詩について、比較表現を調べてみたが、詩の総数が二百首で少ないにしても、忠臣には、比較表現そのものが無く、この点については、白居易の影響は全く見られない。

道真以前では、忠臣こそは最も白居易の詩の影響を強く受けた人だから、道真が、思想や精神においても、表現技法の面においても、どれほど深く、高いレベルで白詩のそれを摂取しているかということがわかるのではないだろうか。

## 第二章 菅原道真の子供を詠ずる詩

### 第一節 はじめに

本章では、道真の子供を詠じた詩における、白居易の「比較表現」の受容、及び白居易の詩に似て、日常的、具体的で、描写が細密だという特徴を確認したい。

道真の子供については正確なことはわかっていない。川口氏は、「前田家本『菅家伝』によると、[子、男女二十三人有り]としるすが、尊卑分脈の菅原氏系図では、高視以下男子十一人、寧子以下女子三人、計十四人をしるす。そのほか夭折した阿満という男の子とその弟、西府で失せた少男がいる……道真にも何人かの側室があったかと思われるが、後年天神の神格化の過程で一切の資料は抹殺されでもしたのであろうか」<sup>24</sup>と述べている。

菊池寛氏『太宰府と菅公』<sup>25</sup>の道真以後の系図によれば、高視、衍子、景行、兼茂、淳茂、景鑑、舊風、弘茂、宣茂、淑茂、滋殖、寧子、女子の名が挙げられている。尊卑分脈の菅原氏系図と比べると、寧茂の名が無い。

遠藤泰助氏『菅原道真と天満天神』<sup>26</sup>の道真以降の系譜によると、高視、衍子、景行、兼茂、淳茂、景鑑、弘茂、宣茂、寧子と九人の名前を並べ、すべて二十三人だと述べている。

坂本太郎氏によると、「北野天神御伝」には、子男女二十三人あったとしている<sup>27</sup>。

---

<sup>24</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・38頁。

<sup>25</sup> 菊池寛『太宰府と菅公』（岩波書店、一九四三年）。

<sup>26</sup> 遠藤泰助『菅原道真と天満天神』（帝国出版協会、一九四四年）。

<sup>27</sup> 坂本太郎『菅原道真』（吉川弘文館、一九九二年）。

以上、正確なことは不明だが、男女合わせて二十三人という説が有力なようである。

道真詩には、子供に関する詩作約十四首が現存している。道真が家学の承継者として子供に対しての家学、文章道の継承への望み、また父親としての子供へのさまざまな温かい思いを歌っている。

## 第二節 子供を論ずる詩における比較表現の受容について

道真の詩作には、しばしば子供に対する温かい思いが詠われている。それは、多くが、同時に自らを慰め癒す歌でもある。例えば次の詩である。

延喜元年(九〇一)、五十七歳、道真が太宰府にいる時、483「慰少男女」という、子供たちを慰めるとともに、自らを癒す詩が作られた。道真は太宰府に赴任する時、女子のうち年配の者はすべて京に留めおかれ、四人の男子はそれぞれ流謫された。幼少の子だけが、配所への同伴を許されたのである。

衆姉惣家留	<sup>あまた</sup> 衆の姉は惣て家に留まれり
諸兄多謫去	<sup>もろもろ</sup> 諸の兄は多く謫せられ去にぬ
少男與少女	<sup>おきな</sup> 少 <sup>おのこ</sup> き男と少 <sup>むすめ</sup> き女とのみ
相隨得相語	相隨いて相語ること得
晝飡常在前	晝は <sup>ものく</sup> 食うに常に前に在り
夜宿亦同處	夜は <sup>い</sup> 宿ぬるに亦 <sup>ま</sup> た處を同じくす
臨暗有燈燭	暗きに臨みては燈燭あり
當寒有綿絮	寒きに當たりては綿絮有り

往年見窮子 往きし年 窮れる子を見たりき

京中迷失據 京の中に迷いて 據<sup>よりどころ</sup>を失えり

裸身博奕者 身を裸にして博奕する者

道路呼南助 道路 南助<sup>なんすけ</sup>と呼べり

南大納言子、内蔵助、博徒。今猶号南助也矣。

南大納言の子、内蔵助、博徒なり。今猶お号<sup>なづ</sup>けて南助といえり。

徒跣彈琴者 徒跣<sup>かちはだし</sup>にして琴を弾く者

閭巷稱弁御 閭巷 弁の御と稱<sup>とみな</sup>えり

俗謂貴女爲御。蓋取夫人女御之義也。藤相公兼弁官、故称其女也。

俗に貴女を謂いて御と爲す。蓋し夫人女御<sup>ふじんにようご</sup>の義に取るならん。藤相公弁官を兼ね、故に其の女<sup>むすめ</sup>を称えり。

其父共公卿 其の父は共に公卿にして

當時幾驕倨 當時 幾ばくか驕り倨<sup>おご</sup>れりし

昔金沙土如 昔は金をも沙土の如くなりき

今飯無饜飫 今は飯にすら饜<sup>あ</sup>き飫くことなからん

思量汝於彼 汝を彼らに思量するに

天感甚寛恕 天感 甚しく寛恕なり

川口氏は、この詩について、「こうして悲慘の極北にあるときにも、精神のバランスをとろうとして思索をめぐらす、幼少の男女を慰めるよりも自分自身を慰めるに似る」<sup>28</sup>と評する。

---

<sup>28</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・729頁。

一句から四句。大人の娘たちはそれぞれの家に留め置かれて、息子たちはそれぞれのところに流謫された。ただ幼い子たちだけが、私に従ってきて語りあうことができる。この四句は、自分が原因で、子供たちに申し訳ないと思う気持ちを述べるとともに、幼子が共にいることで、慰められる思いを表している。

五句から八句。昼はご飯と一緒に食べることができるし、夜も同じところで眠ることができる。暗くなれば、灯燭があり、寒くなれば、暖かい綿絮の衣服もある。この四句は、逆境ではあるが、なんとか暮らしてゆけることをいう。

第九句、十句は、かつて都にいる時、貧しい子供の姿を見たことがあるという。窮迫して、途方にくれ、生活の糧も失って、さすらっていた。この二句、上を受けて、おまえたちはまだ幸せだといい、以下、知人の子供の悲惨な例を挙げる。

十一句から十四句。着る服も無く、裸で賭け事を夢中にするのは、世間の人々が「南助」と呼んだ子。南助は南淵大納言年名の子で、内蔵助良臣。はだしで琴を弾いて、乞食をするのは「弁御」（弁の娘の意）と呼ばれた子。自注に拠れば、「藤相公」という「弁官」（太政官）を兼ねていた人の娘。「藤相公」が誰かは特定できない。

十五句から十八句。私と彼らの父親は共に公卿であり、彼らはとてもおごりたかぶっていた。当時の彼らには、黄金も土砂のようなものであったものが、今は腹を満たすご飯もない。

第十九、二十句。おまえたちを彼らと比べると、天から恵みをうけて、寛大に許されていると思うのだ。

結句には、第一章に前述した、白居易の「讓歩－比較－肯定」という定式化

された表現方法を学んでいる。自分も子供も不遇(譲歩)だが、かつて栄華を誇った都の官僚の子供、「南助」・「弁御」の落ちぶれているのに比べると(比較)、「甚寛恕」だ(肯定)という。

この詩における白居易詩の影響について、以下の白詩よりさらに確認する。

構造として、例えば「各おの文姫有りて才かに稚齒、俱に通子の餘塵を繼ぐ無し。琴書は何ぞ必しも王粲を求めん、女に与うるは猶お外人に与うるに勝れり」(「2319「餘思未盡、加爲六韻、重寄微之」)は、君も私も男児がおらず、幼少の女子がいるだけだが(譲歩)、王粲のような血のつながりのない才子に琴書を与えるよりは(比較)、娘でも我が子に与えるのがいい(肯定)、という構造になっている。

また、「兒無きは薄命なりと雖も、妻有りて偕に老いたり。幸いに生きながら離別するを免る、猶お商陵氏に勝れり(無兒雖薄命、有妻偕老矣。幸免生別離、猶勝商陵氏)」(2215「和微之聽妻彈別鶴操、因爲解釋其義、依韻加四句」というのは、男児はいないけれども(譲歩)、離縁をさせられた商陵氏に比べれば(比較)、別れずにとともに老いている私たちはまさっている(肯定)という構造である。

さらに以下の詩、

白髮長興歎	白髮	長 <sup>つね</sup> に歎きを興 <sup>おこ</sup> し
青娥亦伴愁	青娥	亦た愁いを伴 <sup>とも</sup> にす
寒衣補燈下	寒衣	燈下に補 <sup>つくろ</sup> い
小女戲床頭	小女	床頭に戯むる

闇澹屏幃故      闇澹として屏幃故り  
淒涼枕席秋      淒涼として 枕席 秋なり  
貧中有等級      貧中 等級有り  
猶勝嫁黔婁      猶お黔婁<sup>はんろう</sup>に嫁ぐに勝れり

(1015「贈内子」)

これは元和十三年（八一八）、白居易が司馬として江州に左遷されている時、妻に贈った詩である。年はとるし、貧乏で左遷の身だが(讓歩)、春秋の黔婁の貧乏に比べたら(比較)まし(肯定)だという。

この詩は、「慰少男女」に、表現の方法だけでなく、語句においても影響を与えている。道真の五、六句「晝食常在前、夜宿亦同處」は、白居易の「小女戲床頭」を、七、八句「臨暗有燈燭、當寒有綿絮」は、白居易の「寒衣補燈下」を、いずれも二句に引き伸ばしたものである。

澤崎は白居易のこの比較表現について、「白居易にとっては自己（あるいは他者）救済の意欲に基づいた、主観的意識的・選択的な表現手法であったと思われる。」と論じている。

道真が「慰少男少女」において、まず自分たちの不幸を述べ(讓歩)、それを他人の事と比べ(比較)、最後「思量汝于彼、天感甚寛恕」と、自分の窮境を肯定するのは、白居易に学んでいるのである。

道真は無罪なのに、太宰府に貶謫された。子供たちも幼い子二人しか側にいない、ほかの子は男の子が様々なところへ流謫され、女の子が妻と家に残された。太宰府の配所に暮らした道真は、生活は苛酷だし、「父と子と一時に五處に

離れていた（父子一時五處離）」（477「詠樂天北窓三友詩」）悲しみ、「妻子が飢寒の苦しみを言わず、是れが爲に還た愁え余を懊惱せしむ（不言妻子飢寒苦、爲是還愁懊惱余）」（488「讀家書」）というような京にある家族への心配もあって、道真の心はあまりにも苦しんだ。道真は、白居易の樂觀の精神に励まされようとして、白居易の「讓歩一比較一肯定」の図式を学んで、自身の悲慘な気持ちを押さえたのであろうか。

### 第三節 家学、文章道の継承への望みと子供に対する勸戒

道真は、元慶元年（八七七）に、式部少輔に任ぜられ、文章博士になっている。元慶三年（八七九）、『後漢書』を教えた時、以下の詩がある。

我是瑩瑩鄭益恩	我は是 <small>けいけい</small> 瑩瑩たる <small>ていえきおん</small> 鄭益恩
曾經折桂不窺園	曾て <small>せきけい</small> 折桂を経て <small>うかが</small> 園を窺はず
文章暗被家風誘	文章は <small>ほのか</small> 暗に家の風に誘わる
吏部偷因祖業存	吏部は <small>ひそか</small> 偷に祖業の存するに因る

文章博士非材不居。吏部侍郎有能惟任。自余祖父降及余身、三代相承、兩官無失。故有謝詞。

もんじょうはかせ 文章博士は材に非ずは居らず。吏部侍郎は能有らばこれ任ず。余が祖父より くだ 降りて余が身に及ぶまで、三代相承けて、つかさうしな 兩つの官失へりしこと無し。かるがゆゑ 故に謝詞有り。

勸道諸生空赧面	<small>すす</small> 勸め <small>い</small> 道う <small>おもて</small> 諸生空しく <small>あから</small> 面を赧めんより
從公萬死欲銷魂	<small>こう</small> 公に従いて萬死 <small>け</small> 魂を銷さんと欲す



小兒年四初知讀　　小兒年四つ　初めて讀むことを知る

恐有疇官累末孫　　恐るらくは　ちゅうかん 疇官のまつそん 末孫にかさな 累ること有らんこと

(082「講書之後、戲寄諸進士」)

第一句「鄭益恩」は鄭玄の一人子。『後漢書』卷六五「鄭玄伝」に「玄に唯だ一子益恩有り（玄唯有一子益恩）」とある。私は兄弟のない一人っ子である鄭玄の息子鄭益恩と同じ境遇だの意。

第二句、「折桂」は対策の試験に及第すること。晋の郗詵が、進士の試験に及第した時、桂の林のうちのほんの一枝を折ったに過ぎないといった故事に基づく。『晋書』「郗詵伝」に、「詵對えて曰く、臣の賢良対策に挙げられて、天下第一と爲るは、猶お桂林の一枝、崑山の玉片のごとし（詵對曰、臣挙賢良対策、爲天下第一、猶桂林之一枝、崑山之片玉）」とある。「不窺園」は、董仲舒が受験勉強のため三年間、自分の家の庭の野菜をも見なかったことをいう。『漢書』

「董仲舒伝」に、「景帝の時に博士になった。帷を垂らして講義をし、その弟子は順次古参の者から学業を習い受けるという風で、中には師匠の顔を見たことのない者があった。三年というもの間、裏の畑を窺き見ることがなかったという。それほどに学問に精励した（孝景時爲博士。下帷講誦、弟子伝久以久次相授業、或莫見其面。蓋三年不窺園、其精如此）」<sup>29</sup>とある。この二句、そのように、私も、必死に勉学に専念したの意。

第三、四句は、文章博士に任ぜられたのは父祖伝来の家風のおかげであり、式部少輔に任ぜられたのも、父祖の業績があるためであることをいう。「文章博

---

<sup>29</sup> 本田濟『中国古典文学大系 漢書・後漢書・三国志列伝選』（平凡社、一九六八年）16頁。

士は材に非ずは居らず、吏部侍郎は能有りて惟れ任ず。余が祖父自り降りて余が身に及ぶまで、三代相い承けて、両つの官をば失うこと無し。故に謝詞有り」という自注は、道真が家学を非常に誇っているとともに、自分にもそれを継ぐ「材」と「能」があるという自負心を示しているだろう。

第五、六句は、必死に勉強し、今の地位を勝ち取った自信がいわせている。書生諸君、君たちも、私と同じように真剣に勉強し、公にお仕えしなさい。川口氏によると、「公は三公、摂政大臣基経をさすであろう」<sup>30</sup>。

第七、八句は、我が子が今年四歳にしかないのに、読書し始めた。これを見れば、菅家伝来の官職は我が家の末の世の子孫までも伝えられるだろう。「小児」は高視のこと。「疇官」は、世襲の官職。また、官職を伝え譲ること。『史記』「亀策伝」に、「父子官を疇ぎ、世世相い傳うと雖も、其の精微深妙は、多く遺失する所（雖父子疇官、世世相傳、其精微深妙、多所遺失）」とある。

この詩は道真が必死に勉強し、文章博士となったことを背景として、家学を誇り、自らもそれを担うだけの力があるとの自負心を表している。また、自分の子供を自慢する思いも結句に見える。なお、「分脈によれば、高視の子雅規、文時共に文章博士」<sup>31</sup>となっている。

道真は、さらに次の詩を作っている。

男愚女丑稟天姿      おのこご      男は愚かにして女は醜し      天に稟けたる姿なるのみ  
依禮冠笄共失時      よ      禮に依る冠笄      共に時を失えり  
寒樹花開紅艷少      かんじゅ      寒樹花開きて      紅艷少なり

<sup>30</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・172頁。

<sup>31</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・656頁。

暗溪鳥乳羽毛遲      暗溪鳥乳して      羽毛遅し  
 家無擔石應有我      家に擔石なく      我に由るべし  
 業有文章欲附誰      業に文章有り      誰にか付けんとする  
 此事雖同窮老歎      此の事      窮れる老いの歎きに同じと雖も  
 適言其子客情悲      適ま其の子のことを言えば      客の情ぞ悲しむ

(260「言子」)

この詩は、仁和四年(八八八)、道真が讃岐守として在任中、都に残した子供らを思って作ったものである。川口氏より、「我が愛児を京にのこしておいて、赴任先で客居する身の上からよんで、真情が流露する」<sup>32</sup>と評している。

この「言子」は、陶淵明の「責子」に「五男児有りと雖も、総て紙筆を好まず」というのを意識して、自嘲的な処がある(後述)。

第一、二句。息子は愚鈍で、娘は醜い。これは天から承けたままの姿だから仕方がない。私が受領として都から離れて、成人式の息子の加冠元服の祝いも、娘の笄をさす着裳の儀式もともに時期を過ぎてしまった。「稟天姿」は、自分とそっくりと言うこと。「依禮冠笄共失時」には、子供たちにすまないとの気持ちがにじみ出ている。

第三、四句。冬の枯木に花が咲いても、その花は紅の艶色もすくない、娘はこの艶色が少ない寂しい花だ。日光が少なく暗い谷間にいる雛鳥は、育っても羽毛のはえるのも遅い、息子はこのおくてのたちらしい。二句には詩人の自嘲の口ぶりが感じられる。「紅艶」は、花の艶やかさを形容している。白居易には

<sup>32</sup> 川口久雄校註・前掲註(5)・308頁。

0415「秋題牡丹叢」に「紅艷 久しく已に歇き、碧芳<sup>へきほう</sup> 今亦た銷す（紅艷久已歇、碧芳今亦銷）」の「紅艷」を用いた句がある。

第五、六句。家には少しの蓄えも無く、彼らはすべて私をたよりとするしかない。我が菅原の家には代々の家の学、文章道があるのだが、これを誰に授けたらよいだろうか。道真はやはり家学と文章道を大切に、受け継ぐ人がいないと心配する。「担石」は、白居易 2985「北窗三友」に「或いは檐石<sup>たぐわえ</sup>の儲<sup>たくわえ</sup>に乏しく、或いは帶索<sup>たいさく</sup>の衣<sup>ころも</sup>を穿<sup>うが</sup>つ（或乏檐石儲、或穿帶索衣）」と、同じ用例が見える（『白氏文集』は「檐」に作る）。「業有文章欲附誰」は白居易 2820「予與微之老而無子、發爲詠歎、著在詩篇。今年冬、各有一子。戲作二什、一以相賀、一以自嘲」に「一園の水竹 今主と爲る、百卷の文章 更に誰にか付せん（一園水竹今爲主、百卷文章更付誰）」とあるのを意識しているだろう。また上掲 2319「餘思未盡、加爲六韻、重寄微之」に「各おの文姫有りて才かに稚齒<sup>わすめ</sup>、俱に通子の餘塵を繼ぐ無し。琴書は何ぞ必しも王粲（他家のすぐれた学者）を求めん、女<sup>むすめ</sup>に與うるは猶お外人に與うるに勝れり（各有文姫才稚齒、俱無通子繼餘塵。琴書何必求王粲、與女猶勝與外人）」とあるのは、琴書すなわち自分の学問、教養を継いでくれる男児がいなくてさびしいのだが、女兒でも赤の他人に与えるよりはましだと自らを慰めている。白居易のこうした思いに、道真もきっと共感する所があっただろう。

第七、八句。子供の事を考えれば心配でならない、これは貧しく老いてゆく嘆きと同じようだが、こうして子供のことを口に出すと、都から離れて暮らす悲哀がいつそうこみあげてくる。

この「言子」は、まず自嘲の口ぶりでさえない子供たちのことを述べ、また

自分が一番大事にしている家業を受け継ぐ人がいるだろうかと心配し、最後に、自分がいま貧しく老いてゆく上に、旅人として都へ帰れないという悲哀を訴えている。

そして、家学を子孫に伝えたいとする道真の思いは、白居易が自分の学問と教養を男児に伝えたいと思う、その思いへの深い共感とともにあったこともわかる。

ただし、上で少し触れたが、この詩は、家学を伝えたいとする思いでは、白居易への共感を主としつつも、詩全体の構想としては、陶淵明の「責子」の影響を、強く受けている。「責子」を見ておこう。

白髪被兩鬢	白髪は <small>りょうびん</small> 兩鬢を被い
肌膚不復實	肌膚 <small>またゆたか</small> 復た実ならず
雖有五男兒	五男兒有りと <small>いふど</small> 雖も
總不好紙筆	總べて 紙筆を好まず
阿舒已二八	<small>あじよ</small> 阿舒は 已に二八なるに
懶惰故無匹	懶惰なること <small>まこと たぐい</small> 故に匹無し
阿宣行志學	<small>あせん</small> 阿宣は <small>ゆく</small> 行志學なるも
而不愛文術	<small>しか</small> 而も文術を愛さず
雍端年十三	<small>ようたん</small> 雍と端とは 年十三なるも
不識六與七	六と七とを <small>し</small> 識らず
通子垂九齡	<small>とうし</small> 通子は 九齡に <small>なんな</small> 垂んとするに
但覓梨與栗	但だ梨と栗とを <small>もと</small> 覓むるのみ

天運苟如此　天運　いやしくも此かくの如くんば

且進杯中物　しばらく杯中の物を進めん

(『陶淵明集校箋』卷三「責子」<sup>33)</sup>)

第一、二句。白髪が左右の鬢を覆い、皮膚も皺だらけになった。

二句から十二句。男の子が五人もいるのに、誰も勉強を好まない。阿舒は十六歳だが、無類の怠け者。阿宣は十五歳なのに文章学問が好きではない。雍と端は十三歳だが、数字さえも区別できない。通子はすぐ九歳だが、梨や栗などの食べ物を探すことをするばかりだ。ユーモアたっぷりに誇張して、子供の将来を心配している。

そして結びの句。これが運命だというのなら、仕方がない、とりあえずお酒を飲んで、くよくよするのはやめましょう。

詩人はまず老いを嘆く。もう子供たちの面倒をどれだけ見ることができるかわからないというのに、みんな愚かで、心配でならない。父親としての慈愛がたくみに表現された有名な作品である。淵明のこの詩は、道真の「言子」の前半に吸収されている。淵明の「天運苟如此」は、道真の第一句「男愚女醜稟天姿」を生むヒントになっているだろう。そして後半は、白居易の影響を受けているだろう。

道真の「言子」は、主題においても、表現においても、白居易の子供への思いと、陶淵明の子供への思い、この両者を融合して作られている。

なお、寛平八年(896)、五十二歳、民部卿として多忙な日々の中での作 437「北

---

<sup>33)</sup> 陶淵明の本文は、龔斌校箋『陶淵明集校箋』(上海古籍出版社、一九六六年)による。

堂文選竟宴、各詠史、句、得乘月弄潺湲」に、「惣て名利を<sup>すべ</sup>貪らんが爲なり、亦た子孫を憂うるに依る（惣爲貪名利、亦依憂子孫）」といい、子孫のことを気にかけるのは、家学、文章道が、きちんと子孫に受け継がれていくだろうかとの不安の表れだろう。

また、昌泰四年（九〇一）、五十七歳、太宰府での作 477「詠楽天北窓三友詩」に「詩友は獨り留まる眞の死友、父祖子孫久しく要期す（詩友獨留眞死友、父祖子孫久要期）」といい、詩こそは私の死ぬまでの友、わが父祖と子孫とは詩で結ばれているというのも、家学、文章道こそが家系を綿綿と貫く道であるとの自覚の表れであるとともに、自分の死後、それが途絶えるかも知れないとの恐れが、なにがしかは含まれていると見てよいだろう。

実際には、道真の子孫も、道真の期待の通りに、菅家の家学と文章博士の職分を継承した。長男高視は「博学洽文」といわれ、その第二子は文時といい、文章博士となり従三位に叙せられ、「菅三品」と呼ばれた。高視から八代の孫は為長といい、鎌倉時代の文章博士となり、正二位にまで昇った。道真の第四子は淳茂といい、文章博士、大学頭、式部権大輔に任ぜられ、『菅家伝』には「庶子淳茂継業」といわれ、大江匡房から「淳茂は家名をおとさない人だ」とほめられている立派な学者である。道真の子孫は代々、博士を受け継ぎ、菅家の家学を伝えたのである。

#### 第四節 子供を悼む詩

元慶七年（八八三）、三十九歳の道真は、この年夭折した阿満とその弟の二人の悼む詩を詠じた。

阿滿亡來夜不眠

阿<sup>あ</sup>滿<sup>まろ</sup> 亡<sup>し</sup>にてよりこのかた 夜も眠らず

偶眠夢遇涕漣漣

偶<sup>たま</sup>ま眠れば夢に<sup>あ</sup>遇いて 涕<sup>なみだれんれん</sup>漣漣たり

身長去夏餘三尺

身の長<sup>い</sup> 去にし夏は<sup>さんじゃく</sup>三尺に餘れり

齒立今春可七年

齒<sup>は</sup>立ちて 今の春は七年なるべし

從事請知人子道

事に從いて 人の子の道を知らんことを請う

讀書諳誦帝京篇

書<sup>ふみ</sup>を讀みて 帝京篇<sup>ていきやうへん</sup>を諳誦したりき

初讀賓王古意篇。

初め賓王が古意篇を讀みたりき。

藥治沈痛纔旬日

藥<sup>ちんつう</sup>の沈痛<sup>おさ</sup>を治むること 纔<sup>わずか</sup>に旬日<sup>じゅんじつ</sup>

風引遊魂是九泉

風<sup>ゆうこん</sup>の遊魂<sup>きゆうこん</sup>を引く 是れ九泉<sup>きゆうせん</sup>

尔後怨神兼怨佛

尔<sup>それ</sup>より後<sup>のち</sup> 神を怨み兼ねて佛<sup>ほとけ</sup>を怨みたり

當初無地又無天

當初<sup>そのかみ</sup> 地無くまた天も無かりき

看吾兩膝多嘲弄

吾が兩つの膝を看て 嘲弄<sup>ちやうろう</sup>すること多し

悼汝同胞共葬鮮

悼<sup>なんじ</sup>まくは 汝<sup>はらから</sup>が同胞の共に 鮮<sup>わかじに</sup>せるを葬れることを

阿滿已後、小弟次夭。

阿<sup>よりのち</sup>滿<sup>わか</sup>已後、小<sup>よう</sup>弟次いで夭せるなり。

萊誕含珠悲老蚌

萊<sup>らいたん</sup>誕は 珠<sup>ふく</sup>を含みて 老蚌<sup>ろうほう</sup>を悲きびき

莊周委蛻泣寒蟬

莊周<sup>そうしゅう</sup>は 蛻<sup>ぬけがら</sup>を委めて 寒蟬<sup>かんせん</sup>に泣けり

那堪小妹呼名覓

那<sup>な</sup>んぞ堪えん 小妹<sup>しょうまい</sup>の名を呼びて覓<sup>もと</sup>むるに

難忍阿孃滅性憐

忍<sup>しの</sup>び難<sup>がた</sup>し 阿孃<sup>あじょう</sup>の性を滅<sup>めつ</sup>して憐れむに

始謂微微腸暫續

始め謂えらく 微微として腸<sup>はらわた</sup>暫く續くと

何因急急痛如煎

何に因りてか 急急に痛むこと煎<sup>い</sup>るがとき

桑孤戸上加蓬矢

桑孤<sup>そうこ</sup>は戸の上 蓬矢<sup>ほうし</sup>を加う



竹馬籬頭著葛鞭	ちくば まがき ほとり かつべん 竹馬は籬の頭 葛鞭を著く
庭駐戲栽花舊種	庭には戯に花の舊き種を栽えしを駐めたり
壁殘學點字傍邊	壁には學して字の 傍 の邊に點ぜしを殘せり
每思言笑雖如在	げんしょう 言笑を思うごとに 在るが如くなれども
希見起居惣惘然	き きょ 起居を見ることを希えば 惣べて惘然たり
到處須彌迷百億	到處 須彌 百億に迷わん
生時世界暗三千	うま 生るる時 世界 三千ぞ暗からめ
南無觀自在菩薩	な む かん じ ざい ぼ ぎつ 南無觀自在菩薩
擁護吾兒坐大蓮	おう ご 吾が兒を擁護して 大きな蓮に坐させたまえ

(117「夢阿滿」)

この「夢阿滿」は道真が父親として、幼い子供が無くなった時の深い沈痛と哀切をよく表現している。川口氏は、「切々たる悲痛の情、日本文学作品のうち、亡き児を痛む作の、これに匹敵する抒情詩的達成があるであろうか」<sup>34</sup>と評価している。

一句から四句。詩はまず、幼子が亡くなった時から、道真が眠れなくなっている状態を述べる。たまたま眠ったと思えば、夢の中で阿滿に出会い、涙が出てしまう。三・四句。この子は昨年の夏には身長が既に三尺に余り、今年は七歳になるはずだった。

第五、六句。けなげにも、しっかり勉強して、人の子の道を学びたいといい、『帝京篇』を暗誦するほどであったのだ。この二句には、子供が、自分と同じ

<sup>34</sup> 川口久雄校註・前掲註(5)・668頁。

ように家業である文章博士を継いでくれるだろうという期待が見える。その思いは、ただ一人の男児崔兒を亡くした時の白居易の詩 2881「初喪崔兒報微之晦叔」の結びに、「文章 十帙 官 三品、身後 誰にか傳え誰をか庇廕せん（文章十帙官三品、身後傳誰庇廕誰）」とあるのと同じだろう。

第七、八句。だが、薬がおまえの痛みをなんとか鎮めたのはわずかに旬日、病の風がおまえを黄泉の国に連れて行ってしまった。第七句は、白居易が娘をわずか三歳で亡くした時の詩、0776「病中哭金鑾子」に「病みてより来のかた纔に十日、養い得ること已に三年（病來纔十日、養得已三年）」とあるのを自ずと採り入れている。

第九、十句。おまえたちを失ってから、神をも仏をも恨んだ。当初は、この世界が無くなったようだった。

第十一、十二句。我が両膝を見れば、ここに子供を乗せてやっていたことを思い、なぜおまえたちを救えなかったのかと自らを嘲る、二人をともに葬ったことが悲しい。

第十三、十四句。解に苦しんでいるが、藤原氏よれば、「萊誕含珠悲老蚌」の「萊誕」は「韋誕」とするテキストがある<sup>35</sup>。『三国志』卷十魏書「荀彧伝」建安元年の記事「唯嚴象は揚州と爲り、韋康は涼州と爲るも、後に敗亡せり（唯嚴象爲揚州、韋康爲涼州、後敗亡）」の裴松之注に、韋康・韋誕の二人の兄弟がどちらも優れていたのも、孔融が二人の父親韋端に、「<sup>おも</sup>意わざりき雙つの珠、近ごろ老蚌に出ず、甚だ之れを珍貴す（不意雙珠、近出老蚌、甚珍貴之）」、あなたのような年老いたはまぐりからこのような二つの真珠がとれようとは、といった故事を記す。道真の一句は、これにより、韋康・韋誕の二人の兄弟にも

<sup>35</sup> 藤原克己『菅原道真・詩人の運命』（ウェッジ、二〇〇二年）。

比すべき我が子らを相次いで失った悲しみをいう。「莊周委蛻泣寒蟬」の「委蛻」は、『莊子』「知北遊」に、「性命は汝の有に非ず、是れ天地の委順なり。孫子は汝の有に非ず、是れ天地の委蛻なり（性命非汝有、是天地之委順也。孫子非汝有、是天地之委蛻也）」とある。莊子は、子供は天地から仮に委ねられた蟬の脱け殻のようなもので自分の所有物ではないというが、やはり子を失っては泣かずにはおれないの意。

この二句のヒントも、上掲「初喪崔兒報微之晦叔」に「蟬は老いて悲鳴す蛻を抛つなげうの後、龍眠は驚き覺さむ珠たまを失う時（老悲鳴抛蛻後、龍眠驚覺失珠時）」とある。我が子をぬけがらに喩え、珠たまに喩える、全く白詩と同じである。

第十五、十六句。妹がおまえの名を呼び、母親が死ぬ思いでおまえのことを悲しんでいるのを見るに堪えない。

第十七、十八句。子を失った悲痛を腸が激しく痛むと表現している。この二句も、崔児が亡くなったのを哭す白詩 2890「哭崔兒」の「悲腸自ずから断つは劍に因よるに非ず（悲腸自斷非因劍）」を意識しているだろう。

十九句から二十二句。おまえの誕生を祝った桑の木の弓は戸にかけてあり、竹馬が籬のほとりにあり、くずで作った鞭もつけてある。庭にはおまえが戯れに種を植えたものが今は花咲き、壁には字を練習してそばに訂正した点が残っている。

第二十三、二十四句。どれもこれもがおまえたちが生きていたときのままだ。語り笑うおまえたちの顔は眼前にあるかのようだ。だが、その姿を見たいと思っても、おまえたちはいない。

十七句から二十四句までのこの数句も、上掲白居易 0776「病中哭金鑾子」に

「慈涙は聲に隨して<sup>ほとばし</sup>り、悲腸は物に遇いて<sup>ひ</sup>牽かる。故衣は猶お架上、殘葉は尚お頭邊（慈淚隨聲迸、悲腸遇物牽。故衣猶架上、殘葉尚頭邊）」と、悲しみを腸の傷みで表し、生前の子供ゆかりのものがそのまま眼前にあるのを見て、悲しみがつきあがるというこの数句を下敷きにしてアレンジしたものである。

二十五句から二十八句。阿満の魂は、今ごろ須弥山のほとりで無数の道に迷っているのではなかろうか？輪廻を脱することができず、父の知らない三千世界のどこかでまた生まれ変わるのだろうか？南無觀世音大菩薩、どうか我が子を守って、極樂浄土の大きな蓮の上に坐らせてやってください。

以上、道真が夭折した我が子を悼む詩を詠うにあたり、白居易が我が子を亡くした悲しみを詠った詩を意識していることを確認した。従来は、崔児の死を悼む詩の影響が強調されていたが、それだけではなく、女兒金鑾子を失った時の白詩の表現も採り入れられているのである。

道真の一生は不遇な事が多かった。太宰府に赴任の時、幼な子だけを伴うことを許されたが、幾人かの子が病気、あるいは營養不足が原因で亡くなっている。次は、延喜二年（九〇二）、童子という男の子の死を悼む作。

床頭展轉夜深更	床の <sup>とこ</sup> 頭 <sup>ほとり</sup> に展轉 <sup>てんでん</sup> して 夜 <sup>しんこう</sup> 深更なり
背壁微灯夢不成	壁に <sup>そむ</sup> 背 <sup>かすか</sup> けたる微 <sup>とほしび</sup> なる 灯 <sup>とほしび</sup> に夢も成らず
早雁寒蛭聞一種	早 <sup>かり</sup> き雁 <sup>こご</sup> も寒 <sup>きりぎりす</sup> えたる 蛭 <sup>きりぎりす</sup> も 聞くに一種
唯無童子讀書聲	唯 <sup>どうじ</sup> た童子 <sup>ふみ</sup> の書 <sup>ふみ</sup> を讀む聲のみなし

童子小男幼字、近曾夭亡。

童子は<sup>しょうなん</sup>小男<sup>あざな</sup>が幼<sup>ちが</sup>き字<sup>よろぼう</sup>、近曾夭亡せり。

(503「秋夜」)

第一、二句、亡くなった幼な子を思うと、床の上に何度も寝返りをうち、夜がふけていくばかり、壁に寄せておいた微かな灯火を見つつ、眠ることができない。この二句は、白居易の 0131「上陽白髮人」に「秋の夜は長し、夜は長く寐ぬること無くして天は明けず、耿耿たる残りの燈の壁に背きたる影(秋夜長、夜長無寐天不明、耿耿殘燈背壁影)」とあるのを意識している。また二句の「夢不成(目がさえて眠れなくなる)」は、白居易 1208「後宮詞」(一説に王建作)に「涙 羅巾を<sup>うるお</sup>溼して夢成らず(淚溼羅巾夢不成)」と見え、3291「酬夢得霜夜對月見懷」にも「枕上佳句に酬ゆ、詩成りて夢成らず(枕上酬佳句、詩成夢不成)」と見える。これは唐詩に散見する表現であるけれども、道真は白居易の詩に学んだのだろう。

第三、四句、秋、雁の訪れる声も、きりぎりすの寒げな声もみな去年と同じように聞こえるが、我が子の本を読む声のみ聞こえない。

川口氏によれば、「童子というのは、俗に坊主というように、単なる愛称として通称していたのであろう」<sup>36</sup>とのことである。「この男の子を配処に伴って、  
「少き男女を慰む」(拙文後掲)の詩を作ってはげましたり、読書を指導したりしていたのであろうが、食糧不足、おそらく栄養失調で若死にをさせてしまったのであろう。表現の上層面に悲しみ悼むことばがないだけに、いっそう内にたたえられた悲しみはきびしくいたましい」<sup>37</sup>。

「秋夜」は、「夢阿満」と同じく、ほかのものはすべてそのままだが、我が子

<sup>36</sup> 川口久雄校註・前掲註(5)・518頁。

<sup>37</sup> 川口久雄校註・前掲註(5)・738頁。

だけがここにいないという対比的な表現によって自分の深い悲しさをいう。この表現方法は、上に述べたように白居易に学んだものである。この詩全句、白居易の影響を深く受けて作られている。

## 第五節 まとめ

道真は父親として、様々な詩に愛情をよく表現している。仁和二年（八八六）、道真四十二歳、讃岐での作、211「同諸小兒、旅館庚申夜、賦靜室寒燈明之詩」には、「四五更より来<sup>こ</sup>のかた一事無し、咲<sup>わら</sup>いて看る兒輩の詩を吟ずるを學ぶを（四五更來無一事、咲看兒輩學吟詩）」、地方勤めの愁いの故に夜眠ることもできず、夜中から明け方には無聊を極める、子供たちが詩を吟ずるまねをするのを見て心がほぐれるのだ。ここには、家学を伝えようとしている道真の姿も見えるが、心中、悩み愁いに満ちているのだが、子供によって癒される父親のイメージを活写している。

この他、249「春日獨遊其三」に「日長くして久しく眠り居るを得ず、出でて諸兒を引きて且つ読書す（日長不得久眠居、出引諸兒且讀書）」と、子供たちと遊び、本を読む喜びを語り、280「元日戲諸小郎」に「珍重す行年五九の春、憐れむべし兒輩二三人（珍重行年五九春、可憐兒輩二三人）」、可愛い子供たちよ、四十五歳と年を重ね白髪がめだってきている自分に屠蘇を勧めてくれなくてもいいよといい、また 360「假中書懷詩」に「女兒は内義に<sup>なら</sup>遵い、外孫は阿耶<sup>あや</sup>を逐う（女兒遵内義 外孫逐阿耶）」、娘たちは妻にみならい、外孫はその父にならっている、などという、皆な道真の慈しみ深い、優しい親のイメージが自ずと表れている。

また讃岐での作 261、「讀家書有所歎」に「兒病みて先ず悲しむ遠吏爲るを（兒病先悲爲遠吏）」といい、大宰府での作、488「讀家書」に「妻子が飢寒の苦しみを言わず、是れが爲に還た愁え余を懊悩せしむ（不言妻子飢寒苦、爲是還愁懊悩余）」などというのは、家族と引き裂かれている悲しみとともに、妻子に対して申し訳ないとの思いを述べていて、やさしく情の深い、夫、親のイメージがよく表れている。

道真のさまざまな子供に関する詩作を見ることにより、道真の子供に対する愛情の深さ、父としての側面をよく知ることができた。道真は、子供が大好きで、日頃の彼の生活を子供の存在が潤していること、太宰府へ左遷された時、困境の中に白居易の「比較表現」を意識して、自分と子供を慰めたいこと、子供が亡くなった時には、天も地も無くなるかと思うほどの悲痛を感じていること、家学を誇り、これが子供に継承されるようにとの期待と不安に抱いていること等々、やさしく、情の深い父親のイメージを、道真の詩の随所に見ることができた。また、これらの詩作の内に、白居易の詩の深い影響があることも、確認することができた。

## 第二部 見立て表現を中心として

### 第一章 道真詩における「雪」の見立て

#### 第一節 はじめに

前述のように、『菅家文草』の初めの一首は 001「月夜見梅花」で、雪、月、梅花を詠ずる習作である。『菅家後集』の巻末最後の一首は 514「謂居春雪」で、また雪、月、梅花を素材として詠じたものである。川口氏は、「十一歳の処女作が梅花の詩、この絶筆の詩また満月の春雪の中に梅花の幻想をよむ、首尾照応せりと評する人もある。」<sup>38</sup>と述べている。「雪月花」は白詩に「雪月花の時最も君を憶う」(2565「寄殷協律」)と見える白居易の造語である。道真における白詩の受容を考察するに当たっては、「雪月花」の表現を精密に比較研究しなければならない。

本章では、雪に関する比喻表現を糸口として、道真がどのように白詩の影響を受けているのかを考察する。

#### 第二節 喩詞としての雪

道真の詩作において、雪が喩詞として表れる詩作は十八首ある。

01. 月耀如晴雪 月のかがや耀くは晴れたる雪の如し

梅花似照星 梅花は照れる星に似たり

(001「月夜見梅花」)

---

38 川口久雄校註・前掲註(5)・739頁、514補注1。



輝く月は晴れている時の雪の光のようだという。道真が十一歳の時に作ったもので、「予始めて詩を言えりき（予始言詩）」との自注がある。

02. 十月取時仙雪絳      十月    取る時に    仙雪絳し  
三春見處夭桃紅      三春    見る處    夭桃紅なり  
雪衢暴錦星辰織      雪衢    錦を暴して    星辰織る  
鳥路成橋造化工      鳥路    橋を成して    造化工なり

（004「賦得赤虹篇、一首」）

十月に赤虹をみる時には、赤い仙雪がふったかと思間違える。春にこの赤い虹を見る時には、紅の桃が咲いたかと思う。雪の積もった道で虹を見る時には、錦をさらして、星の形をちりばめたかと誤ってしまう。また、渡り鳥の雲居の空遠く渡って行く道にかかった宇宙の神が架けた橋かと思われる（川口氏訳を参照）。

03. 涙迷枝上露      涙は迷う    枝の上の露  
粧誤絮中雪      粧いは誤る    絮の中の雪

（007「賦得折楊柳、一首」）

美人の化粧は、柳絮の中の雪のようだという。化粧を柳絮と見立て、また柳絮の中の雪と見立てている。同様の比喻表現は、白詩には、「峨峨たる白雪の花（峨峨白雪花）」（0112「有木詩八首」）、「柳色煙の如く絮雪の如し（柳色如煙絮如雪）」（0167「新樂府 隋堤柳」）、「雪廻りて風絮を旋らす（雪迴風旋絮）」（2257「和微之詩二十三首 和三月三十日四十韻」）、「楊柳花飄る新白雪（楊柳花飄新白雪）」（3065「酬舒三員外見贈長句」）、「白雪花繁くして空しく地を撲ち、緑絲條弱くして鶯に勝えず（白雪花繁空撲地、緑絲條弱

不勝鶯）」（3140「楊柳枝詞八首 三」）などに見える。

また、本詩の「葉<sup>さえぎ</sup>りて鬢<sup>わけ</sup>更に亂る、絲<sup>き</sup>剪れて腸<sup>はらわた</sup>俱に絶ゆ。若し羌<sup>きやう</sup>に入る音<sup>おとず</sup>れあらば、誰か行子<sup>たびと</sup>の別れに堪えん（葉遮鬢更亂、絲剪腸俱絶。若有入羌音、誰堪行子別）」には白居易の「楊柳枝詞」の影響が見られる（第四章で後述する）。

04. 消殘砌雪心猶誤 消え残る<sup>みざり</sup> 砌の雪に心は猶<sup>あやま</sup>お誤つ

挑盡窓燈眼更嫌 挑<sup>か</sup>げ盡<sup>つく</sup>す窓の燈<sup>とほしび</sup>に眼は更に嫌<sup>うたが</sup>う

（036「山陰亭、冬夜待月」）

砌に残る雪を、月が出たと見誤り、雪を月の光と見立てている。白詩に、「嵩山<sup>すうざん</sup>表裏<sup>せんちやう</sup> 千重<sup>らくすい</sup>の雪、洛水<sup>りやうか</sup>高低<sup>たま</sup> 兩顆<sup>たま</sup>の珠（嵩山表裏千重雪、洛水高低兩顆珠）」（3182「八月十五日夜同諸客玩月」）という句がある。嵩山に満ちる月の光を雪が山を蔽っているようだという。道真は白居易の影響を受けているだろう。

05. 嬌眼曾波風欲亂 嬌<sup>こ</sup>びたる眼<sup>まなこ</sup>は波<sup>かさ</sup>を曾<sup>かぜみだ</sup>ねて 風亂れんとす

舞身廻雪霽猶飛 舞える身は雪を<sup>めぐら</sup>廻<sup>は</sup>して 霽<sup>は</sup>れても猶お飛べり

（148「早春内宴、侍仁壽殿、同賦春娃無氣力、應製一首」）

川口氏が、「雪の舞いひるがえるように舞うさま。白居易、新樂府、胡旋女に[迴雪飄颻轉蓬舞、左旋右轉不知疲。]とある」<sup>39</sup>と既に指摘している。この句と白詩の関連については後述する。

06. 飛疑秋雪落 飛びて秋の雪の落つるかと思ひ

集談浪花句 集りて浪の花の句<sup>かた</sup>うことを談らう

（171「水鷗」）

水鷗の群が飛ぶのを見て、秋なのに雪が降るようだという。白い水鷗の群を

39 川口久雄校註・前掲註（5）・677頁、148補注27。

雪に見立てている。白詩には、「驚き出す白蝙蝠、雙び飛んで雪の翻るが如し（驚出白蝙蝠、雙飛如雪翻）」（0264「遊悟眞寺詩」）など、鳥を雪に見立てる用例がある。また、「浪花」については、白詩に「鷓鴣は雲帆を帶びて動き、鷗は雪浪に和して翻る（鷓鴣帶雲帆動、鷗和雪浪翻）」（1367「東樓南望八韻」）、  
「風は白浪を翻して花千片、雁は青天に點じて字一行（風翻白浪花千片、雁點青天主一行）」（1378「江樓晚眺景物鮮奇吟玩成篇寄水部張員外」）という句がある。道真の水鷗が浪花のようだという発想は、白詩の影響を受けているだろう。なお、ほぼ同時期の歌人大江千里の『句題和歌』に「おきつよりふきくるかせはしらなみのはなとのみこそみえわたりけれ」とあり、ここにも白詩の影響を受けての「浪の花」の表現が見える。

07. 臨盃管領幾迴春 さかずき 盃に臨みて幾迴の春を管領する

雪鬢霜髯欲換身 せつびんそうぜん み 身に換えんと欲す

（175「謝道士勸恒春酒」）

人の白髪を雪と見立てるのは、白詩において用例がかなり多い。この詩において、道真に酒を勧めた道士は鬢が雪のように白く、ひげが霜のように白い（後述する）。道士の鬢の色の白さを雪と見立てて、長寿の象徴としている。ところで、川口氏は、「管領」について、「白居易の詩に[金谷風光依舊在、無人管領石家村]とある」<sup>40</sup>と指摘している。

08. 舍低應道星穿壁 舍は低くして道はまし 星の壁を穿つかと

山近猶疑雪照帷 山は近くして猶お疑う 雪の帷を照すかと

（211「同諸小兒、旅館庚申夜、賦靜室寒燈明之詩」）

<sup>40</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・680頁、175補注2。白詩は「金谷の風光舊に依りて在り、人の石家の春を管領する無し」（2390「早春晚歸」）という句がある。

燈が輝くのを、雪が帳の帷子を照らすようだという。燈の光を雪と見立てている。

09. 路遇白頭翁 路に白頭<sup>はくとう</sup>の翁に遇う

白頭如雪面猶紅 白頭雪の如く面<sup>おもて</sup>猶<sup>くれな</sup>お紅なり

(221「路遇白頭翁」)

白髪が雪のようだという。白詩においては、雪で、髪・ひげを比喻して、嘆老の一種の象徴とする用例が、五十例以上の多数に上る（本節の二の一に後述する）。この詩は、全体として、白詩の 0133「新樂府、新豐折臂翁」の影響を受けている。本句は、「新豐<sup>しんぽう</sup>の老翁八十八、頭鬢<sup>とうびん</sup>眉鬚<sup>びしゅ</sup>皆雪に似たり（新豐老翁八十八、頭鬢眉鬚皆似雪）」を意識しているだろう。

10. 月色猶迷臘雪殘 月色 猶<sup>まだ</sup>お迷<sup>ろう</sup>う 臘雪<sup>ろうせつ</sup>殘れるかと

自知春淺我心寒 自<sup>おのずか</sup>らに知る 春淺くして我が心寒きことを

(241「正月十日、同諸生吟詩」)

用例 01、04 と同じく月の光を雪と見たてる用例である。月の光を昨年の十二月の残った雪かと疑っている。この詩の第三句、「若し花口をして能く言語せしめば（若教花口能言語）」は、白居易の「若し此の花をして兼ねて語を解せしめば（若使此花兼解語）」(0760「酬和元九東川路詩十二首 山枇杷花二首」)をほとんどそのまままねている。

11. 在地輕雲縮 地<sup>ところ</sup>に在りては 輕<sup>かる</sup>き雲<sup>しじま</sup>縮る

非時小雪寒 時<sup>な</sup>非らずして 小<sup>すこ</sup>しき雪<sup>ゆき</sup>に寒<sup>こご</sup>えたり

(257「法花寺白牡丹」)

牡丹の花を薄雲と雪に見立てている。白詩には、「白雲葉を離れ雪枝<sup>じ</sup>を辭す

（白雲離葉雪辭枝）」（0650「惜玉蕊花有懷集賢王校書起」）という句がある。

白居易は白が好きで<sup>41</sup>、花を雪と見る例が十六例ある。また首聯の「色は即ち貞白たり、名は猶お牡丹と喚ぶ（色即爲貞白、名猶喚牡丹）」は、白詩の「素華は人顧みざれども、亦た牡丹の名を占む（素華人不顧、亦占牡丹名）」（0031「白牡丹」）、「白花冷淡 人の愛する無きも、亦た芳名を占めて牡丹と道う（白花冷淡無人愛、亦占芳名道牡丹）」（0848「白牡丹」）と関連があるだろう。

12. 地疑星隕宋 地は星の宋に隕ちたるかと疑い

庭似雪封袁 庭は雪の袁を封じたるが似し

（269「寄白菊四十韻」）

白菊の花を雪のようだと見立てている。前述のように<sup>42</sup>、白詩には、雪を花に見立てている句が十六首ある。しかし、白詩においては、被喩詞としての花は牡丹、桜、梅、桃などであるが、菊は被喩詞になっていない。道真は白居易の雪を花に見立てる技法を摂取して、被喩詞の範囲を拡大したのである。

13. 山疑小雪微微積 山 疑うらくは 小しき雪の微微として積るかと

水誤新冰漸漸生 水 誤つらくは 新しき氷の漸漸に生ずるかと

（275「冬夜對月憶友人」）

月の光が山を照らす様子が、雪が積もっているようだという。前述用例 04 に述べた通り、白詩には「嵩山表裏千重雪、洛水高低兩顆珠」（3182「八月十五日夜同諸客玩月」）という句がある。道真は白詩のこの句を意識している

<sup>41</sup> 白居易の「白」への愛好については、西村富美子「白居易における《白》に対する意識の二重構想—姓の《白》及び色彩の《白》—」（愛知県立大学外国語学部『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』第三三号、二〇〇一・三）が詳しく論じている。

<sup>42</sup> 白詩において、雪を花と比喩する句は、前述用例 12 に挙げています。

だろう。

14. 春雪紛紛繞柳枝 春の雪は紛紛として柳の枝を<sup>めぐる</sup>繞る  
見知老絮陌頭垂 見て知んぬ 老いたる絮<sup>わた</sup>の陌<sup>みち</sup>の頭<sup>ほとり</sup>に垂るることを  
(394「柳絮」)

柳絮を雪と見立てている。白詩の影響は前述用例 03 に述べた通りである。

15. 雪鬢同年分岸老 雪鬢 年を<sup>ひと</sup>同しくして 岸<sup>きし</sup>を分ちて老いぬ  
風情一道望雲交 風情 道を一<sup>おな</sup>じくして 雲を望みて<sup>まじわ</sup>交れり  
(419「客館書懷、同賦交字、呈渤海裴令大使」)

白髪が雪のようだという。(詳細は本節の二の一に後述する) この句は、白詩 3628「酬寄牛相公同宿話舊勸酒見贈」の「彼此相看るに頭雪のごとく白し、一杯<sup>まさ</sup>合に重ねて推辭すべけんや(彼此相看頭雪白、一杯可合重推辭)」を意識している。

16. 落梅曲舊唇吹雪 <sup>らくばい</sup>落梅 <sup>きよくふ</sup>曲舊りて <sup>くちびる</sup>唇 <sup>ゆき</sup>雪を吹く  
折柳聲新手掬煙 <sup>せつりゅう</sup>折柳 <sup>おと</sup>聲新たに<sup>にぎ</sup>して手 煙を掬る  
(434「春日行幸神泉苑、同賦花間理管絃、應製」)

道真が侍宴したときの作である。この二句は、『和漢朗詠集』卷下「管絃」の部立に収められた。「梅の花が咲き、柳の枝が緑の間で管絃を奏し、落梅の古い曲を吹けば梅の花が雪のように演奏者の唇から落ちようかと思われ、折柳の曲を新たに奏する時は、その琴を弾く手に煙のような柳の緑を掬んででもいるかと思われる」<sup>43</sup>という意味である。音を雪に喩えている。実に艶っぽい。

また、白詩に、「<sup>ろくようすいちよう</sup>六么水調 <sup>か か</sup>家家唱え、白雪梅花 <sup>しよしよふ</sup>處處吹く。<sup>こ か きゅうきよく</sup>古歌舊曲 君<sup>き</sup>聽

<sup>43</sup> 大曾根章介、堀内秀晃校註『和漢朗詠集』(新潮社、一九八三年) 178 頁。「落梅」は「梅花落」、樂府曲、笛の曲。「折柳」は「折楊柳」、琴の曲。

くを休<sup>やめ</sup>よ、聴取<sup>ちようしゅ</sup>せよ 新翻<sup>しんほん</sup>の楊柳枝<sup>ようりゅうし</sup>（六么水調家家唱、白雪梅花處處吹。古歌舊曲君休聽、聴取新翻楊柳枝）」（3138「楊柳枝詞」八首）という句がある。

白詩においては、「白雪」、「梅花」、「楊柳枝」は曲名であり、道真の作においても「落梅」、「折柳」は曲名である。道真は、明らかに白詩の影響を受けている。ただし、白居易が「白雪」、「梅花」の古い曲をやめて、新曲の「楊柳枝」を聞こうというのに対して、道真は、「落梅」の古い曲が終わったら、「楊柳」の新曲を聞こうと詠っている。さらに、道真は、「陽春白雪」と「楊柳」の曲の名を動詞のように使って、道真自身の独創的な素晴らしい表現を生みだしている。

17. 蹉跎<sup>さた</sup>鬢雪<sup>びんせつ</sup>與心灰<sup>しんばい</sup> 蹉跎<sup>さた</sup>たり 鬢雪<sup>びんせつ</sup>と心灰<sup>しんばい</sup>と

不覺春光何處來 覺えず 春光<sup>いず</sup>何れの處<sup>ところ</sup>よりか來たれる

（467「海上春意」）

白い髪を雪と見立てている。白詩の影響は前述の用例 12 で述べた。白詩には、「灰死して我が心の如く、雪白うして我が髪<sup>かみ</sup>の如し（灰死如我心、雪白如我髮）」（0456「送兄弟迴雪夜」）という句がある。

18. 鬢倍春初雪 鬢は 春の初めの雪に倍<sup>まさ</sup>れり

心添臘後灰 心は 臘<sup>ろう</sup>の<sup>のち</sup>後の灰を添う

（494「歳日感懷」）

同じく、白髪を雪と見立てている。

以上、道真の雪を喩詞とする例を摘出し、白詩との関係を簡単に指摘しておいた。

以下、これらの表現を類別して並べてみる。

被喩詞	題名
白鬢（髪、頭）	用例 07、175「謝道士勸恒春酒」 用例 09、221「路遇白頭翁」 用例 15、419「客館書懷、同賦交字、呈渤海裴令大使」 用例 17、167「海上春意」 用例 18、494「歲日感懷」
月の光	用例 01、001「月夜見梅花」) 用例 04、036「山陰亭、冬夜待月」 用例 10、241「正月十日、同諸生吟詩」 用例 13、275「冬夜對月憶友人」
柳絮	用例 03、007「賦得折楊柳、一首」 用例 14、394「柳絮」
赤虹	用例 02、004「賦得赤虹篇、一首」
舞う様	用例 05、148「早春内宴、侍仁壽殿、同賦春娃無氣力、應製一首」
水鷗	用例 06、171「水鷗」
燈の光	用例 08、211「同諸小兒、旅館庚申夜、賦靜室寒燈明之詩」
白牡丹	用例 11、257「法花寺白牡丹」
菊	用例 12、269「寄白菊四十韻」
音	用例 16、434「春日行幸神泉苑、同賦花間理管絃、應製」

道真の詩作において、「白鬢（白髪、白頭）」を雪と見立てるのは五例、用例 07、09、15、17、18 である。例は既に上に挙げた。ここでは、「白鬢（白髪、白頭）」の喩詞として再掲する。



07. 臨盃管領幾迴春 <sup>さかずき</sup>盃に臨<sup>いくたび</sup>みて幾迴の春を管<sup>かんりよう</sup>領する

雪鬢霜髯欲換身 <sup>せつびんしょうぜん</sup>雪鬢霜髯 身に換えんと欲す

(175「謝道士勸恒春酒」)

09. 路遇白頭翁 路に<sup>はくとう</sup>白頭の翁に遇う

白頭如雪面猶紅 白頭雪の如く面<sup>おもて</sup>猶<sup>くれな</sup>お紅なり

(221「路遇白頭翁」)

15. 雪鬢同年分岸老 雪鬢 年を<sup>ひと</sup>同しくして 岸<sup>きし</sup>を分ちて老いぬ

風情一道望雲交 風情道を<sup>おな</sup>一じくして 雲を望<sup>まじほ</sup>みて交れり

(419「客館書懷、同賦交字、呈渤海裴令大使」)

17. 蹉跎鬢雪與心灰 <sup>さ</sup>蹉<sup>た</sup>たり <sup>びんせつ</sup>鬢雪と<sup>しんばい</sup>心灰と

不覺春光何處來 覺えず 春光何れの處よりか來れる

(467「海上春意」)

18. 鬢倍春初雪 鬢は 春の初めの雪に<sup>まさ</sup>倍れり

心添臘後灰 心は <sup>ろう</sup>臘の<sup>のち</sup>後の灰を添う

(494「歳日感懷」)

雪を喩詞として、白髮（鬢、髯、頭、毛、鬚を含む）を雪と見立てるのは、白居易以前の詩人の作品中、『全唐詩』では全部で三十一首である。その内訳は、主な詩人について見ると、李白二首、杜甫が二首、司空曙が二首、韓愈一首、劉禹錫一首、元稹一首である。それが、白詩では五十二例の多きに達する。主なものを挙げておこう。

元和七年（八一二）、白居易が四十一歳の時の作 0254「哭する者を聞く」に、

「乃<sup>すなわ</sup>ち知る<sup>し</sup>浮世<sup>ふせい</sup>の人、白髮<sup>はくはつ</sup>を垂<sup>た</sup>るるを得<sup>う</sup>ること少<sup>まれ</sup>なるを。余<sup>よ</sup>今<sup>いま</sup>四十を過ぐ、彼

を<sup>おも</sup>念うて聊<sup>いささか</sup>か自ら悦ぶ。此れより明鏡<sup>めいきよう</sup>の中、頭<sup>こうべ</sup>の雪に似るを嫌はじ（乃知浮世人、少得垂白髪。余今過四十、念彼聊自悦。從此明鏡中、不嫌頭似雪）」とある。これは近所の家の夫や娘が夭折しているのを見ての思いを述べている。第一部第一章で論じた、譲歩（世間では若死にする人が多い）→比較（彼らと比べると自分は白髪になるほどに長く生きている）→肯定（白髪でもいい）の図式を示している。

五十代の作 1340「白髪」は次のように詠う。

雪髪随梳落	雪髪 <sup>せつぱつ</sup> 梳 <sup>くしげず</sup> るに随 <sup>したが</sup> いて落ち
霜毛繞鬢垂	霜毛 鬢 <sup>めぐ</sup> を繞 <sup>た</sup> りて垂る
加添老氣味	老 <sup>おい</sup> の氣味を加添し
改變舊容儀	舊 <sup>もと</sup> の容儀 <sup>ようぎ</sup> を改變す
不肯長如漆	肯 <sup>あえ</sup> て長 <sup>うろし</sup> く漆 <sup>ごと</sup> の如くならず
無過總作絲	總 <sup>すべ</sup> て絲 <sup>いと</sup> と作 <sup>な</sup> るに過 <sup>す</sup> ぐる無し
最憎明鏡裏	最 <sup>にく</sup> も憎 <sup>めいきよう</sup> む 明鏡 <sup>うち</sup> の裏
黑白半頭時	黑白 頭 <sup>こうべ</sup> に半 <sup>なかば</sup> なる時

これは長慶二年（八二二）、五十三歳の時、杭州での作である。髪を梳<sup>くしげず</sup>れば、雪のような白髪が櫛に随って落ち、年よりもいっそう老けてみえる。いっそのこと全部まっ白になれば、すっきりする。気に食わないのは、明るい鏡の中、黑白相半している自分の頭を見ることだ。この詩は、白髪を「雪」「霜」「絲」に喩えている。一首中で、一つの被喩詞についてさまざまな喩

詞を用いるのは、後掲「西樓喜雪命宴」にも見える。白詩の技法の一つの特徴かと思われる。

六十代の作 3304「六十六」には、「七十に四歳を欠く、此の生<sup>なん</sup>那ぞ論ずるに足らん。毎<sup>つね</sup>に物故を悲しむに因りて、還って且身の存するを喜ぶ。……痩せて腰金の重きを覚え、衰えて鬢雪の繁きを憐む。何を將って老病を理めん、應に空門に付與すべし（七十欠四歳、此生那足論。毎因悲物故、還且喜身存。……瘦覺腰金重、衰憐鬢雪繁。將何理老病、應付與空門）」という。開成二年（八三七）、六十六歳の時、洛陽での作である。年老いたことを認めつつ（讓歩）、周囲の人々が死んでいくのに比して（比較）自分は生きているのを喜んでいる（肯定）。

七十代、会昌二年（八四二）、七十歳の作 3571「喜入新年自詠」には、「白鬢雪の如し 五朝の臣、又た値う 新正第七句（鬢如白雪五朝臣、又値新正第七句）」という。この詩は、会昌二年の新春を迎えたことを喜び、病後に命をもちこたえたこと、長年かけて高位に登ったことへの満足を詠っている。

以上、白居易が白髪を雪に喩える例の一部を見た。白詩においては、白髪を詠うことは常に自分の現況を確認する役割を果たしている。そして、それを他と比較して、現況を幸いとする、それが白詩の一種の図式である。

道真も、白居易のこうした自分の現況を気にかける詩を意識して、次のような作を詠じている。

心情不減氣猶寬      心情減らず      氣は猶お寛<sup>ゆたか</sup>なり

誰許班毛放若干      誰か      班毛<sup>はんもう</sup>若干<sup>そこばく</sup>を放つことを許さん

鵝毳鏡中分影白	鵝 <sup>がさい</sup> 毳 <sup>は</sup> 鏡 <sup>かがみ</sup> の中 <sup>うち</sup> に分 <sup>ぶん</sup> 影 <sup>えい</sup> 白 <sup>しろ</sup> し
霜毫鐻下寸芒寒	霜 <sup>そう</sup> 毫 <sup>ごう</sup> は鐻 <sup>けぬき</sup> の下 <sup>もと</sup> に寸 <sup>すん</sup> 芒 <sup>もう</sup> 寒 <sup>さ</sup> えたり
早衰蒲柳雖同顧	早 <sup>はや</sup> 衰 <sup>おとろ</sup> うる蒲柳 <sup>ほりゆう</sup> は同じく顧 <sup>かえり</sup> みるといえども
初見春秋已過潘	初めて見る春秋 <sup>はるあき</sup> は已 <sup>はん</sup> に潘 <sup>す</sup> を過 <sup>す</sup> ぎにたり
口未生鬢多食蔗	口未 <sup>くみ</sup> だ鬢 <sup>はな</sup> を生 <sup>は</sup> ぜず多く蔗 <sup>あまづら</sup> を食 <sup>しょく</sup> す
頭將少髮苦彈冠	頭 <sup>こう</sup> 髪 <sup>べかみ</sup> 少 <sup>すく</sup> からんとして苦 <sup>ねんごろ</sup> に冠 <sup>かんむり</sup> を弾 <sup>はじ</sup> く
怪來日日形容變	怪 <sup>あやし</sup> 來 <sup>し</sup> むらくは日日 <sup>かたちありさま</sup> 形 <sup>かたち</sup> 容 <sup>ありさま</sup> の變 <sup>あらたま</sup> れること
祇是行行世路難	祇 <sup>まさ</sup> に是 <sup>こ</sup> れ行 <sup>な</sup> 行 <sup>ん</sup> 世路 <sup>せろ</sup> の難 <sup>なん</sup>
筋力莫言年幾老	筋力 <sup>きんりよく</sup> 言 <sup>い</sup> う莫 <sup>な</sup> かれ年 <sup>よ</sup> 幾 <sup>わい</sup> 老 <sup>お</sup> いたりと
四旬有五豈凋殘	四 <sup>し</sup> 旬 <sup>しゅん</sup> 有 <sup>ゆう</sup> 五 <sup>ご</sup> 豈 <sup>ちやう</sup> に凋 <sup>せん</sup> 殘 <sup>ざん</sup> ならんや

(301「白毛歎」)

これは道真が讃岐にいる時の作。意味は大略以下の通りである。

氣力はまだ衰えていない、ざんばら髪にして致仕なぞできない。鏡の中には鷺鳥のこげ、毛抜きには芒のように細い白髪。私も潘岳と同じく蒲柳の質だが、白髪が初めて見えたのは潘岳の三十二歳より後だ。頬にはまだ鬢は生えていない、養生のために砂糖黍を食べる（川口氏「存疑」とする）。だんだん髪が少なくなってきた出勤するとき丁寧に冠の塵をはじく。なんとまあ日々顔かたちが変わっていく、まさにこの世は苦しいことばかりだ。だが、力が弱くなっているなどとは思わない、四十五歳はまだ枯れる年齢ではないはずだ。

白詩にも、上に掲げたように、五十代に「白髪」と題する作があり、他に二首「白髪」と題する作がある。道真は白居易のこれらの詩を意識しつつ、四十

五歳で「301 白毛歎」を作ったのである。「怪來むらくは 日日形容の變れること（怪來日日形容變）」は白詩の「老の氣味を加添し、舊の容儀を改變す（加添老氣味、改變舊容儀）を意識するだろう。また「初めて見る春秋は已に潘を過ぎにたり（初見春秋已過潘）」は、もう一首の 0424「白髮」の「白髮の生ずること已に遅し（白髮生已遲）」を意識するだろう。そして、鏡に向かい、自分の白髮を見て、青春を愛惜し、老いを嘆く作は、唐詩人中、白居易に一番例が多い。鏡に向かって白髮を詠う詩は、道真にもう一首 254「對鏡」があり、やはり白居易の鏡を見ての詩を意識するだろう。なお、「四句有五豈凋殘」と、年齢を表現するのも、白詩にしばしば見える「二十有九 帝位に即き、三十有五 太平を致す（二十有九即帝位、三十有五致太平）」（0125「七德舞」）、「爾と父子と爲る、八十有六旬（與爾爲父子、八十有六旬）」（0469「念金鑾子二首」）のような言い方を学んでいる。

やはり誰でも、はじめて鏡で自分の白毛を見るのはショックだろう。道真はこの、人ならば誰もが味わう思いを、特に白居易に共感しつつ詠じたのである。

ただし、白居易の人生哲学には、樂觀主義が終始存在している。だから、白詩においては、白髮を詠ずる時、青春への愛惜、嘆老の思いが表現されるのは当然として、それとともに、何々よりまだましだという現状肯定の表現がよく見られるのである。即ち、第一部の比較表現において確かめた、「讓歩」→「比較」→「肯定」（現況受容）の表現パターンが、白髮を詠じた詩にも見えるのである。

これに対して道真は、白居易の嘆老惜春の意識の影響を深く受けているが、

しかし、白詩においては白髪表現の一類型にもなっている、譲歩→比較→肯定の図式を道真に見出すことはできない。それはなぜかという、やはり白居易と道真の人生観が本質的に違うからである。白居易は一生を通して、「兼済」という、政治的な面で自己の生きがいを実現することと、また一人の人間として「独善」、人として生まれて味わえるさまざまな喜びと、この二つを追求し続けた。だから、たとえ政治の面で志が実現できなくても、人生の喜びを獲得しようとして、積極的・楽観的に生き続けたのである。これに対して道真は、少年時代から、天皇の側にあつて詩臣であることを、人生の最高の誇りであると思いつづけた。道真の場合、左遷とは、天皇の側から離れることであり、それは同時に自己実現の道を失うこと、生きがいを無くすことだったのである。それゆえ、他と比較しての楽観的な表現は、道真において、白居易のように常時現れることはないのである。

道真は若いころ、受験の準備をしている時、次の前述の用例 03 に一部を挙げた、007「賦得折楊柳、一首」の詩を作った。

佳人芳意苦	佳人 芳意 <sup>ねんごろ</sup> 苦なり
楊柳先攀折	楊柳 <sup>ま</sup> 先ず <sup>ひ</sup> 攀き <sup>お</sup> 折る
應手麴塵輕	手に應じては <sup>きくじん</sup> 麴塵輕し
候顔青眼潔	<sup>おもて</sup> 顔を <sup>うかが</sup> 候いては <sup>せいがんいさぎよ</sup> 青眼潔し
淚迷枝上露	淚は <sup>まど</sup> 迷う 枝の上の露
粧誤絮中雪	<sup>よそおい</sup> 粧 は <sup>はな</sup> 誤る 絮の中の雪

纖指柔英斷　　纖<sup>ほそ</sup>き指　　柔<sup>やわらか</sup>なる英<sup>はなぶさ</sup>を斷<sup>た</sup>つ

低眉濃黛刷　　低れる眉　　濃<sup>まゆずみ</sup>き黛<sup>かいつくろ</sup>を刷<sup>う</sup>

葉遮鬢更亂　　葉　　遮<sup>さいき</sup>りて鬢<sup>わけ</sup>　　更に亂る

絲剪腸俱絕　　絲　　剪<sup>き</sup>れて腸<sup>はらわた</sup>　　俱<sup>た</sup>に絶<sup>た</sup>ゆ

若有入羌音　　若し　　羌<sup>きょう</sup>に入る音れあらば

誰堪行子別　　誰か　　行<sup>たび</sup>子の別<sup>びと</sup>れに堪えん。

意味は大略以下の通り。美人は春の訪れとともに恋人を思慕する気持ちをつのらせ、贈り物にする楊柳の枝をひき折ってみる。手でひき折ると、楊柳の黄に青みを帯びた花の花粉が軽くあがり、折られた楊柳の枝は美しい青眼をもって彼女の顔をうかがう。彼女の眼には涙がゆっくりとにじみ青柳の枝に結ぶ露かと疑われ、その艶やかな化粧は楊柳の中の白雪かとみまがうばかり。細い指で柔らかな花房を手折る、折った青柳の枝は春愁のためにひそめてたれた佳人の眉に濃い黛が塗られたようだ。柳の葉は彼女の面を遮って、彼女の鬢に結んだ髪が乱れる、青柳の糸は細くてきれやすく彼女も断腸の思いである。もし思う人からはるか胡地の境に入るという便りがとどいたならば、旅にある人との別離の思いに堪えられる人があろうか（川口氏訳を参照）。

貞観三年（八六一）、時に年十七歳の道真は、受験勉強で学業に専念している。胡地の羌音、恋人との別れなど、ほとんどは書物からイメージしたものだろう。後の道真の作、「花なくして舞妓怨みを含まんことを欲す、枝有りて行人折りて腸<sup>はらわた</sup>を斷つ（花無舞妓欲含怨、枝有行人折斷腸）」（438「賦新煙催柳色、應製」）にも、「楊柳枝」と「美人」と「腸を斷つ」とのイメージの組み

合わせが見える。それは、白居易が妓女のために作った 3138—3145「楊柳枝詞」と、3190「楊柳枝二十韻」結句の「纏頭(妓女へのほうび)は別物無し、一首斷腸の詩」の影響を、深く受けているからだと思われる。この「楊柳枝」と「美人」と「腸を斷つ」とのイメージの組み合わせと白居易との関連については、第四章に後述する。

道真は、148「早春内宴、侍仁壽殿、同賦春娃無氣力、應製一首」(用例 05)に、「嬌<sup>こ</sup>びたる<sup>まなこ</sup>眼は波<sup>かさ</sup>を曾<sup>かぜみだ</sup>ねて風亂さんとし、舞える身は雪を廻<sup>めぐ</sup>らして霽<sup>は</sup>れても猶お飛べるがごとし(嬌眼曾波風欲亂、舞身廻雪霽猶飛)」と、美人が舞う姿を雪が飄えるのに見立てている。この詩全体は、白居易の影響を受けつつ、細やかな技法を駆使して、舞妓の美しさを描写している。この点についても、第四章に後述する

道真は白詩の表現をよく摂取しているが、「美人」に関する表現には、道真の創意が見られる。白詩においては、「雪」を喻詞として美人を形容する詩は多い。例えば、「彼の<sup>こうかい</sup>沆瀣<sup>せい</sup>の精を吸い、凝りて冰雪<sup>よう</sup>の容と爲る(吸彼沆瀣精、凝爲冰雪容)」(0209「題贈鄭秘書徵君石溝溪隱居」)、「塵埃<sup>じんあい</sup>の衣<sup>ころも</sup>を抖<sup>と</sup>藪<sup>そう</sup>し、冰雪<sup>ひようせつ</sup>の顔を禮拜<sup>れいはい</sup>す(抖藪塵埃衣、禮拜冰雪顔)」(0264「遊悟眞寺詩」)、「中に<sup>いちにん</sup>一人あり太眞と字<sup>あざな</sup>す、雪膚<sup>せつふ</sup>花貌<sup>かぼう</sup>參差<sup>しんし</sup>として是<sup>これ</sup>なり(中有一人字太眞、雪膚花貌參差是)」(0596「長恨歌」)など。

だが、道真は、直接「雪」で美人を比喻するのではなく、美人の化粧と結びつけて、新しい美人を比喻する表現を作り出している。前述の「涙は迷<sup>まど</sup>う枝の上の露、粧<sup>よそおい</sup>は誤<sup>あざな</sup>る絮<sup>はな</sup>の中の雪(涙迷枝上露、粧誤絮中雪)」だけではなく、用例 24 の「粧<sup>よそお</sup>える妓<sup>みもと</sup>は自らに顔<sup>おもて</sup>の粉の落ちたるかと疑う、宿<sup>よべ</sup>よりの醒<sup>よ</sup>



いは偏<sup>ひとえ</sup>に眼<sup>まなこ</sup>の花の飛ぶかと誤つ（粧妓自疑顔粉落、宿醒偏誤眼花飛）」（339

「十月十一日、禁中初雪、應製」）も同じ表現技法である。

道真は白居易の表現を学んで、雪を喩詞として美人を比喻する。その上、道真はさらに工夫を加えた「雪」を美人の化粧に見立てて、新たな見立て表現を創出した。

### 第三節 被喩詞としての雪

以下、雪を何かに喩える表現を見よう。

雪を何かに喩える表現は、十一例ある。

19<sup>44</sup>．冰封水面聞無浪 冰は水面を封して 聞くに浪無し

雪點林頭見有花 雪は林頭に點じて 見るに花有り

（002「臘月獨興」）

枝の上の雪が、遠くから見ると花のようだという。花を雪と見立てている詩作は、白詩においては、前述のように多い。この詩は、雪を花と見立てる作である。白詩には、「城柳方<sup>まさ</sup>に花を綴<sup>つづ</sup>り、檐冰纔<sup>えんびようわずか</sup>に穂<sup>ほ</sup>を結ぶ（城柳方綴花、檐冰纔結穂）」（0276「江州雪」）の句がある。

20．冰紈寸截輕粧混 冰紈 寸に截りて輕き 粧 混り

玉屑添來軟色寬 玉屑 添え來たり 軟 なる色寬なり

雞舌纔因風力散 雞舌 纔に風力に因りて散じ

鶴毛獨向夕陽寒 鶴毛 獨り夕陽<sup>せきよう</sup>に向いて寒し

（066「早春侍宴仁壽殿、同賦春雪映早梅、應製」）

<sup>44</sup> 用例の番号は前節の用例番号に続く。

雪は被喩詞として、「玉屑」、「鶴毛」に比喩されている。白詩には、「大は鵝毛を落すに似たり、密は玉屑<sup>ぎよくせつ</sup>を飄<sup>ひるがえ</sup>すが如し（大似落鵝毛、密如飄玉屑）」（0029「春雪」）の句がある。雪を「鵝毛」と見立てるのは、『全唐詩』において、白居易の用例が一番多い。『全唐詩』において、雪を「鶴毛」と見立てる用例は、王建、盧仝、雍陶、兪鳧、李洞の五人に見えるが、白居易より前および同時代の詩人である王建、盧仝らは、白居易のような大詩人ではないから、やはり道真は白居易の影響を受けているだろう。

21. 怪問寒童懷軟絮      怪しみて問う      寒<sup>こご</sup>えたる童<sup>わらべ</sup>の軟<sup>なごやか</sup>なる絮<sup>わた</sup>を懷<sup>いだ</sup>くかと  
驚看疲馬蹈浮雲      驚きて見る      疲れたる馬の浮べる雲を蹈<sup>ふ</sup>むかと  
（073「雪中早衙」）

雪が童子の服に付いた柔らかな綿絮のようであり、地上の雪をまるで雲のようだという。綿ではないが、白詩には、同じく布に喩えたものに、「四郊 縞素を鋪<sup>し</sup>く（四郊鋪縞素）」（2445「西樓喜雪命宴」）、擣衣碓<sup>とうい</sup>上<sup>ちんじょう</sup> 練<sup>れん</sup>新たに鋪く（擣衣碓上練新鋪）」（2322「雪中即事寄微之」）の例がある。

22. 溫液寒凝暗有期      溫き液も寒<sup>ひややか</sup>に凝<sup>むな</sup>りて暗しく期<sup>き</sup>すること有り  
驚看銀粉滿茅茨      驚きて銀<sup>しろかね</sup>の粉<sup>ぼうし</sup>の茅茨に滿つるを看る  
立於庭上頭爲鶴      庭上に立てば      頭鶴となり  
居在爐邊手不龜      居<sup>すわ</sup>りて爐邊にあれば      手龜<sup>かがま</sup>らず  
花散忽因風力處      花は散る      忽ちに風の力に因る處  
玉銷初見日光時      玉は銷<sup>き</sup>ゆ      初めて日の光を見る時  
（276「客居對雪」）

雪が銀の粉、鶴、花、玉と比喩されている。おそらく白居易の影響を受け

ているだろう。後述する。

23. 人皆踏玉似蓬瀛 人みな玉<sup>ぎよく</sup>を踏める 蓬瀛<sup>ほうえい</sup>に似たり

雪色應羞我性清 雪の色すら 我が性の清<sup>いさぎよ</sup>きに羞<sup>は</sup>ずるなるべし

(277「訓藤十六司馬對雪見寄之作」)

雪を玉と見立てている。白詩においては、「還瑤臺瓊樹有りや無や(還有瑤臺瓊樹無)」(2322「雪中即事寄微之」)、「萬室<sup>ばんしつ</sup> 瓊瑤<sup>けいよう</sup>を甃<sup>たた</sup>む(萬室甃瓊瑤)」(2445「西樓喜雪命宴」)、「一尺の中庭 白玉の塵(一尺中庭白玉塵)」(2790「雪夜喜李郎中見訪兼酬所贈」)など、雪を玉と見立てる句がある。また、道真のこの詩の尾聯は、「口に君が詩を詠じて 心に且<sup>しばら</sup>く祝う、明くる年の秋の<sup>あ</sup>稼<sup>たなつもの</sup>は雲と平<sup>たひらか</sup>ならむ」(口詠君詩心且祝、明年秋稼與雲平)である。この句は、白詩の、「憂えず 頭の雪に似るを、但だ喜ぶ 稼の雲の如くなるを(不憂頭似雪、但喜稼如雲)」(2888「與諸公同出城觀稼」)を学んでいるだろう。

24. 粧妓自疑顔粉落 粧<sup>よそお</sup>える 妓<sup>みもとびと</sup>は 自らに顔<sup>おもて</sup>の粉の落ちたるかと疑う

宿醒偏誤眼花飛 宿<sup>よべ</sup>よりの醒いは 偏<sup>ひとえ</sup>に眼<sup>まなこ</sup>の花の飛ぶかと誤つ

(339「十月廿一日、禁中初雪、應製」)

化粧をした宮妓たちは、舞い散る雪をまるで自分の顔につけるおしろいが散っているのかと思い、二日酔いの宮女たちは目に花がちらちらしているのかと思ってしまう。雪を、化粧した妓女の顔に付ける白粉(おしろい)、二日酔いの人の眼花と見立てている。

25. 中使馬疑騎鶴至 中使<sup>ちゅうし</sup> 馬は疑う 鶴に騎りて至るかと

上方人似踏雲昇 上方 人は似たり 雲を踏みて昇ることに

(375「感雪朝」)

足の下の雪を、神様の足の下の雲に見立てている。用例 23 と同じ発想である。

26. 羊角風猶頌曉氣      羊角の風は    猶お曉氣を頌ち<sup>わか</sup>  
鵝毛雪剩假寒粧      鵝毛の雪は    剩<sup>あまつ</sup>さえ寒粧を假<sup>か</sup>す  
(440「早春侍宴、同賦殿前梅花、應製」)

雪を鵝毛のようだという。

27. 誤雲獨宿礪      雲は獨り<sup>たに</sup>礪に宿るかと誤つ  
疑鶴未歸田      鶴は未だ田に歸らざるかと疑う  
(487「東山小雪」)

雪を谷に留まる雲、山に残る鶴と見立てている。

28. 聾牙米簸聲聲脆      聾<sup>しょう</sup>牙<sup>が</sup>    米簸<sup>よねひ</sup>て    聲聲脆<sup>こえこえもろ</sup>し  
龍頷珠投顆顆寒      龍頷<sup>りゅうがん</sup>    珠投<sup>なげう</sup>ちて    顆顆寒<sup>か か</sup>し  
念佛山僧驚舍利      念佛の山僧は<sup>しゃり</sup>舍利かと驚き  
名醫道士怪鉛丸      名醫の道士は<sup>えんがん</sup>鉛丸かと怪<sup>あや</sup>しむ  
袖中收拾慇懃見      袖の中に收め拾<sup>ねんごろ</sup>いて慇懃に見れば  
應是爲冰淚未乾      これ氷と爲れる涙の乾<sup>かわ</sup>かざるなるべし  
(489「白微霰」)

霰も雪の一種とみなして、取り上げておく。この詩作では、霰は被喩詞である。霰の音は聾<sup>くじか</sup>の白い齒の音のようであり、形は竜の頷から落ちた珠、仏の舍利、道士の鉛丸、道真自分の涙のようだという。本詩の首聯は、「如<sup>も</sup>しは碎<sup>くだ</sup>け如<sup>も</sup>しは黏<sup>ね</sup>りて、貌<sup>かたち</sup>を取ること難し、風に吹き結れて雪相搏<sup>あいもろが</sup>す（如碎如黏取貌難、被風吹結雪相搏）」である。川口氏は、これについて、「白居易の朱藤謡に[泥

は黏<sup>ねやか</sup>り雪は滑りて足の力足らず」<sup>45</sup>の句があることを指摘する。白詩においては、「霰」に関する比喻表現の詩句は、「霰」はすべて喻詞として用いられている。本詩は、道真が霰を被喻詞として、多くの珍しいものに比喻し、最後に実は自分の涙の氷の珠のはずだと見立てて、見事な技法を凝らした作品である。

29. 雁足黏將疑繫帛 <sup>かり</sup>雁の足に<sup>ねやか</sup>黏り<sup>い</sup>將ては <sup>きぬ</sup>帛を<sup>か</sup>繫けたるか<sup>と</sup>疑い

烏頭點著思歸家 <sup>からす</sup>烏の頭<sup>かしら</sup>に<sup>さ</sup>點し<sup>つ</sup>著きては 家に歸らんことを思う

(514「謂居春雪」)

この詩は、『菅家後集』の巻末にあり、道真の絶筆である。都の早春の風景を思いながら、もはや家に帰ることはありえない深い悲しみを詠じている。三・四句は雁の足に付いた雪を、蘇武が雁の足につけた白絹の手紙と見立て、烏の頭の雪のような点を、燕の太子丹が秦の人質となっている時、故国に帰りたいといった所、秦王(後の始皇帝)が、烏の頭が白くなり馬に角が生えたら帰ってよいといった故事になぞらえており、その望郷の情は哀切を極める。川口氏は、「蘇武と燕丹とをならべて出して、はげしい望郷のおもいをこめる。」<sup>46</sup>と述べている。

以下、雪の喻詞を類別する。

鵝毛（鶴毛）	用例 20、066「早春侍宴仁壽殿、同賦春雪映早梅、應製」 用例 22、276「客居對雪」 用例 25、 375「感雪朝」
--------	---

<sup>45</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・736頁、489補注。

<sup>46</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・525頁。

	用例 26、440「早春侍宴、同賦殿前梅花、應製」
玉	用例 20、066「早春侍宴仁壽殿、同賦春雪映早梅、應製」) 用例 22、276「客居對雪」 用例 23、277「詠藤十六司馬對雪見寄之作」)
花	用例 19、002「臘月獨興」 用例 22、276「客居對雪」
雲	用例 25、375「感雪朝」 用例 27、487「東山小雪」
綿絮	用例 21、073「雪中早衙」
銀の粉	用例 22、276「客居對雪」
化粧（おしろい）	用例 24、339「十月廿一日、禁中初雪、應製」
鶴	用例 27、487「東山小雪」
竜珠	用例 28、489「白微霰」
舍利	用例 28、489「白微霰」
鉛丸	用例 28、489「白微霰」
涙	用例 28、489「白微霰」
烏の頭の白い点	用例 29、514「謂居春雪」

雪を「鶴毛」、あるいは「鵝毛」で形容するのは、道真の詩作に二例見える。

20. 雞舌纔因風力散      雞舌<sup>はいぜつ</sup>      纔に風力に因りて散ず

鶴毛獨向夕陽寒　　鶴毛　獨り夕陽<sup>せきよう</sup>に向いて寒し

（066 早春侍宴仁壽殿、同賦春雪映早梅、應製」）

26. 羊角風猶頒曉氣　　羊角の風は　猶お曉氣<sup>わか</sup>を頒ち

鵝毛雪剩假寒粧　　鵝毛の雪は　剩<sup>あまつ</sup>さえ寒粧<sup>か</sup>を假す

（440「早春侍宴、同賦殿前梅花、應製」）

「鵝毛」は真っ白で、厚くて、雪を形容するのにはちょうどいい。（「鵝毛」も形が「鵝毛」と似ている）。「鵝毛」を喩詞として、大きな雪片を形容するのは、現代の中国語において、ごく普通の表現だが、『全唐詩』を調べると、最も多く雪を「鵝毛」と見立てるのは、白居易で、全部で五例ある。五例を挙げよう。「大は鵝毛を落すに似たり、密は玉屑<sup>ぎよくせつ</sup>を飄<sup>ひるがえ</sup>すが如し（大似落鵝毛、密如飄玉屑）」（0029「春雪」）、「醉わずんば儂<sup>われ</sup>をして争<sup>いかで</sup>か散じ得しめん、門前の雪片<sup>せつぺん</sup>鵝毛<sup>がもう</sup>に似たり（不醉遣儂争散得、門前雪片似鵝毛）」（1173「房家夜宴喜雪戲贈主人」）、「鵝毛<sup>がもうふん</sup>紛として正に墮ち、獸炭<sup>じゅうたん</sup>敲きて初めて折る（鵝毛紛正墮、獸炭敲初折）」（2302「對火玩雪」）、「憐<sup>あわれ</sup>むべし今夜鵝毛<sup>がもう</sup>の雪、引き得たり高情<sup>こうじょう</sup>鶴<sup>こうしょう</sup>斃<sup>き</sup>の人（可憐今夜鵝毛雪、引得高情鶴斃人）」（2790「雪夜喜李郎中見訪兼酬所贈」）、「雪は鵝毛に似て　飛んで散亂し、人は鶴<sup>かくしょう</sup>斃<sup>き</sup>を披<sup>は</sup>て　立<sup>た</sup>って徘徊<sup>はいかい</sup>す（雪似鵝毛飛散亂、人披鶴斃立徘徊）」（3294「酬令公雪中見贈訝不與夢得同相訪」）という五例である。

道真が被喩詞としての雪の表現について、どれほど白居易の影響を受けているのか、276「客居對雪」を通じて考察したい。用例 22 に一部を挙げたが、改めて全体を挙げる。

溫液寒凝暗有期	溫き液も <sup>ひややか</sup> 寒に凝りて暗しく <sup>むな</sup> 期すること有り
驚看銀粉滿茅茨	驚きて <sup>しろかね</sup> 銀の粉の茅茨に滿つるを見る
立於庭上頭爲鶴	庭上に立てば 頭鶴となり
居在爐邊手不龜	<sup>すわ</sup> 居りて爐邊にあれば 手 <sup>かがま</sup> 龜らず
花散忽因風力處	花は散る 忽ちに風の力に因る處
玉銷初見日光時	玉は <sup>き</sup> 銷ゆ 初めて日の光を見る時
城中一夜應盈尺	<sup>じょうちゆう いちや</sup> 城中一夜 <sup>しゃく</sup> 尺に盈つるなるべし
祝著明年免旱飢	<sup>しゆくちやく</sup> 祝著す <sup>みょうねんひでり</sup> 明年旱と <sup>う</sup> 飢えとを <sup>まぬか</sup> 免れむことを
今年有旱、故云。	<sup>こんねんひでりあ</sup> 今年旱有りき、 <sup>かるがゆえ</sup> 故に云う。

( 276「客居對雪」)

大意は以下の通りである。

温かい液体が冷たく凝固するまで待つのは、何かを期待しているからだ。気がつけば、銀の粉のような雪がすでに茅の屋根の上にいっぱい降り積もっている。庭に立てば、頭が真っ白となり、鶴の頭のようにだ。火炉のそばに座ったら、手もちちこまることはない。風が吹くと、花のような雪がぱっと散って翻る。玉のかけらが消えかけるのは、日光に照らされたからだ。町には一夜で雪が一尺以上で積もった。これは吉兆だ、来年 <sup>ひで</sup>旱りと飢えなどに見舞われませんように。

これは道真が仁和四年（八八八）、讃岐で国守に任ぜられている時の作である。この作の尾聯には、兼済の意識がはっきり見られる。国守だから、この 276「客居對雪」の後に詠じた 277「訓藤十六司馬對雪見寄之作」の第三、四句に



も、「口に君が詩を詠じて 心に<sup>しげら</sup>且く祝う、明くる年の秋の<sup>あ</sup>稼<sup>たなつもの</sup>は 雲と<sup>たひらか</sup>平な  
らん」（口詠君詩心且祝、明年秋稼與雲平）と、兼済の意識がはっきりと表れ  
ている。この兼済の意識が、白居易の影響を受けているのは言うまでもない。

「稼與雲平」が白詩を学んでいることは前述の用例 23 の説明の部分に述べた。  
第四句についても、川口氏が、「白居易の詩に[皮皴似龜手]とある」<sup>47</sup>と指摘  
している。

この詩は、兼済の意識について白居易の影響を受ける以外に、比喻表現も白  
詩から学んでいる。白居易の次の作を見よう。

宿雲黃慘澹	宿雲 黄にして <sup>さんだん</sup> 慘澹
曉雪白飄飆	<sup>ぎょうせつ</sup> 曉雪 白くして <sup>ひょうよう</sup> 飄飆
散麵遮槐市	麵を散じて <sup>かいし</sup> 槐市を <sup>さんざ</sup> 遮り
堆花壓柳橋	花を <sup>たい</sup> 堆して <sup>りゅうきょう</sup> 柳橋を <sup>あつ</sup> 壓す
四郊鋪綺素	<sup>しこう</sup> 四郊 <sup>こうそ</sup> 綺素を <sup>し</sup> 鋪き
萬室瑩瓊瑤	<sup>ばんしつ</sup> 萬室 <sup>けいよう</sup> 瓊瑤を <sup>たた</sup> 瑩む
銀榼攜桑落	<sup>ぎんこう</sup> 銀榼 <sup>そうらく</sup> 桑落を <sup>たずさ</sup> 攜え
金爐上麗譙	<sup>きんろ</sup> 金爐 <sup>れいしやう</sup> 麗譙に <sup>のぼ</sup> 上す
光迎舞妓動	光は <sup>ぶぎ</sup> 舞妓を迎えて動き
寒近醉人銷	<sup>かん</sup> 寒は <sup>すいじん</sup> 醉人に <sup>しょう</sup> 近づきて銷す
歌樂雖盈耳	歌樂 耳に <sup>か</sup> 盈つと <sup>いふ</sup> 雖も
慙無五袴謠	<sup>は</sup> 慙ずらくは <sup>ごこ</sup> 五袴の <sup>うた</sup> 謠無きを

<sup>47</sup>川口久雄校註・前掲注（5）・691 頁、276 補注 1。

(2455「西樓喜雪命宴」)

これは白居易が蘇州刺史の時に、雪を詠じた作である。大意は以下の通り。

昨夜から土気色の雲が陰鬱にたまっていたが、明け方には白い雪片がひらひらと降っている。うどん粉を一面にまいたように市場を覆ってしまい、柳の橋の上にも花のように積もっている。四方の郊外まで白絹をしきつめたようになり、全ての家の石畳が玉のように輝いている。そこで銀の樽に酒を入れて脇に抱え、金の炉を美しい高どのの上に運ばせた。雪に反射した光が舞妓が踊るのにつれてきらめき動き、寒気も酔っぱらった私に近づくと消え失せる。音楽が耳いっぱいに響いているけれど、たいした善政をしているわけでもないのに、後漢の廉范の善政を唱える「五袴謠」がないのが恥ずかしい。

この詩、結句に、後漢の廉范の善政を唱える「五袴謠」が出ているのは、白居易の兼済の精神の現れである。

この白居易の詩に於いては、雪の喩詞として、「散麵」、「花」（「柳絮」）、縞素（白い絹）、瓊瑤（玉）などが次々と登場する。道真はこのうち、柳絮・布・玉の全てを自らの詩の喩詞として用いている。「玉」を喩詞とするのは、謝恵連「雪賦」（『文選』卷十三）を代表として古来当然のことだが、道真の詩において、三つの喩詞が全て使われているからには、道真はまずまちがいなく白居易のこの詩の比喩表現を学んでいるだろう。麵を用いなかったのは、雪ほどの透明感が無いと考えたからであろうか。後考に待ちたい。

もう一首、白居易の例を見よう。

連夜江雲黃慘澹	連夜の江雲 黃 <sup>き</sup> にして慘澹 <sup>さんたん</sup>
平明山雪白模糊	平明の山雪 <sup>さんせつ</sup> は 白くして模糊 <sup>もこ</sup>
銀河沙漲三千里	銀河沙 <sup>ぎん が いさごみなぎ</sup> 漲る 三千里
梅嶺花排一萬株	梅嶺花排 <sup>ば れいはなはい</sup> す 一萬株
北市風生飄散麵	北市風生 <sup>しょう</sup> じて 散麵 <sup>さんめん</sup> を飄 <sup>ひるがえ</sup> し
東樓日出照凝酥	東樓日出 <sup>とうろう</sup> でて 凝酥 <sup>ぎょうそ</sup> を照す
誰家高士關門戶	誰が家の高士 <sup>もんこ</sup> ぞ 門戶 <sup>とど</sup> を關し
何處行人失道途	何 <sup>いづれ</sup> の處 <sup>ところ</sup> の行人 <sup>いづれ</sup> ぞ 道途 <sup>みち</sup> を失う
舞鶴庭前毛稍定	舞鶴庭前 <sup>ぶ かくていぜん</sup> 毛稍 <sup>け ややさだ</sup> 定まり
擣衣碓上練新鋪	擣衣碓上 <sup>とう い ちんじょう</sup> 練新 <sup>れん</sup> たに鋪く
戲團稚女呵紅手	戲團 <sup>ぎ だん</sup> の稚女 <sup>ち じょ</sup> 紅手 <sup>か</sup> を呵し
愁坐衰翁對白鬚	愁坐 <sup>しゅう ざ</sup> の衰翁 <sup>すいおう</sup> 白鬚 <sup>はくしゅ</sup> に對 <sup>たい</sup> す
壓瘴一州除疾苦	瘴 <sup>しょう</sup> を壓 <sup>あつ</sup> して 一州 <sup>いっしゅう</sup> 疾苦 <sup>のぞ</sup> を除き
呈豐萬井盡歡娛	豐 <sup>まん</sup> を呈 <sup>せい</sup> して 萬井 <sup>まんせい</sup> 盡 <sup>ことごと</sup> く歡娛す
潤含玉德懷君子	潤 <sup>じゆん</sup> は玉德 <sup>ぎよく</sup> を含みて 君子 <sup>きんし</sup> を懷い
寒助霜威憶大夫	寒 <sup>そう</sup> は霜威 <sup>い</sup> を助けて 大夫 <sup>たい ぶ</sup> を憶う
莫道煙波一水隔	道 <sup>な</sup> う莫 <sup>なか</sup> れ 煙波 <sup>えん ぱ</sup> 一水隔たると
何妨氣候兩鄉殊	何ぞ妨げん 氣候 <sup>きこう</sup> 兩鄉殊なるを
越中地暖多成雨	越中は地 <sup>ち</sup> 暖 <sup>あた</sup> にして 多く雨を成す
還有瑤臺瓊樹無	還 <sup>また</sup> 瑤臺瓊樹 <sup>ようたいけいじゆ</sup> 有りや無 <sup>いな</sup> や

(2322「雪中即事寄微之」)

大意は以下の通り。

昨夜から黄色い雲がたたなわっていたが、夜が明けると山山が真っ白でぼんやりしている。銀河の水が漲り、梅嶺の多くの花が突然咲いたようだ。市場に風が小麦粉を吹かせるようであり、日が出ると、東楼は真っ白なヨーグルトのようだ。誰の家か門を閉めてしまい、道に迷う人もいる。庭には、鶴の毛が落ちるように雪がいっぱいで、砧石の上には白い絹を敷いたようだ。雪を小さな玉の形にして遊んでる女の子が寒さで紅くなった手を息で暖め、向こうには白髪の翁が憂わしげに座っている。この雪は病気を除き来年の豊作を保証してくれる。その徳は君子のようで、その威勢は大夫のようだ。君のいま居る処が一つの河を隔てるだけなのに、気候はまるでちがう。君の居る越は温かくて雨が多いから、このような玉の台や瓊の樹を見ることはできまい。

これも白居易が比喩の技法を駆使して、雪を詠ずる作である。詩の前半は、「雪」を形容する喩詞は、「銀河」、「梅嶺の花」、「散麵」、「凝酥」、「舞鶴の毛」、「擣衣砧上の新練」などである。十三句～十六句には、上の詩と同じくやはり兼済の思いが現れており、結句は、「瑤臺瓊樹」を雪が付いた楼台、木と見たてている。

道真が雪を比喩する喩詞として、「銀の粉」、「鶴の毛」、「花」、「玉」などを用い、また前半で雪を描写し、後半に諷諭の表現を示すという構成にしているのは、いずれも白居易の影響を受けているのである。

#### 第四節 まとめ

本章では、道真における「雪」の比喩表現について、白詩の影響をどのよ

うに受けているのかを考察した。

「雪」は喩詞としての場合、白詩の「雪鬢」という表現を摂取して、嘆老惜春の意識を受け継いでいる。

「廻雪」のように舞姿を描写するときは、白詩の「廻雪」などの表現を摂取している。さらに、雪で美人を形容する時、従来 of 形容を摂取しつつも、「おしろい」などのイメージを活用して、道真独特の濃艶な「美人」の表現を生み出した。

「雪」は被喩詞としての場合、白詩の「雪」を「鵝毛」と形容する技法を学び、また「玉」、「花」、「銀の粉」などの喩詞も摂取している。さらに、白居易の「兼濟」の精神の受容も見られる。

道真は、雪の比喩表現を見るだけでも、これほど深く白詩の影響を受けている。しかも、白詩をヒントにしつつ、白詩よりもさらに濃艶なさまざまな表現を創出しているのである。

## 第二章 道真詩における「月」の見立て

### 第一節 はじめに

日本では万葉の時代から、中国では『詩経』の時代から、月は詩に詠じられてきた。明月と朧月、満月と残月など、月のさまざまな姿が、歴代の詩人に多様なインスピレーションを与え、月を詠ずる名篇が数えきれないほど多く作られてきた。

月も「道真が最も好んで詩に詠じた風物の一つ」<sup>48</sup>である。道真の詩においては、何らかの形で「月」のイメージを含む作が全部で九十二首あり、道真の現存作の二十パーセント弱を占めている。

道真の月は、従来の、中国と日本の月の表現を意識しつつ、島田忠臣の表現を継承して、八月十五日の月を詠ずる伝統を開き、また伝統的な月を翫でる日とは異なる日の月を詠じている。道真の月の表現にもたくさんの見立ての技法が見られる。

道真は中国の従来の月を詠ずる作、特に李白と白居易の作の影響を深く受けており、「鏡」、「弓」、「弦」、「雪」、また「氷」、「鉤」、「環」、「眉」、「玉」などの伝統的な喩詞を幅広く使用している。「鉤」、「弓」は、月の被喩詞としても用いられている。

このように、道真は従来の中国・日本における月の表現の伝統を継承し発展させているが、道真の独創もある。彼は、月を喩詞として、自分のことを寓し、また天皇を寓する作品を詠じている。これらの作は、道真の詩臣としての本質

---

<sup>48</sup> 藤原克己著・前掲註（3）・298頁。

と深く関わって生みだされたものである。

本章では「月」に関する見立て表現について、道真がどのように李白及び白居易の詩をはじめとして、中国詩の表現を受容し、また新たな表現技法を作り出したのかを考察したい。

## 第二節 道真にとっての月

道真の詩作においては、月を被喩詞として何かに見立てる表現を含む作が十八首ある。その内、喩詞が「鏡」のものが六首、「鉤」のものが四首、「雪」または「氷」のものが三首、「弓」または「弦」が三首、「環」が三首、「眉」が二首、「ぬの」が二首、喩詞「玉」（「珠」）、「魚」、「筆」が各一首（一作の中、複数の喩詞がある作がある）である。具体的な用例は以下の通り。

喩詞	用例
鏡	<p>01. 圓似江波初鑄鏡      圓<sup>まる</sup>きことは    江波<sup>こうは</sup>に初めて鑄<sup>い</sup>る鏡に似たり  映如沙岸半披金      映<sup>うつ</sup>りて    沙<sup>いさご</sup>の岸<sup>きし</sup>に半披<sup>なかばひら</sup>く金<sup>こがね</sup>の如し  （116「水中月」）</p> <p>02. 沙庭感誤松江宿      沙<sup>いさご</sup>の庭<sup>にわ</sup>に感じ誤<sup>つ</sup>    松江<sup>しょうこう</sup>に宿<sup>やど</sup>るか  月砌驚疑鏡水遊      月<sup>つき</sup>の砌<sup>みぎり</sup>に驚<sup>うたが</sup>き疑<sup>う</sup>    鏡<sup>きょうすい</sup>水に遊ぶかと  （349「重陽後朝、同賦秋雁櫓聲來、應製」）</p> <p>03. 萬里冰紈庭不疊      萬里の氷<sup>しらきぬ</sup>なす 紈<sup>た</sup>庭<sup>た</sup>に疊<sup>たま</sup>ます  千家玉鏡匣無收      千家<sup>せんか</sup>の玉<sup>たま</sup>なす 鏡<sup>かがみ</sup>匣<sup>はこ</sup>に收<sup>はこ</sup>むることなし  （354「雨晴對月、韻用流字、應製」）</p>

	<p>04. 破殘寒月鏡 破れて残る 寒月の鏡</p> <p>來迫曉霜鋒 來りて迫む 曉霜の鋒</p> <p>(373「賦葉落庭柯空」)</p> <p>05. 月光似鏡無明罪 月の光は鏡に似たれども 罪を明むることなし</p> <p>風氣如刀不破愁 風の氣は刀の如くなれども 愁えを破らず</p> <p>(485「秋夜」)</p> <p>06. 度春度夏只今秋 春を度り夏を度りて只今の秋</p> <p>如鏡如環本是鉤 鏡の如く環の如くにして 本これ鉤なり</p> <p>(510「問秋月」)</p>
鉤	<p>07. 秋來六日未全秋 秋來りて六日 全き秋ならず</p> <p>白露如珠月似鉤 白露は珠の如く 月は鉤に似たり</p> <p>(037「七月六日文會」)</p> <p>08. 仙盞追來花錦亂 仙盞 追い來りて 花錦亂る</p> <p>御簾卷却月鉤新 御簾 巻き却けて月鉤新なり</p> <p>(324「三月三日、侍於雅院。賜侍臣曲水之飲、應製」)</p> <p>09. 綠酒猶催醒後盞 綠酒猶お催す 醒めたる後の盞</p> <p>珠簾未下曉來鉤 珠簾未だ下ろすまじ 曉より來の鉤</p> <p>(354「雨晴對月、韻用流字、應製」)</p> <p>10. 度春度夏只今秋 春を度り夏を度りて只今の秋</p> <p>如鏡如環本是鉤 鏡の如く環の如くにして 本これ鉤なり</p> <p>(510「問秋月」)</p>



雪（氷）	<p>11. 月耀如晴雪 月の耀くは 晴れたる雪の如し  梅花似照星 梅花は 照れる星に似たり  （001「月夜見梅花」）</p> <p>12. 消殘砌雪心猶誤 消え残る<sup>みぎり</sup>の雪に 心は猶お誤つ  挑盡窓燈眼更嫌 挑げ盡す窓の<sup>とほしび</sup>燈に 眼は更に嫌<sup>うたが</sup>う  （036「山陰亭、冬夜待月」）</p> <p>13. 山疑小雪微微積 山疑うらくは 小<sup>すこ</sup>しき雪の微微として積も  るかと  水誤新冰漸漸生 水誤つらくは 新しき冰の<sup>ようやく</sup>漸漸に生ずるか  と  （275「冬夜對月憶友人」）</p>
弓（弦）	<p>14. 畏月是孤弦 月を<sup>おそ</sup>る これ孤<sup>こ</sup>弦ならんかと  渡江非一葦 江を<sup>わた</sup>る 一<sup>いつ</sup>葦のみにあらし  （008「九日侍宴、同賦鴻雁來賓、各探一字、得葦、應製」）</p> <p>15. 仙娥弦未滿 仙娥<sup>せんが</sup> 弦<sup>ゆみづる</sup> 滿<sup>み</sup>たざるに  禁漏箭頻加 禁漏<sup>きんろう</sup> 箭<sup>や</sup> 頻<sup>しきり</sup>に加う  （107「夏夜對渤海客、同賦月華臨靜夜詩」）</p> <p>16. 插雲驚度雁 雲を<sup>はさ</sup>みては 度<sup>かり</sup>る雁を驚かす  投水誤遊魚 水に<sup>いた</sup>りては 遊<sup>あそ</sup>べる魚を誤つ  （193「新月二十韻」）</p>
環	<p>17. 遠雞一報廻頭望 遠雞<sup>えんけい</sup>一たび報じて 頭<sup>こうべ</sup>を廻<sup>めぐら</sup>して望めば  插著寒雲半缺環 寒雲<sup>かんうん</sup>に插<sup>そうちやく</sup>著す 半缺くる環<sup>なまき</sup></p>

	<p>(313「曉月」)</p> <p>18. 何處粧樓擲玉環 何れの處の粧樓か 玉環を擲つ  <small>しょうろう ぎよくかん なげう</small></p> <p>一明一暗曉雲間 一たび明るく一たび暗し 曉の雲の間</p> <p>(355「曉月、應製」)</p> <p>19. 度春度夏只今秋 春を度り夏を度りて只今の秋</p> <p>如鏡如環本是鈎 鏡の如く環の如くにして 本これ鈎なり  <small>つりばり</small></p> <p>(510「問秋月」)</p>
眉	<p>20. 風腦光相似 風腦 光相似たり  <small>ふうのう ひかり あいに</small></p> <p>蛾眉細不如 蛾眉 細くして如かず  <small>が び</small></p> <p>(193「新月二十韻」)</p> <p>21. 乘醉和音風口緩 酔いに乗ずる和音 風の口緩ぶ  <small>え じょう か おん かぜ くちゆる</small></p> <p>消憂晚景月眉開 憂えを消す晩景 月の眉開く  <small>け ばんけい</small></p> <p>(342「三月三日、同賦花時天似醉、應製」)</p>
ぬの (「練」 または 「紬」)	<p>22. 珠汗風前隨路落 珠なす汗は 風の前に路の隨に落ちたり  <small>まにま</small></p> <p>練光月下趁家廻 練なす光は 月の下に家を趁いて廻る  <small>ねりぎぬ もと お めぐ</small></p> <p>(338「和田大夫感喜救賜白馬、上呈諸侍中之詩」)</p> <p>23. 萬里冰紬庭不疊 萬里の冰なす 紬 庭に疊まず  <small>しらぎぬ たた</small></p> <p>千家玉鏡匣無收 千家の玉なす鏡 匣に收むることなし  <small>せん か たま かがみ はこ</small></p> <p>(354「雨晴對月、韻用流字、應製」)</p>
玉(珠)	<p>24. 海伯應慵投老蚌 海伯は老いし蚌を投ぐるに慵かるべし  <small>かい はく お はまぐり な ものう</small></p> <p>山神欲惜放寒蟾 山神は寒いたる蟾を放すを惜まんと欲す  <small>さんじん こ ひき おし ほつ</small></p> <p>(036「山陰亭、冬夜待月」)</p>

魚	<p>25. 風腦光相似      風腦<sup>ふうのう</sup> 光<sup>ひかり</sup> 相似<sup>あい</sup>たり</p> <p>蛾眉細不如      蛾眉<sup>がび</sup> 細くして如かず</p> <p>(193「新月二十韻」)</p>
筆(金毫)	<p>26. 此時天縱金毫詠      此の時天<sup>てん</sup> 縱<sup>ほしきまま</sup> にす 金毫<sup>きんごう</sup> の詠<sup>よう</sup></p> <p>何處人遑秉燭遊      何れの處にか人<sup>ひと</sup> 遑<sup>いとま</sup> ありて 燭<sup>しよく</sup> を秉<sup>と</sup>りて遊</p> <p>べる</p> <p>(354「雨晴對月、韻用流字、應製」)</p>

月が喩詞の例は以下の通り。

被喩詞	用例
鉤	<p>27. 鉤留枝掛月      鉤<sup>すみかぎ</sup> 留<sup>とどま</sup>りて 枝 月を掛く</p> <p>粉落葉凝霜      粉<sup>しろきもの</sup> 落ちて 葉 霜を凝す</p> <p>(006「賦得躬桑、一首」)</p>
弓	<p>28. 細月空驚質      細き月は空しく質<sup>ま</sup>を驚<sup>おど</sup>す</p> <p>清風自發聲      清しき風は自らに聲を發す</p> <p>(411「弓」)</p>
自分	<p>29. 雲生不放寒蟾素      雲生まるれば 寒蟾<sup>しるぎ</sup>の素<sup>しろ</sup>きことを放たず</p> <p>桂死何勝毒蠹緇      桂<sup>か</sup>死れんとして 何ぞ毒蠹<sup>どくど</sup>の緇<sup>くろ</sup>きことに勝え</p> <p>ん</p> <p>(119「余近敘詩情怨一篇、呈菅十一著作郎。長句二首、偶然見訓。 更依本韻、重答以謝」)</p>

	<p>30. 當時誰道四方在 當時誰か道いけん 四方に在らんと          苦惜孤輪獨望西 苦<sup>ねんごろ</sup>に惜しむなり 孤輪の獨り西を望むこと          を          (361「霜夜對月」)</p> <p>31. 月光似鏡無明罪 月の光は鏡に似たれども 罪<sup>つみ</sup>を明<sup>あきら</sup>むることな          し          風氣如刀不破愁 風の氣は刀の如くなれども 愁<sup>おも</sup>えを破<sup>やぶ</sup>らず          (485「秋夜」)</p> <p>32. 度春度夏只今秋 春を度り夏を度り 只今の秋          如鏡如環本是鉤 鏡の如く環の如くにして 本これ<sup>つりばり</sup>鉤なり          爲問未曾告終始 <sup>かるがゆえ</sup>爲に問う 曾<sup>しゅうし</sup>て終始を告げざりしことを          被浮雲掩向西流 浮べる雲に掩はれて西に向いて流る          (510「問秋月」)</p>
天子	<p>33. 高齋待月月何淹 高齋に月を待てば 月何ぞ淹<sup>ひき</sup>しき          不畏風霜幾撥簾 畏れず 風霜の幾たびか簾<sup>はら</sup>を撥<sup>はら</sup>うことを          (036「山陰亭、冬夜待月」)</p> <p>34. 穿雲明月應能照 雲を穿ちて明月 能く照らすならん          何更人前事事談 何ぞ更に人の前にして 事事<sup>みな</sup>を談らん          (436「九日後朝、同賦秋深、應製」)</p> <p>35. 秋珪一隻度天存 秋珪一隻 天<sup>あま</sup>を度りて存す          下照千家不定門 下は千家を照らして 門を定めず          (441「八月十五夜、同賦秋月如珪、應製」)</p>

日本でも、道真より前に「月」を何かに比喻する作は多い。先例を少し挙げよう。

『懷風藻』<sup>49</sup>には、文武天皇（六八三―七〇七）の「月を詠ず」を収めている。

月舟移霧渚	月舟 霧渚に移り
楓檝泛霞濱	楓檝 霞濱に泛かぶ
臺上澄流耀	臺上 流耀澄み
酒中沉去輪	酒中 去輪沉む
水下斜陰碎	水下りて 斜陰碎け
樹落秋光新	樹落ちて 秋光新たなり
獨以星間鏡	獨り星間の鏡を以て
還浮雲漢津	還た雲漢の津に浮かぶ

（「詠月」）

これがおそらく、日本で初めての月を主題とする漢詩だろう。月に特に深い意味を持たせているわけではなく、単純に月を鑑賞の対象として、月を翫でる作である。月を、霞の中を走る「舟」、天の河に浮かぶ星のなかの鏡などに見立てている。

---

<sup>49</sup> 『懷風藻』・『文華秀麗集』・『凌雲集』の本文は『日本文学大系・第二十四巻』（国民図書株式会社、一九二七年）に依る。以下同じ。

文武天皇以降、月を被喩詞とする例としては、「雲衣<sup>うんい</sup> 兩たび夕を觀、月鏡<sup>げつきょう</sup>  
一たび秋に逢ふ（雲衣兩觀夕、月鏡一逢秋）」（藤原史「七夕」）、「雲 飛  
んで 玉柯<sup>ぎよくか</sup>に低れ、月 上って 金波は動かす（雲飛低玉柯、月上動金波）」  
（葛井広成「月夜坐河濱」）、嵯峨天皇の「天邊 曉月 看ること鏡の如く、戸  
外 朝山 望むこと屏に似たり（天邊曉月看如鏡、戶外朝山望似屏）」（「江  
亭曉興」）と「莓苔踏破す 年を経る髪、楊柳未だ懸けず 月を伸ぶる眉（莓  
苔踏破経年髪、楊柳未懸伸月眉）」（「春日嵯峨山院、探得遅字」）、女詩人の有智  
子内親王の「珠<sup>たま</sup>を懸<sup>か</sup>けて 露<sup>る</sup>葉<sup>よう</sup>淨<sup>きよ</sup>く、扇<sup>のぞ</sup>に臨<sup>み</sup>て 霜<sup>そう</sup>華<sup>か</sup>清<sup>か</sup>し（懸珠露葉淨、臨  
扇霜華清）」（「奉和關山月」）などの句があり、「鏡」、「金波」、「眉」、「珠」、「霜」  
などさまざまな喩詞を用いて、月・月の光を比喩している。あるいは「月は泛  
ぶ 眉間の<sup>はく</sup>魄、雲は開く <sup>けいじょう</sup>髻<sup>き</sup>上の暉（月泛眉間魄、雲開髻上暉）」（荊助仁「詠  
美人」）のように、月を「眉」の喩詞とする作なども見える。

そして終に平安朝漢詩を開花させた島田忠臣と道真に至って、月の見立て表  
現は格段にその芸術的レベルを高める。

忠臣はこのように詠じた。

半破銀鍋子	半破 銀の鍋子 <sup>かし</sup>
排空踵日車	空を <sup>おしひら</sup> 排 <sup>き</sup> きて 日車を <sup>お</sup> 踵 <sup>う</sup>
當天猶熱苦	當天 猶お 熱苦たるも
仲夏却霜華	仲夏 却 <sup>かえ</sup> りて霜華たり
澆石多零玉	石に <sup>そそ</sup> 澆 <sup>ぎ</sup> て 多く玉を <sup>お</sup> 零 <sup>とし</sup>
通林碎着花	林を通りて 碎けて花に着く

窓疑懸瀑布　　窓は瀑布を懸くるかと疑い

庭訝踏晴沙　　庭は晴沙を踏むかと訝る

……

(「夏夜對渤海客、同賦月華臨淨夜詩」<sup>50)</sup>)

この詩は沈約の「月華　淨夜に臨む、夜靜　氣埃を減す（月華臨淨夜、夜靜減氣埃）」（「雜詠五首」『先秦漢魏晉南北詩』<sup>51)</sup>）から詩題を取っている。道真も同時に同じ題名の作を詠じている。この詩は満ちる前の月を半破の銀の鍋に見立て、「霜」、「零玉」、「着花」、「瀑布」、「晴沙」と複数の喩詞を用いて、実にきらびやかで変化に富む月の光を描出している。

これらの語は、中国では魏晉南北朝時代からよく月の喩詞として用いられているが、日本の詩人はこれを巧みに摂取している。月は、道真以前では、「閨怨」の作や、故郷と家族を懐かしむ作にもしばしば見えた。しかし、忠臣と道真の前代の詩人にとって、月は、ほとんどただ静かな、審美の対象としての風物でしかない。月にさまざまな豊かな姿を与えた詩人はやはり道真である。

月は道真が最も好んだ風物の一つである。道真にとっての月の重要性を考察するために、道真詩における月を詠じる詩の特徴を検討しておきたい。

道真は中国の古典の影響を深く受け、詩作においては中国の伝統的な美意識をよく受け入れている。「風月」を詠ずる作はその典型である。

---

<sup>50</sup> 島田忠臣詩の本文は、中村璋八・島田伸一郎校註『田氏家集全釋』（汲古書院、一九九三年）に依る。

<sup>51</sup> 『先秦漢魏晉南北詩』の本文は、遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北詩』（中華書局、一九八三年）に依る。

中国で、「風月」の語は、梁・劉勰『文心彫龍』の卷二「明詩」の、建安の詩について述べる箇所に、「並びに風月を憐み、池苑に狎<sup>たわむ</sup>れ、恩榮を述べ、酣宴を叙し、慷慨以て氣に任じ、磊落<sup>らいらく</sup>以て才を使う（並憐風月、狎池苑、述恩榮、敘酣宴、慷慨以任氣、磊落以使才）」<sup>52</sup>と見えるのが始めである。以後、文人たちは、この「風月」という表現によって、自然の風物、四季折々の美しい景物、自然の美しさを愛でる喜び、楽しい気分などを形容するようになる。「風月」は、日本では、道真以前、『懷風藻』に、「一面金蘭の席、三秋風月の時（一面金蘭席、三秋風月時）」（調古麻呂「初秋於長王宅宴新羅客」）、「勝地山園の宅、秋天風月の時（勝地山園宅、秋天風月時）」（百濟和麻呂「秋日於長王宅宴新羅客」）など、数句が見える。

「風月」は道真の詩作に至って多数登場するようになる。「風月ただ天の久遠<sup>きゅうえん</sup>を期するのみ（風月只期天久遠）」（092「山家晩秋」）、「明月春風期を失はず（明月春風不失期）」（178「園池晩眺」）、「清風朗月蘆簾<sup>せいふうろうげつ りん</sup>に入る（清風朗月入蘆簾）」（192「早秋夜詠」）、「花前月下海邊の春（花前月下海邊春）」（225「書懷贈故人」）、「ただ風月を遺<sup>のこ</sup>して金<sup>こがね</sup>を遺<sup>のこ</sup>さず（只遺風月不遺金）」（469「奉感見獻家集之御製、不改韻、兼敘鄙情」）など、「風月」あるいは「風月」と同類の表現を用いた作は、道真の詩では二十四首もある。道真は中国の詩の「風月」を意識しつつ、「月」が好きであるゆえに、「風月」を、快い気分をもたらす美しい景色の象徴、好ましい雰囲気を持示するシンボルだと理解している。そして道真の詩において、美しい「風月」の表現は、その特徴をさ

---

52 一海知義・興善宏訳『陶淵明・文心彫龍』（『世界古典文学全集・第25巻』、筑摩書房、一九六八年）235頁。



らに明確にしつつ<sup>53</sup>、さまざまな表現を生み出していく。風が簾を振って上げる時に見える明月、海辺の春の月、月下での放吟高歌……道真は、その表現を従来よりも格段に豊かにした。

道真が特に月を好むのは、家風の影響でもある。道真の前代の詩人では、月を素材とする作は、時間的には七夕の月を繞る詩作が最も多い。道真は七夕以外に、家風の伝統を継承し、また唐詩における仲秋の名月を翫でる風俗を受容して、日本で八月十五日の月を詠ずる嚆矢となった。

道真は、298「八月十五日夜、思舊有感」の首聯に、「菅家の故事<sup>こじ</sup> 世の人知る、月を翫<sup>め</sup>でて今は忌月<sup>きげつ</sup>の期爲り（菅家故事世人知、翫月今爲忌月期）」と詠じている。川口氏は「菅原家では祖父清公以来、八月十五夜には、公宴に陪することがなければ、月亭に菅家廊下の門弟を会して翫月の詩宴を催すのがしきりでありであった」<sup>54</sup>という。また、126「同諸才子、九月卅日、白菊叢邊命飲」の自序には、「仲秋月を翫<sup>もてあそ</sup>ぶの遊び、家忌<sup>いえのいみ</sup>を避けて以て長く廢せり（仲秋翫月之遊、避家忌以長廢）」と記され、菅原家の翫月の伝統が明記されている。波戸岡氏は、「おそらく祖父清公以来のことと思われる。清公自身には中秋觀月の詩はないが、第十六次遣唐判官清公が、中唐長安の文人間における翫月のようすを見聞する機会があったであろうことは想像に難くない」<sup>55</sup>と論じている。

島田忠臣も「八月十五夜」の作を三首唱っている。おそらく忠臣も菅家廊下<sup>56</sup>

<sup>53</sup> 中国では、後、「風月」は、風流な男女関係をも意味するようになるが、道真の「風月」は、一貫して、その意味を含まない。

<sup>54</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）344頁

<sup>55</sup> 波戸岡旭著『宮廷詩人菅原道真―「菅家文草」「菅家後集」の世界』（笠間書院、二〇〇五年）187―188頁。

<sup>56</sup> 菅家廊下は「菅原氏の家塾の名称である……方一丈の書齋の脇に付いた廊下で門人達に講学したので菅家廊下といった。私塾としては、廊下を指導の場所としながら、ここから輩出した秀才や進士は約百名に達した。ただ廊下といって私塾の通り名となっていた。学者は、ここを龍門（登竜門）と名付けた。」（神社と神道研究会編『菅原道真事典』[勉誠出版、二〇〇四年]60頁。）

の影響を受けているだろう。道真の詩作では、題名に、「八月十五」という言葉が見えるものが八首ある。うち、009「八月十五夜、嚴閣尚書、後漢書を授け畢んぬ。各史を詠じて、黄憲を得たり（八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黄憲）」、012「八月十五夜、月亭に雨に遇いて月を待つ（八月十五夜、月亭遇雨待）」、030「戊子之歳、八月十五日夜、月臺に陪り、各一字を分つ（戊子之歳、八月十五日夜、陪月臺、各分一字）」、039「八月十五の夕に、月を待つ。席上に各一字を分つ（八月十五夕、待月。席上各分一字）」、064「八月十五夜、月の前に<sup>むかし</sup>舊を話す、各一字を分つ（八月十五夜、月前話舊、各分一字）」は、菅家の仲秋翫月家宴時の作である。152「仁和元年八月十五日、神泉苑に行幸したまう。侍臣に詔ありて、命じて一篇を<sup>たてまつ</sup>獻らしむ（仁和元年八月十五日、行幸神泉苑。有詔侍臣、命獻一篇）」及び441「八月十五夜、同じく〔秋月毛珪の如し〕ということを賦す、應製（八月十五夜、同賦秋月如毛珪、應製）」は道真が仲秋の時、侍宴の作である。もう一首、298「八月十五日夜、<sup>むかし</sup>舊を思いて感有り」は、讃岐に在って、父親を想い、過去の家宴を思う作である。

この八月十五夜の一輪の明月に向かって、道真は、各時期に、その時の思いを詠じ、彼の人生の歩みを描いた。少年時代には、自分の才能を信じて、その才能を試したい雄心を述べ（009「八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黄憲」、030「戊子之歳、八月十五日夜、陪月臺、各分一字」）、天皇の拔擢を待つ不安と矜持を詠い（012「八月十五夜、月亭遇雨待月」、039「八月十五夕、待月。席上各分一字」）、天皇の側で遂に詩臣となった時には、天皇への感謝と自分の喜びを詠い（152「仁和元年八月十五日、行幸神泉苑。有詔侍臣。命獻一篇」）、讃岐に左遷されている時には、その悲しみを詠い（298「八月十

五日夜、思舊有感」）、天皇に信用され、右大臣に昇った時には、人生の最盛期の喜びを詠い（441「八月十五夜、同賦秋月如毛珪、應製」）……と、道真においては、八月十五日の明月と自分の人生が強く結びつき、人生の悩みと喜び、期待と失望、さまざまな思いを月を詠ずる詩によって表現している。

道真の月への愛好は極めて深い。彼は、白詩の日常性を意識しつつ、従来の七夕の月と「閨怨」の月、それに八月十五日の月を詠じた上に、日常の月もよく詠じている。例えば、241「正月十日、同諸生吟詩」、284「正月十六日、憶宮妓踏歌」、342「三月三日、同賦花時天似醉、應製」、349「重陽後朝、同賦秋雁櫓聲來、應製」、436「九九日後朝、同賦秋深、應製」、443「九日後朝、侍朱雀院、同賦閑居樂秋水、應太上天皇製」、451「對殘菊待寒月」、485「秋夜」などは、日常の様々な形の月を描写している。

この日常の月を描くにあたって、道真は、特に白詩の詠月詩を深く意識している。例えば、

秋來六日未全秋      <sup>あききた</sup>秋來りて<sup>むいか</sup>六日      <sup>まだ</sup>全き秋ならず  
白露如珠月似鉤      <sup>はくろ</sup>白露は<sup>たま</sup>珠の如く      月は<sup>かぎ</sup>鉤に似たり  
一感流年心最苦      一たび<sup>りゅうねん</sup>流年に感じては      心      最も苦しむ  
不因詩酒不消愁      詩酒に<sup>よ</sup>因らずんば<sup>け</sup>愁えを消さざらまし  
(037「七月六日文會」)

この詩は道真が貞觀十二年（八七〇）、二六歳、文章得業生方略生に及第した

時の作である。七月から六日目、初秋の夜、露が珠のように可憐で、新月が鉤のように空に掛かっている。また一年が過ぎ去ったかと思うと、胸が苦しい。詩と酒に頼らなければ、この切なさを消すことはできないだろう。

この詩において、月は、自らの人生への感慨を引き起こすものになっている。道真の詩において、月は単なる賞玩の域を越えて、このようにも深い味わいを持つものになったのである。

道真のこの詩を見ると、ただちに白居易の次の詩(江州での作)が思い浮かぶ。

一道殘陽鋪水中      一道の殘陽      水中に鋪き  
半江瑟瑟半江紅      半江瑟瑟      半江紅 なり  
可憐九月初三夜      憐むべし      九月初三の夜  
露似眞珠月似弓      露は眞珠に似て      月は弓に似たり  
(1291「暮江吟」)

同じく七言絶句であり、道真の首聯と白居易の尾聯は、構造・表現がよく似ている。詩を詠ずる日を述べ、また露が珠のようだといい、月を鉤あるいは弓に見立てている。

道真の詩の結句について、波戸岡氏は「……主旨は、言い換えれば、今宵の宴を大いに楽しもうというものではあるが、詩人道真の心情は、及第に欣喜することを詠じるよりも、及第の喜びを噛みしめつつも、過ぎ行く時を惜しみ、道に精励することを忘れぬ沈着なものである」<sup>57</sup>といわれる。白居易にも二十

---

57 波戸岡旭著・前掲註(55)・14頁。

九歳で、進士に及第した時の作 0703「花下自ら酒を勧む」<sup>58</sup>がある。波戸岡氏は、道真と白居易を比較してこういう。「栄光の中で、(白居易は)このように沈着に自己を照射して見せているのである……道真の多くの作品において、白詩からの発想、用語などの影響が顕著であることはいうまでもないことであるが、このような詩人の内面的、本質的な所でののかかわりあい、およびその影響が、道真の場合、ことさら顕著であると言えるのである」<sup>59</sup>。

月は中国の詩人にとって、一種の哲学的な意味をも持って、永遠に存在するものである。「月を媒介として、古人と今人は時間の懸隔を乗り越え、一つに結びつけられているといえる」<sup>60</sup>。

道真の「七月六日文會」は、新月の夜、曾て白居易が貶地江州で見たのに酷似する情景を見、同時に白居易が及第した時の感懷を深く理解して、両者が融合した所に生まれたものである。道真は、白居易の体験と感情を、自分自身の体験と感情として編成することによって、月をこのようにも人生に関わる深い味わいを持つものとしたのである。

### 第三節 道真独特の月の見立て

月は詩人にとって、いわゆる「風月」、即ち風雅の情趣を提示するシンボルの一つであるだけでなく、また古今を通しての永遠の存在として哲学的な意味を持ち、時には詩人の友達にもなる。

---

58 「酒醖酌み來たって 須らく満満たるべし、花枝看れば即ち落つこと紛紛たり。言う莫かれ 三十是れ年少しと、百歳 三分して已に一分」。貞元十七年の作。前年貞元十六年、白居易は進士科に及第している。

59 波戸岡旭著・前掲註(55)・15頁。

60 興膳宏「月明の中の李白」(中国文学会『中国文学報』第四十四冊、一九九二年)76頁。

李白の名作「月下獨酌」<sup>61</sup>には、

花間一壺酒	花間 一壺の酒
獨酌無相親	獨り酌みて相親しむもの無し
舉杯邀明月	杯を舉げて明月を邀ぶ
對影成三人	影に對して三人と成る
月既不解飲	月 既に飲むを解せず
影徒隨我身	影 徒らに我が身に隨う
暫伴月將影	暫く月と影とを伴い
行樂須及春	行樂 須く春に及ぶべし
我歌月裴回	我歌えば 月 裴回し
我舞影零亂	我舞えば 影 零亂す
醒時同交歡	醒むる時 同に交歡し
醉後各分散	酔うて後 各おの分散す
永結無情遊	永く無情の遊を結び
相期邈雲漢	相い期す邈かなる雲漢に

と詠ずる。「花前月下」の風流な雰囲気の中かで一杯飲みたいのだが、友達がい  
ないから、月を誘って、自分の影と三人で飲もうという。残念ながら、月は酒  
に弱い、影も無口だ。しかし、とにかく飲もう。私が歌えば、月もこれに伴っ  
てくれる。私が踊れば、影も一緒に動いてくれる。酔っていない時は三人で互

---

<sup>61</sup> 李白詩本文は彭定求等編・『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）に依る。以下同じ。

いに楽しんでいるが、酔ってしまえば三人はばらばらになる。永遠に世俗には  
無い友情を結び、遠い所でまた会う約束をしよう。

白居易は、0980「山中問月」にこう詠じている。

爲問長安月	爲に問う 長安の月
誰教不相離	誰か相い離れざらしむる
昔隨飛蓋處	昔は <sup>がい</sup> 蓋を飛ばす處に隨い
今照入山時	今は 山に入る時を照す
借助秋懷曠	助けを借りて <sup>ちゅうかいむな</sup> 秋懷曠しく
留連夜臥遲	<sup>りゅうれん</sup> 留連して 夜臥遲し
如歸舊鄉國	<sup>きゅうきょうこく</sup> 舊鄉國に歸るが如く
似對好親知	<sup>こうしんち</sup> 好親知に對するに似たり
松下行爲伴	松下 行くゆく伴を爲し
谿頭坐有期	<sup>けいとうぎ</sup> 谿頭坐して期あり
千巖將萬壑	<sup>せんがん</sup> 千巖と <sup>ばんがく</sup> 萬壑と
無處不相隨	<sup>ところ</sup> 處として 相い隨わざるはなし

長安で見慣れた月に聞きたいことがある、誰がお前を俺の側から離れさせないのだろう。昔は俺の車蓋を照らしてくれ、今は山の奥までくっついてくる。  
お前の助けを借りて俺は秋の悲しみを少なくし、ぶらぶらしつつお前を見て、  
眠るのも遅くなる。まるで故郷に帰って、親友に会っているようだ。松の下を  
行けばお前がついて来てくれ、溪畔に座ればお前が会いに来てくれる。千巖も

萬壑も、何処へ行ってもお前は必ずついてきてくれる。

白居易は月を擬人化しており、月に語りかけている。また月と一緒に旅をしている。

忠臣も、「夜の明きこと晝のごとくして 嘉賓<sup>かひん</sup>を宴す、老兔<sup>かんせん</sup>寒蟾<sup>あるじ</sup> 主人を助く  
(夜明如晝宴嘉賓、老兔寒蟾助主人)」「(八月十五夜、宴月)」と詠じている。  
「老兔寒蟾」は月の別称である。忠臣は八月十五夜の月を擬人化しており、月  
は忠臣を助ける友達になっている。

道真は、これらの伝統を意識しつつ、「風は驅<sup>か</sup>りて旦<sup>あした</sup>に達<sup>いた</sup>るならん、月は送<sup>おのずか</sup>  
りて自<sup>おも</sup>らに通霄<sup>よもすがら</sup>なり (風驅應達旦、月送自通霄)」(075「秋日山行二十韻」)  
という句を詠じている。月は夜を徹して詩人に連れ添い、見送ってくれる友達  
である。

道真は白居易の影響を受けて、前述の 0980「山中間月」の景物を擬人化して  
問いかける形式を学び、さらに白詩の 0915「代春贈」と 0916「答春」、3157「問  
鶴」と 3158「代鶴答」などから、二首一対の問答の形で自分を暗喩することを  
学び、太宰府では、510「問秋月」と 511「代月答」という詩を作って、自分が  
無罪なのに流された悲しみを詠じている。

「問秋月」と「代月答」を見よう。

度春度夏只今秋	春を度り夏を度り 只今は秋
如鏡如環本是鉤	鏡の如く環の如くにして 本これ 鉤 <sup>つりぼり</sup> なり
爲問未曾告終始	爲 <sup>かるがゆえ</sup> に問う 曾つて終始 <sup>しゅうし</sup> を告げざりしことを
被浮雲掩向西流	浮べる雲に掩 <sup>おお</sup> われて西に向いて流る



(510「問秋月」)

月が春を渡り、夏を渡り、今や秋となった。月は鏡のような時もあり、環のような時もあるが、もとのかたちは釣り針である。月に聞きたい、そなたはいつも運行していて終始一貫誤ったことがない、なのにどうして今は浮雲に覆われ西に向かって流れていくのだろうか。

第一、二句（用例 06、10、19）には、「鏡」「環」「鉤」など、中国・日本を通じて、典型的な月の喩詞を並べて、月の形の変化を示している。白詩には、「寒流月を帯びて澄鏡ちようの如く（寒流帶月澄如鏡）」（0913「江樓宴別」）、「落月らくげつ玉環ぎよくかんしず沈む（落月沉玉環）」（2252「和櫛沐寄道友」）、「浦に沈みて月鉤つきこうを生ず（沈浦月生鉤）」（2379「履道新居二十韻」）、「樓角玉鉤生ず（樓角玉鉤生）」（3278「八月三日夜作」）などの例が見える。

この詩では、月が被喩詞として、さまざまなものに見立てられると同時に、喩詞として詩人自身のことをも暗喩している。詩人自身の人生の歩みがまるでいまの秋の月のようだ。春のような明るく、成長する青年時代を過ぎ、夏のように森が枝も葉も緻密で、盛んな壮年時代も超え、今、ついにこの葉も枯れ落ちた荒涼とした秋のような老いの時を迎えた。天皇から信用され、右大臣の高位にまで昇り、また文章博士として世の人の憧れの的となり、自分の人生は、かつては鏡か環に似た満月のように満ち足りたものだった。けれど、私が気づかなかっただけで、本来、私の運命は鉤のように寂しく悲慘なものであったのだ。

第三、四句は、自らを明月に喩え、明月を覆う雲を讒言に寓している。川口

氏は、「古楊柳行に『讒邪害公正、浮雲翳白日』とある。佞者が君主の明を覆うことの喩え。文集にもしばしばみえる」<sup>62</sup>と指摘している。李白の名作「登金陵鳳凰臺」にも、「総て浮雲の能く日を蔽うが爲に、長安は見えぬ人して愁えしむ（総爲浮雲能蔽日、長安不見使人愁）」の名句がある。『楚辭・九辯』には、「何んぞ汨濫せるの浮雲が 森として此の明月を壅蔽す（浮雲陳而蔽晦兮、使日月乎無光）」<sup>63</sup>の句もある。自分が月のように、終始一貫正しいことをしているのに、どうして讒言に覆われ、太宰府に左遷されねばならなかったのかと、月に自分が無実の罪を被る理由を尋ねている。

詩人は次の作で、月に代ってこう答える。

莫發桂香半且圓	莫 <sup>めい</sup> 發 <sup>ひら</sup> 桂 <sup>かん</sup> 香 <sup>ば</sup> しくして 半圓ならんとす
三千世界一周天	三千世界 一周するの天
天廻玄鑑雲將霽	天 <sup>げん</sup> 鑑 <sup>かん</sup> を廻 <sup>めぐ</sup> らして 雲 <sup>まき</sup> 將 <sup>まさ</sup> に霽 <sup>は</sup> れんとす
唯是西行不左遷	唯だ是西に行く 左遷にあらず

（511「代月答」）

第一、二句、月によびかける人よ、私の世界では、莫莢が莢を發し、桂の木が香って、まもなく半月になろうとしている。私は、三千大千世界の天をひとめぐりしているのだ。

「莫は莫莢、堯の時代に生まれたという瑞草。毎月一日から十五日までは莢が一つずつ生じ、十六日から晦日までは一つずつ落ちた……『莫發』は、莫の

<sup>62</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・739頁、510補注。

<sup>63</sup> 星川清孝校註『楚辭』（明治書院・一九七〇年）297頁。

菟が生じること、つまりは月が十五日の満月に近づいていることを言う。」<sup>64</sup>三千世界は「もと仏教經典の用語で、仏教的世界観によれば小千世界、中千世界、大千世界の形に構成されている無数の世界の全体の総称……ここは、月が天に並ぶ二十八の星座、即ち二十八宿を順次まわって天を一周することを言う」<sup>65</sup>。

第三、四句は、「天は深い洞察力ですべてを正しく見抜き、私を覆っている雲ははれようとしている。わたしはただ西に向かって進んでいるだけ……。おまえのように左遷されたわけではないのだ——『玄鑑』は、すべてを映し出す玄妙な鏡。ここはあらゆるもののことを見通すことができる天の力を言う。」<sup>66</sup>の意。

小島氏は、「作者は、月の姿に自分を重ね合わせながら、天をゆく月と地上の自分の運命の根本的な違いを確認して自問自答の作をとじる。」<sup>67</sup>と述べている。道真は、無罪なのに左遷された不幸な運命を、ただ一人で味わうしかない。

道真が月を自分のことに喩えるのには、また以下の例がある。

雲生不放寒蟾素　　雲生まるれば　寒蟾の素きことを放たず

桂死何勝毒蠹緇　　桂死れんとして　何ぞ毒蠹の緇きことに勝えん

（119「余近叙詩情怨一篇、呈菅十一著作郎。長句二首、偶然見訓。更依本韻、重答以謝」）

道真が讒言に遭った時の詩である。寒蟾は月の別称、一句は雲が生じて、月

---

<sup>64</sup> 小島憲之・山本登朗校注『菅原道真』（研文出版、一九九八年）174頁。

<sup>65</sup> 小島憲之・山本登朗校注・前掲註（64）。

<sup>66</sup> 小島憲之・山本登朗校注・前掲註（64）。

<sup>67</sup> 小島憲之・山本登朗校注・前掲註（64）。

の光を覆うこと。下句、「桂」は月中に生えている、その「桂」が毒虫に蝕まれて死んでしまうとは、道真が自分のことを月に暗喩して、誹謗に堪え難い状態を述べている。

また次の例。

當時誰道四方在      當時誰か道<sup>い</sup>いけん    四方に在らんと  
苦惜孤輪獨望西      苦<sup>ねんごろ</sup>に惜しむなり    孤輪の獨り西を望むことを  
(361「霜夜對月」)

道真が都に戻った時の作である。讃岐にいた時を顧みると、当時の吏務は実に忙しかった。独り西に沈みゆく月がまるであのころの自分のようだ。

次に、用例 31 に一部挙げた、道真が太宰府に流された時の名作。

黃萎顏色白霜頭      黃に萎<sup>しぼ</sup>める顏色    白き霜の頭  
況復千餘里外投      況んや復<sup>また</sup>千餘里の外に投<sup>いた</sup>れるをや  
昔被榮花簪組縛      昔は榮花    簪組<sup>しんそ</sup>に縛<sup>しば</sup>られ  
今爲貶謫草萊囚      今は貶謫せられて    草萊の囚<sup>そうらい</sup>となる  
月光似鏡無明罪      月の光は鏡に似たれども    罪<sup>つみ</sup>を明<sup>あきら</sup>むることなし  
風氣如刀不破愁      風の氣は刀の如くなれども    愁えを破<sup>やぶ</sup>らず  
隨見隨聞皆慘慄      見るに隨い聞くに隨いて    みな慘慄<sup>さんりつ</sup>  
此秋獨作我身秋      此の秋は獨り我が身の秋と作りたり  
(485「秋夜」)

私はすでに老い衰え、顔の色も黄色くしなびてしまい、髪の毛も霜のように白くなった。そのうえ、都からはるか遠いところに流れされた。かつて栄華の時には世俗に縛られていた、今は貶謫されて田舎に囚われの身。月の光は鏡のように明るく澄んでいるが、私の無罪を明らかにしてはくれない。秋の夜の風は刀のように鋭いが私の憂えを切り棄ててはくれない。この月を見るにつけてもこの風の音を聞くにつけてもひたすらに悲しい。この世を悲しくさせるはずの秋が、いまは私だけに繞り、私一人にその悲しみを全部背負わせている。

この詩の第六句は、白詩の「凄風<sup>つろど</sup>利きこと刀に似たり（凄風利似刀）」（2542「晩寒」）を学び、結句は、白詩の「秋來たりて只だ一人の爲に長し（秋來只爲一人長）」（0860「鷺子楼」）<sup>68</sup>を学んでいるだろう。

この詩では、月が被喩詞として、鏡に喩えられると同時に、月の純粹で澄明なイメージは、おそらく無罪の詩人のことを暗喩している。

月を自身のことに見立てる例は、日本の漢詩人では道真以前に例がない。ではなぜ、道真は月を見て自分を連想するのだろうか。松浦友久氏は月が李白の心をとらえた主要な原因として、「一つは、月の永遠性、不変性、といった性格である……第二の性格は、その超越性、あるいは不可触性である……第三は、月光のもつ感覚的な特色、とくにその透明、清澄な感覚である」ことを指摘している<sup>69</sup>。道真が、月を見て自分を連想したのは、彼が特に月を愛したことと共に、月の「透明、清澄」、及び「不変性」が、自分の性格に似ていると感じ、感情移入が容易であったことが、大きな要因だと思われる。

---

<sup>68</sup> 波戸岡旭著・前掲註（55）・216頁。

<sup>69</sup> 松浦友久著『李白一詩と心象一』（社会思想社、一九八四）・66頁。

道真は白詩を愛読したが、白詩の詩句や表現自体だけではなく、白居易の表現理論もよく学んでいる。白居易は「元九に与うる書」で比興表現を強調している。また 3661－3672「禽蟲十二章」などの寓言詩六十五首があり、更に「白鶴」、「白牡丹」、「白蓮」など、自身を喩える作がある。後藤昭雄氏は『菅家後集』の 490「雪の夜に家なる竹を思う」に関して、「このような旧套を脱した述懐詩の詠出は、やはり太宰府謫居という、この時詩人が置かれていた境遇の中で始めて達成されたものと見るべきであろう」<sup>70</sup>と論じた。道真は白詩を意識しつつ、またつらい環境に身を置いて、「菊」、「蘭」、「梅」、「松」、「竹」（「475 冬日感庭前紅葉、示秀才淳茂」）などで自分のことを見立てるだけでなく、月を自分の分身と見る表現を創出したのである。

道真は太宰府へ左遷される前と左遷された後、何れの時期にも見立ての技法を幅広く使っている。だが、それは同じような表現の連続ではない。

太宰府へ左遷される前、道真は当時最もすぐれた詩人として、詞藻（詩語の美しさ）、詩想（立意）など、全て同時代の詩人をはるかに超える域に達していた。

「詩臣」であることを自分の生きがいと信じていた道真にとっては、「宮廷詩人」に相応しい詩を作る――美しい言葉、洗練された修辞を持つ詩を作る――ことこそが自らに対する基本的な要求であった。このため、太宰府に左遷される前、「詩臣」道真の詩は、見立て表現よりも、美しい「月」の風景を多く詠じることに力を入れている。

けれども、太宰府へ左遷された道真は、「詩臣」の栄華を失ってしまい、それゆえにこそ、「詩人」の本質に接近することになった。美しい洗練された表

---

<sup>70</sup> 後藤昭雄「菅原道真の詠竹詩について」（福岡女子大学国文学会『香椎潟』第二十七号、一九八二年）79 頁

現を追求するだけではなく、表面的な詞藻よりも、自分の悲しみと痛み、自分の心の本音を率直に表現するようになったのである。大曾根章介氏は、『菅家後集』の 514「謫居の春雪」について、「彼の詩の世界が狭いものであったにせよ、心情を率直にしかも平明流麗な語句で表現した晩年の詩篇は、至純最高の詩境に到達したものといえよう」<sup>71</sup>といわれた。太宰府への左遷という境遇の激変により、「詩臣」という自身の生きがい、アイデンティティの根幹を奪われたことによって、道真は日本漢詩史に永遠に其の名を伝える、空前絶後の詩人になったのである。

道真の詩には自身のこと以外に、月を天皇に見立てる例がある。

年有一秋秋有三	年に一たび秋あり 秋に三 <sup>さん</sup> 有 <sup>あ</sup> り
就中季白意難堪	就 <sup>なかん</sup> 中 <sup>ずく</sup> に季 <sup>すえ</sup> 白 <sup>の</sup> ぞ 意 <sup>こころ</sup> 堪え難き
雨寒遠感吳江水	雨寒くして遠く感ず 吳 <sup>ご</sup> 江 <sup>こう</sup> の水
風冷遙思楚嶺嵐	風冷たくして遙かに思う 楚 <sup>そ</sup> 嶺 <sup>れい</sup> の嵐
淺分花凋蘭不恨	淺 <sup>せん</sup> 分 <sup>ぶん</sup> 花 <sup>は</sup> は凋 <sup>しぼ</sup> むとも 蘭は恨みず
貞心露結竹猶含	貞 <sup>てい</sup> 心 <sup>しん</sup> 露を結びも 竹の猶お含めるがごとし
穿雲明月應能照	雲を穿ちて明月 能く照らすならん
何更人前事事談	何ぞ更に人の前にして 事事 <sup>かた</sup> を談らん

當時依微諫、負小讒。應製之次、聊以形言。

當時微諫に依りて、小讒を負えりき。應製のついでに、聊かに言に形<sup>あらわ</sup>せるなり。

(436「九日後朝、同賦秋深、應製」)

<sup>71</sup> 大曾根章介著『大曾根章介日本漢文学論集・第二巻』（汲古書院、一九九八年）48 頁。

この作は、寛平八年（八九六）、道真が都にいたときの作である。詩の註から見ると、道真はこの時、誹謗中傷を受けている。一年に一度の秋が訪れた、この秋には初秋・仲秋・晩秋の三つの時がある。このうち、晩秋こそは、最も耐え難い。雨がまるではるか彼方にある呉江の水のように冷たく、風も楚嶺の嵐のように冷たい。ちっぽけな私だが蘭の花びらが落ちてもそれを悲しみはしない、白霜を結んで、竹が貞しい心を持つように私の貞節は変わらない。浮かべる雲が明月を覆っても、月の光はきっと雲を貫いて真実を照らしてくれる。人々の前で、これが讒言であることを一一説明する必要はない。

この作において、道真は自分のことを品格が高い蘭と竹に見立てている。そして、浮かべる雲が明月を覆っても、月の光が雲を貫いて真実を照らすという、この明月は天皇を暗喩しているだろう。天皇の聡明を称賛し、天皇はきっと真実を知ってくださるだろうと詠っている。これについては、波戸岡氏が已に指摘している<sup>72</sup>。

道真が天子のことを月に見立てる例は、他にもある。

高齋待月月何淹      高齋に月を待てば    月何ぞ淹しき  
不畏風霜幾撥簾      畏れず    風霜の幾たびか簾を撥うことを  
(036「山陰亭、冬夜待月」)

詩人は書齋で月が昇るのを待っている。だが月は今雲に覆われ、寒く厳しい

---

<sup>72</sup> 波戸岡旭著・前掲註（55）・213 頁



風が何度も書斎の簾を襲っている。この詩は貞観八年（八六六）、二十四歳の時の作である。川口氏は、「当時詩人無用論などが横行した社会風潮の厳しさが菅家廊下に及んだ」<sup>73</sup>と指摘している。詩人無用の厳しい風潮が横行していても、詩人は自信満々である。「明月」は、天子が自分を認めてくださるを寓しているだろう。

また次の例。

秋珪一隻度天存      秋珪一隻 天を<sup>わたり</sup>度りて存す  
下照千家不定門      下は千家を照らして 門を定めず  
聖主何憐三五夜      聖主 何ぞ三五の夜を憐れみたまわん  
欲將望月始臨軒      將に月を望まんとして 始めて軒に臨む

（441「八月十五夜、同賦秋月如珪、應製」）

円い玉のような秋の月が空を渡っていき、一切の差別なく、世の中の人を照らしている。聖主はなぜにこのようにも十五夜の月を慕って欄干に依られるのか、自分もまた明月のように全てを平等に照らしたいと望まれるからだろう。

この詩は、道真が寛平九年（八九七）、右大臣に任じられた最盛期、八月十五日の侍宴詩である。道真は、明月が、一切の差別なく世の中の人を照らすように、貴賤の区別なく国民を愛する聖主を頌え、月に天皇を寓している。

ところで、中国の伝統では、天地万物の全てに「陰陽」がある。太陽は「陽」、月は「陰」、昼は「陽」、夜は「陰」、男は「陽」、女は「陰」、天子は「陽」、

---

<sup>73</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・132頁、36注2。

臣子は「陰」である。従って中国では天子は、「日」「太陽」に喩えられるのであって、「月」に喩えられることはない。

では、道真はどうして月に天皇を寓するのだろうか。

月を人に寓する例は、中国・日本、どちらにおいても例は少なくない。孤独の「月」によって、「戍邊」の旅人や、「閨怨」の婦人などを象徴し、「月」を恋人あるいは美人の容貌に暗喩するなどの句は枚挙に暇がない。挙例は省略する。

『懷風藻』では、「皇明<sup>こうめい</sup> 日月と光<sup>て</sup>り、帝德<sup>ていとく</sup> 天地に載<sup>み</sup>つ（皇明光日月、帝德戴天地）」（大友皇子「侍宴」）が、「日」と「月」とを併用し、天皇のことを賛美する。『文華秀麗集』所収、菅原清公の「侍中翁主挽歌<sup>おうしゅ</sup>の詞に和し奉る」其二は、「漢浦<sup>かんぽ</sup> 星光<sup>せいこう</sup>缺け、秦樓<sup>しんろう</sup> 月影<sup>げい</sup>空し（漢浦星光缺、秦樓月影空）」と詠じ、皇女が亡くなるのを、まるで星の光が欠け、月もなくなるようだと表現している。島田忠臣は、「高侍郎を夢む」に、「筆海<sup>ふみかい</sup> 君に瀉<sup>よ</sup>りて 此の日に爲<sup>つ</sup>らるるも、長悲して 片月早に泉に歸りぬ（筆海瀉君爲此日、長悲片月早歸泉）」と詠じ、亡くなった親友の高階令範<sup>74</sup>のことを月に見立てている。

和歌にも、『万葉集』にすでに、月を身分、才能などが高い人に見立てる例がある。例えば、柿本人麿が「日並皇子尊殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」、その短歌の「反歌二首」の其二（169）は、「あかねさす 日は照らせれど ぬばたまの夜渡る月の 隠らく惜しも（[あかねさす]日は照らしているが、[ぬばたまの]夜空を渡る月が 隠れるのが惜しい）」<sup>75</sup>と詠じている。これは、月が隠れるのを皇太子が薨ずることに喩えている。

<sup>74</sup> 中村璋八・島田伸一郎校註・前掲註（52）・152頁。

<sup>75</sup> 小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集①』（小学館、一九九四年）120頁。

『古今和歌集』の巻十七、部立「雑歌上」に載る業平朝臣および尼敬信の句も、月を身分が高い人に喩えている。業平朝臣は、「惟喬親王の狩しける供にまかりて、宿りに帰りて、夜一夜酒を飲み物語をしけるに、十一日の月も隠れなむとしける折に、親王酔ひ内へ入りなむとしければ、よみ侍りける」<sup>76</sup>に、884「飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端にげて入れずもあらなむ（まだ見飽きてはいないのにもうお月様が隠れるのですねえ。西の方の山の頂が身を引いて月をいれないでもらいたいものです）」と詠じている。これは、惟喬親王のことを月に喩えている。また、尼敬信は、「田村の帝の御時に、斎院に侍りける慧子の皇女を、「母、あやまちあり」と言ひて斎院を代へられむとしけるを、そのことやみにければやめる」に、885「おほぞらを照り行月し清ければ雲かくせどもひかり消なくに（大空に輝き上がっていく月のように清らかなあなたですもの、雲が隠そうとしたけれど、光は消えませんでしたよ）」と詠じている。これは、無罪と証明された斎院とその母のことを月に比喻している。

和歌では、天皇を日に喩える例も、やはり少なくない。日に喩えるのは、例えば、『万葉集』には、「やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子 荒たへの藤原が上に……（[やすみしし] わが大君の [高照らす]日の神の御子天皇が[荒たへの]藤原の地で……）」（傍点は筆者、以下同様）（0050「藤原宮之役民作歌」）とあり、また「やすみしし 我ご大君 高照らす 日の皇子の 聞こし食す御食つ国 神風の 伊勢の国は……（[やすみしし] わが大君の [高照らす]日の神の皇子の天皇が お治めになる 御食つ国の [神風の] 伊勢の国は……）」（3234「雑歌二十七首」）とあるように、同じような表現がいくつか見える。

---

<sup>76</sup> 小沢正夫校注・訳『古今和歌集』（小学館、一九九一年）336頁、次の例も同じ。

ただし、「日の皇子—『やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子』のような尊称は、天武・持統・文武の三天皇および天武の皇子の一部に限って用いられる」<sup>77</sup>との説があり、これに拠れば、その用法は限定され、かつ天皇だけではなく、身分の高い皇子に喩えることもある。

いずれにしても、「日の皇子」が、天皇もしくは皇子に喩えられる例は、『万葉集』中、枚挙に暇がない。

「日月」を天皇のことに寓する例は、日本漢詩においては、前述の「侍宴」大友皇子の句以外に、「天子哀傷して神筆を下す、悠悠たる功德 日月と懸る（天子哀傷下神筆、悠悠功德日月懸）」<sup>78</sup>（小野岑守「奉和傷右衛大將軍故宿禰御製」）の句にも見える。

和歌では、『万葉集』、0933「山部宿禰赤人作歌一首（并短歌）」の長歌で、「天地の 遠きがごとく 日月の 長きがごとく おしてゐる 難波の宮に わご大君 国知らずらし（天と地が 無窮であるように 日と月が 長久であるように 【おしてゐる】 難波の宮に わご大君 遠長く国を治めになるのも無理はない）」と、天皇が日月のように長く国をお治めになることを頌えている。また、4486「天平寶字元年十一月十八日、於内裏肆宴歌二首」の同伴宿禰家持が作った歌は、「天地を 照らす日月の 極みなく あるべきものを 何をか思はむ（天地を 照らす日月のように 限りなく あるべき皇位なのに 何かを不足に思うことがあろうか）」と、天皇のことを日月に寓している。

中国では、天子の聖徳を「日月」の光に喩える例がよくみえる。例えば、「赫赫たり 大聖朝、日月 光り照臨す（赫赫大聖朝、日月光照臨）」（顧況「雜曲

<sup>77</sup> 小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集③』（小学館、一九九五年）394頁。

<sup>78</sup> 小野岑守詩の本文は『日本文学大系・第二十四巻』（国民図書株式会社、一九二七年）に依る

歌辭」)、「睿明は 日月と懸かり、千歳 此の時に逢う(睿明日月懸、千歳此時逢)」(王昌齡「駕幸河東」)など、その用例は多い。

以上のように、天子・天皇を「日」、または「日月」に喩える例は、少なからず見える。しかし、天子・天皇をただ「月」に喩える例は、中国・日本を通じて見えない。月を天子に寓したのは、道真の独創なのである。

道真は、菅原清公の「侍中翁主挽歌の詞に和し奉る」、柿本人麿の「反歌二首」の其二について見たように、月を身分の高い皇子や皇女に喩える例を意識している。また、真っ暗な夜空で、一番眩しいのは確かに月であり、特に、十五日夜のまんまるの月には、美しく光り輝く強い印象を持っている。加えて、道真は、少年時代から月を愛し、道真の意識の中で、月はとりわけ身近で、また高い地位を占めていた。それゆえに、道真は、日本の漢詩史の上だけでなく、中国の詩においても稀少な、彼独特の比喩表現を多数作りだしたのである。

#### 第四節 まとめ

本章では、道真詩における「月」の見立て表現がどのように白詩を初めとする中国文学の影響を受けて、新たな表現技法を作り出したのかを考察した。

道真は中国文学の伝統を深く意識しつつ月を詠じており、月を自分の人生に対する思いと深く関係するものとして詠じている。さらに月を自分のこと、天皇のことに喩え、修辞の美しさを突き抜けて、太宰府では自分の真情を痛切に流露することとなった。道真の詩は、まさしく藤原克己氏がいわれるように「空前絶後の光芒を放つもの」<sup>79</sup>となったのである。

---

<sup>79</sup> 藤原克己著・前掲註(3)・268頁



### 第三章 道真詩における「梅」の見立て

#### 第一節 はじめに

道真が花木を愛し、特に梅を好んでいることはすでに周知のことである。道真は邸内に梅をたくさん植えていて、邸宅は「紅梅殿」や「白梅殿」と呼ばれる。太宰府に左遷されて、都の家から出発する前、庭前の紅梅を見て、「東風吹かば にほひをこせよ 梅花 主なしとて 春を忘るな」<sup>80</sup>と沈痛な気持ちを訴えた。主人の心を感じた梅が、一夜にして大宰府まで飛んできたという「飛梅」の伝説もよく知られている。梅はすでに道真の象徴と見られる。

道真は紅梅や白梅、宮廷の梅や家の梅、都の梅及び流謫地の梅など、様々な梅を詠っているが、それらにおいて、見立ての表現技法がよく見られる。道真詩において、梅を何かに見立てたり、また何かを梅に見立てたりした作は十二首存在している。そのうち、被喩詞としての用例は九首あり、喩詞としての用例は七首である(一首中に、梅が喩詞と被喩詞の両方で使われている作がある)。道真は梅を擬人化して、自分の友達や自分の分身のように見ている。

本章では、道真詩における「梅」の見立て表現について、道真がどのように白居易の詩をはじめとして、中国詩の表現を受容して様々な梅を唱えたかを考察する。

#### 第二節 「梅」の見立て表現

---

<sup>80</sup> 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』（岩波書店、一九九〇年）。

道真の詩作においては、梅を被喩詞として何かに見立てる表現を含む作が九首ある。その内、喩詞が「衣裳」のものが五首、「美人」または「美人の顔」のものが四首、「化粧」が二首、喩詞「雪」、「鶏舌」、「麝香」、「瓊」、「巢」、「塩」、「歌」、「栄華」が各一首（一首中に、複数の喩詞を含む作がある）である。具体的な用例は以下の通り。

喩詞	用例
衣裳（きぬ）	<p>01. 梅樹花開剪白繪      梅樹    花開いて白い<sup>かとり</sup>繪を剪る</p> <p>春情勾引得相仍      春情    勾<sup>こう</sup>引<sup>いん</sup>されて    相<sup>あい</sup>仍<sup>よ</sup>ることを得たり</p> <p>（011「翫梅華、各分一字」）</p> <p>02. 先吹煖火頻溫熨      先<sup>だん</sup>ず<sup>か</sup>煖火を吹いて頻<sup>しきり</sup>に<sup>あた</sup>た<sup>の</sup>め熨<sup>す</sup></p> <p>更作霜刀且剪成      更<sup>そう</sup>に<sup>とう</sup>霜刀を作して且<sup>しば</sup>く<sup>き</sup>剪<sup>り</sup>て<sup>つく</sup>成る</p> <p>（067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字」）</p> <p>03. 裂素誰容勞少女      素<sup>しら</sup>を<sup>き</sup>裂<sup>ぬ</sup>いて誰<sup>ゆる</sup>か<sup>さん</sup>容<sup>さん</sup>    少女<sup>つと</sup>を<sup>め</sup>し<sup>む</sup>ることを</p> <p>占巢莫怪妬初鶯      巢<sup>す</sup>を<sup>し</sup>めて<sup>あや</sup>怪<sup>し</sup>ぶこと<sup>なし</sup>莫<sup>し</sup>    初<sup>しよ</sup>鶯<sup>おう</sup>を<sup>ね</sup>た<sup>む</sup>ことを</p> <p>（067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字」）</p> <p>04. 鳥語還嫌簧在舌    鳥<sup>さえず</sup>の<sup>す</sup>語<sup>り</sup>は還<sup>り</sup>て    簧<sup>ふえ</sup>の<sup>うた</sup>舌<sup>が</sup>に在<sup>る</sup>かと嫌<sup>う</sup></p> <p>華容不放錦成窠    華<sup>か</sup>の<sup>お</sup>容<sup>は</sup>    錦<sup>か</sup>を<sup>な</sup>して<sup>な</sup>窠<sup>を</sup>成<sup>さ</sup>しめず</p> <p>（077「早春、侍宴仁壽殿、同賦認春、應製」）</p> <p>05. 語偷絃管韻      語<sup>こと</sup>は<sup>ば</sup>絃<sup>げん</sup>管<sup>かん</sup>の<sup>ひび</sup>韻<sup>き</sup>を<sup>ぬ</sup>す<sup>む</sup></p>



	<p>棲ト綺羅花 <sup>すみか きら</sup> は綺羅なす花を <sup>し</sup> めたり</p> <p>(083「早春、侍内宴、賦聽早鶯、應製」)</p>
美人(美人の顔)	<p>06. 玉屑添來軟色寬 玉屑 添え來たり <sup>なごやか</sup> 軟なる色 <sup>ゆたか</sup> 寬なり</p> <p>雞舌纔因風力散 <sup>けいぜつ</sup> 雞舌 纔に風力に因りて散ず</p> <p>(066「早春侍宴仁壽殿、同賦春雪映早梅、應製」)</p> <p>07. 春風便逐問頭生 <sup>しゅんぶう</sup> 春風 便ち <sup>お</sup> 逐いて <sup>とうせい</sup> 頭生を問う</p> <p>爲翫梅粧繞樹迎 <sup>かるがゆえ</sup> 爲に梅粧を翫び <sup>ばいしょう</sup> 樹を繞して迎う</p> <p>(067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字」)</p> <p>08. 粉顔暗被粧樓借 粉の <sup>かんばせ</sup> 顔は <sup>そら</sup> 暗に粧樓に <sup>しょうろう</sup> 借られたり</p> <p>香氣多教浴殿移 <sup>かんば</sup> 香しき氣は多く <sup>よくでん</sup> 浴殿に移さしむ</p> <p>(366「御製、提梅花、賜臣等句中、有今年梅花減去年之歎。謹上長句、具述所由」)</p> <p>09. 羊角風猶頌曉氣 <sup>ようかく</sup> 羊角の風は 猶 <sup>ぎょうき</sup> お曉氣を <sup>わか</sup> 頌つ</p> <p>鵝毛雪剩假寒粧 <sup>がもう</sup> 鵝毛の雪は <sup>あまつ</sup> 剩さへ寒粧を <sup>かんしょう</sup> 假す</p> <p>不容粉妓偷看取 粉の <sup>みもとびと</sup> 妓の <sup>ひそか</sup> 偷に <sup>み</sup> 看取を <sup>と</sup> 容さず <sup>ゆる</sup></p> <p>應叱黃鸝戲踏傷 <sup>き</sup> 黄なる <sup>うぐひす</sup> 鸝の <sup>たわむれ</sup> 戲に <sup>ふ</sup> 踏み傷ることを <sup>いさ</sup> 叱ぶべし</p> <p>(440「早春侍宴、同賦殿前梅花、應製」)</p>
化粧	<p>10. 春風便逐問頭生 <sup>しゅんぶう</sup> 春風 便ち <sup>お</sup> 逐いて <sup>とうせい</sup> 頭生を問う</p> <p>爲翫梅粧繞樹迎 <sup>かるがゆえ</sup> 爲に梅粧を翫び <sup>ばいしょう</sup> 樹を繞して迎う</p> <p>(067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字」)</p> <p>11. 宮門雪映春遊後 宮門 雪は映ず <sup>しゅんゆう</sup> 春遊の <sup>のち</sup> 後</p> <p>相府風粧夜飲來 相府 風は粧う <sup>やいむ</sup> 夜飲したるより</p>

	(068「齋雨日、獨對梅花」)
雪	<p>12. 雪片花顔時一般 雪片花顔 時に一般</p> <p>上番梅援待追歡 上番の梅援 追歡を待つ</p> <p>(066「早春侍宴仁壽殿、同賦春雪映早梅、應製」)</p>
雞舌	<p>13. 雞舌纔因風力散 雞舌 纔に風力に因りて散ず</p> <p>鶴毛獨向夕陽寒 鶴毛 獨り夕陽に向いて寒し</p> <p>(066「早春侍宴仁壽殿、同賦春雪映早梅、應製」)</p>
麝香	<p>14. 偷得誰家香劑麝 誰か家の香劑の麝を偷かんこと得たる</p> <p>送將何處粉樓瓊 何れの處の粉樓の瓊をか送將れる</p> <p>(067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字」)</p>
瓊	<p>15. 偷得誰家香劑麝 誰か家の香劑の麝を偷かんこと得たる</p> <p>送將何處粉樓瓊 何れの處の粉樓の瓊をか送將れる</p> <p>(067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字」)</p>
巢	<p>16. 裂素誰容勞少女 素を裂いて誰か容さん少女を勞めしむること</p> <p>を</p> <p>占巢莫怪妬初鶯 巢を占めて怪しむこと莫かれ初鶯を妬むこと</p> <p>を</p> <p>(067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字」)</p>
塩	<p>17. 好是銀鹽多結蘂 好是し 銀鹽多く蘂を結ぶ</p> <p>應緣丞相欲和羹 丞相の羹を和せんことを欲りするに緣るべし</p> <p>(067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字」)</p>

歌	<p>18. 開未人看蜂且採 開けども人の<sup>かえり</sup>看<sup>み</sup>ることあらざれば 蜂<sup>はちしほらく</sup>且く採る</p> <p>落非時至笛先吹 落ちること時<sup>ときいた</sup>至るにあらざれば 笛先ず吹く</p> <p>(366「御製、提梅花、賜臣等句中、有今年梅花減去年之歎。謹上長句、具述所由」)</p>
栄華	<p>19. 誰人攀折榮華取 誰<sup>だれひと</sup>人か 榮<sup>ひら</sup>ける華<sup>はな</sup>を攀<sup>ひ</sup>き折りて取れる</p> <p>新拜相公挑四支 新<sup>しやうこう</sup>に相公<sup>はい</sup>を拜<sup>よ</sup>して四<sup>えだ</sup>つの支<sup>たが</sup>を挑へり</p> <p>(366「御製、提梅花、賜臣等句中、有今年梅花減去年之歎。謹上長句、具述所由」)</p>

梅を被喩詞とした見立て表現は以下の通り。

被喩詞	用例
香り	<p>20. 紙障猶卑依樹立 紙<sup>し</sup>障<sup>しょう</sup> 猶<sup>ひき</sup>し卑くして樹に依りて立つ</p> <p>蘆簾暫撥引香迴 蘆<sup>み</sup>簾<sup>れん</sup> 暫く<sup>かか</sup>撥<sup>こう</sup>げて香<sup>かう</sup>を引きて迴す</p> <p>(068「齋雨日、獨對梅花」)</p>
巢	<p>21. 語偷絃管韻 語<sup>こと</sup>は絃<sup>げん</sup>管<sup>かん</sup>の韻<sup>ひび</sup>きを偷<sup>ぬす</sup>む</p> <p>棲ト綺羅花 棲<sup>すみか</sup>は綺<sup>き</sup>羅<sup>ら</sup>なす花<sup>はな</sup>をトめたり</p> <p>(083「早春、侍内宴、賦聽早鶯、應製」)</p>
化粧	<p>22. 粉顔暗被粧樓借 粉<sup>かんばせ</sup>の顔<sup>そら</sup>は暗<sup>しょうろう</sup>に粧<sup>しょうろう</sup>樓<sup>ろう</sup>に借<sup>か</sup>られたり</p> <p>香氣多教浴殿移 香<sup>かんば</sup>しき氣<sup>き</sup>は多く<sup>よく</sup>浴<sup>よく</sup>殿<sup>でん</sup>に移<sup>うつ</sup>さしむ</p> <p>(366「御製、提梅花、賜臣等句中、有今年梅花減去年之歎。謹上長句、具述所由」)</p>

	上長句、具述所由」)	
自分	<p>23. 若教花口能言語 若し花口<sup>かこう</sup>をして能く言語せしめませば</p> <p>定報通宵笑不歡 定めて通<sup>よもすがら</sup>宵笑めども歡びざることを報<sup>つ</sup>げなまし</p> <p>(241「正月十日、同諸生吟詩」)</p> <p>24. 幽溪轉感求賢詔 幽<sup>ふか</sup>き溪も轉<sup>いた</sup>た感ぶ 賢きひとを求むる<sup>みことのり</sup>詔</p> <p>古木方驚養老恩 古き木も方に驚く 老を養<sup>めぐ</sup>う恩み</p> <p>望鶴晴飛千萬里 望ま<sup>く</sup>は 鶴の晴れて千萬里を飛びなんことを</p> <p>思梅艷發九重門 思は<sup>く</sup>は 梅<sup>えもい</sup>の艷<sup>ここのえ</sup>はず九重の門に發きなんことを</p> <p>(285「聞群臣侍内宴賦花鳥共逢春、聊製一篇寄上前濃州田別駕」)</p>	
娘（衍子）	<p>25. 笑松嘲竹獨寒身 松を笑い竹を嘲る 獨り寒き身</p> <p>看是梅花絕不鄰 看よや<sup>は</sup>是梅花 絶つて鄰せず</p> <p>(452「賦殿前梅花、應太皇製」)</p>	
息子（淳茂）	<p>26. 菊枯蘭敗梅猶嬾 菊枯れ蘭敗<sup>やぶ</sup>りて 梅猶<sup>ものう</sup>お嬾し</p> <p>詩興當迫落葉凝 詩興は當に落葉<sup>らくよう</sup>に迫<sup>したが</sup>いて凝<sup>さだま</sup>るへし</p> <p>(475「冬日感庭前紅葉、示秀才淳茂」)</p>	

### 第三節 被喩詞としての「梅」

『懷風藻』に収められた、葛野王の「春日翫鶯梅」には、こう詠じられている。

素梅開素靨　　素梅　素靨を開き

嬌鶯弄嬌声　　嬌鶯　嬌声を弄す

これは、現存している日本の漢詩において、梅を詠じた初めての詩だろう。  
この詩においては、詩人が梅の花を美人の顔に見立てて、梅を擬人化している。

葛野王以降、冬または初春の時、宮中詩宴の重要な題材として、詠梅詩がよく登場する。梅に関しての見立て表現もしばしば詠じられていて、特に梅と雪とは、お互いに見立てられている。

例えば、梅を喩詞として雪を見立てる例として、「花の梅下に亂るるが如く、絮の柳前に<sup>めぐ</sup>縈るに似る（如花梅下亂、似絮柳前縈）」（平城天皇『経国集』卷十三「舊邑對雪」）、「春絮　冬柳に<sup>まよ</sup>縈い、新花　舊梅に發く（春絮縈冬柳、新花發舊梅）」（朝道永『経国集』卷十三「詠雪應詔」）、「園に絮無きの柳無く、庭に花有るの梅有り（園無無絮柳、庭有有花梅）」（金雄津『経国集』卷十三「詠雪」）「樹樓　皆な白玉、草樹　總て花梅（樹樓皆白玉、草樹總花梅）」（枝永野『経国集』卷十三「詠雪」）の数例がある。梅を被喩詞として、雪に見立てている例として、「梅雪　殘岸に亂れ、煙霞　早春に接す（梅雪　亂殘岸、煙霞　接早春）」（大伴宿禰旅人『懷風藻』「初春侍宴」）の例がある。

『経国集』に収められた、紀長江の「七言賜看紅梅探得爭字應令一首」はこう詠じている。

香雜羅衣猶可誤　　香　羅衣に雜はり　猶お誤るべし

光添粧臉遂應爭　　光　粧臉に添う　遂に應に爭うべし

儻因委質瑤堦側　　儻し質を瑤堦の側に委ぬるに因れば

朝夕徒仰少陽明　　朝夕徒らに仰ぐ　少陽明

『凌雲集』に収められた、小野岑守の「雜言於神泉苑侍讌賦落花篇應製」には、「臺上の美人　花綵を奪い、欄中の花綵　美人の如し（臺上美人奪花綵、欄中花綵如美人）」の句がある。

以上、道真以前の日本の漢詩人が用いた梅に関する見立て表現について概観したが、だいたい「雪」に繞るものが多いことが分かる。梅に多様な姿を与えて、新たな創意を加えたのは、やはり道真である。

道真は一首の作で複数の比喻表現を使う作がよくみられる。この表現技法が、梅を詠じる詩作にもよく使われる。

例えば、

雪片花顔時一般　　雪片花顔　時に一般

上番梅援待追歡　　上番の梅援　追歡を待つ

冰紈寸截輕粧混　　冰紈　寸に截りて輕き粧　混けたり

玉屑添來軟色寬　　玉屑　添え來たり　軟なる色寬なり

雞舌纔因風力散　　雞舌　纔に風力に因りて散ず

鶴毛獨向夕陽寒　　鶴毛　獨り夕陽に向いて寒し

明王若可分眞僞　　明王　若し眞僞を分つべくは

願使宮人子細看　　願はくは　宮人をして子細に看しめよ

（066「早春侍仁壽殿、同賦春雪映早梅、應製」）

この詩は貞観十五年（八七三）、道真が都で内宴を侍る時の作である。およそその意味は以下の通り。

早春時の雪のひとひらは、梅の綻びる花びらと、見分けがつきにくい。梅の幹を支える添え木は、花かと思まがう春雪をかぶっている。これを見て、春が来て、ほんものの花が咲く時を楽しんで待っている。寸ごとに断ち切った、氷のような白い絹に似た春の雪が、ふわりと梅の花に降りかかって、軽い化粧を施した花の顔にいりまざる。仙郷の玉のかけらのような春の雪が梅の花に降りかかって、梅の花の色が綺麗になった。鶏の舌のような紅梅、風が吹き散らした。雪は鶴の毛のようで、夕陽に向かって寒々と映えている。聖明な天子が、もし紅梅と鶏舌、春雪と鶴毛との真偽を弁別したいならば、どうか宮中の女官に観察させていただきたい。

この詩においては、道真が複数の見立て表現を駆使して、梅の様々な姿、及び雪を詠っている。

第一、二句。道真は雪のひとひらと梅の花びらを、お互いに暗喩させている。それに、「花顔」と、梅の花を擬人化している。梅を雪に見立て、また雪を梅に見立てている例は、いずれも道真以前から少なくない。白居易も梅を雪に見立てた例として「銀河沙漲る 三千里、梅嶺花排す 一萬株（銀河沙漲三千里、梅嶺花排一萬株）」（2322「雪中即事寄微之」）、また雪を梅に見立てた例として「伍相廟邊 繁くして雪に似たり、孤山園裏 麗にして妝えるが如し（伍相廟邊繁似雪、孤山園裏麗如妝）」（2388「憶杭州梅花因敘舊遊寄蕭協律」）というように詠じている。前述したように、道真の前の日本の漢詩人も雪を梅

に見立てている例がある。

雪と梅が同じように見えると詠っているのは、「雪處 花の満つるかと疑い、  
花邊 雪の回るに似たり（雪處疑花満、花邊似雪回）」（盧照鄰「梅花落」）、  
「去歲 荊南 梅雪に似たり、今年 薊北 雪梅の如く（去歲荊南梅似雪、今  
年薊北雪如梅）」（張説「幽州新歲作」）などの例もある。

道真は従来 of 伝統を受け入れているだろう。

「梅援」については、川口氏によれば、元稹の「何處 春早く生じて、春は  
梅援中に生じる（何處生春早、春生梅援中）」<sup>81</sup>による。

第三、四句。道真は梅の花を、化粧した美人の顔に暗喩している。それに、  
白い雪を白絹、おしろい、玉屑を使って、雪の様々な形に見立てている。この  
句における雪の見立て表現については、第二部第一章に前述した。

第五、六句において、道真は紅梅を描写しており、紅い梅花を、鶏の舌に見  
立てている。これについては、元稹に「梅 雞舌を含んで 紅氣を兼ねたり（梅  
含雞舌兼紅氣）」（「早春尋李校書」）の例がある。道真はおそらく元稹の影  
響を受けているだろう。

第七、八句は、紅梅と鶏舌、春雪と鶴毛との真偽が分かりにくいと言っ  
ている。小野岑守の「雜言於神泉苑侍讌賦落花篇應製」（『凌雲集』）に、「人花兩  
兩 共に相對す、誰か分明するを得ん 偽と眞と（人花兩兩共相對、誰得分明  
偽與眞）」がある。

この詩では、道真は梅のことを雪、美人の顔、鶏の舌に見立てている。単に  
梅のそれぞれの喩詞を見ると、道真は従来 of 伝統を脱出してない。但し、この

---

<sup>81</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・653 頁



ように多様なイメージを使って梅を歌うのは、日本の漢詩人では道真が最初だろう。

道真が一首の詩において、複数の見立て表現を使って梅を詠じているのは、さらに以下の例がある。

春風便逐間頭生	しゅんふう 便ち <sup>お</sup> 逐いて <sup>とうせい</sup> 頭生を問う
爲翫梅粧繞樹迎	かるがゆえ ばいしょう 爲に梅粧を翫び 樹を繞して迎う
偷得誰家香劑麝	誰か家の <sup>こうざい</sup> 香劑の <sup>じや</sup> 麝 <sup>ぬす</sup> を偷むこと得たる
送將何處粉樓瓊	何れの處の <sup>ふんろう</sup> 粉樓の <sup>たま</sup> 瓊をか <sup>おく</sup> 送將れる
先吹煖火頻溫熨	先ず <sup>だん</sup> 煖火 <sup>か</sup> を吹いて <sup>しきり</sup> 頻に <sup>あた</sup> 温め <sup>の</sup> 熨す
更作霜刀且剪成	更に <sup>そうとう</sup> 霜刀 <sup>な</sup> を作して <sup>しばら</sup> 且く <sup>き</sup> 剪りて <sup>つく</sup> 成る
裂素誰容勞少女	<sup>しらきぬ</sup> 素 <sup>き</sup> を裂いて <sup>ゆる</sup> 誰か <sup>ゆる</sup> 容さん <sup>つと</sup> 少女を <sup>つと</sup> 勞めしむることを
占巢莫怪妬初鶯	<sup>す</sup> 巢 <sup>し</sup> を占めて <sup>あや</sup> 怪し <sup>な</sup> ぶこと <sup>な</sup> 莫かれ <sup>しよおう</sup> 初鶯 <sup>ねた</sup> を妬むことを
繁華太早千般色	<sup>はなは</sup> 繁華 <sup>はなは</sup> 太だ早し 千般の色
號令猶閑五日程	<sup>ごうれい</sup> 號令 <sup>しずか</sup> 猶お閑なり <sup>ご</sup> 五日程 <sup>についで</sup>
好是銀鹽多結藥	<sup>ことむな</sup> 好是し <sup>ぎんえん</sup> 銀鹽 <sup>おお</sup> 多く <sup>ずい</sup> 藥を結ぶ
應緣丞相欲和羹	丞相の <sup>あつもの</sup> 羹 <sup>か</sup> を和せんことを欲するに <sup>よ</sup> 緣るべし

(067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字」)

貞觀十六年（八七四）、道真が右大臣藤原基経の家宴を侍った時に詠じた作である。この詩については、川口氏が「これは、この年の内宴の後朝に、好學

の基経が文人数人を招いて詩宴をひらいたときの作」<sup>82</sup>と述べている。

詩のおおよその意味は以下の通り。

春風が追いかけてきて、初生児は誰かと訪ねる。梅は化粧をしたように花を綻ばせて、春風を迎える。梅の匂いは、どこかの家から盗んだ麝香の香剤のように香り、梅の花びらはどこかの彩色をした高楼から送られた美しい紅玉のようである。春風は火熨斗のように、梅の花を暖めてしきりに押し広げる。その上で、霜の刀で梅の花の衣裳を作り上げる。梅の花の装束は、少女に裁縫させたものではなく、春風が作ってくれたものだ。春一番の早い鶯が梅の花をひとり占めして巣を作って、春風が妬んだって無理もない。春の盛りの時節にはまだまだ早く、天の号令である風がのどかに吹いて、あと五日間ある。梅の花の白い輝く花蕊が集まっているが、それは真っ白に輝く塩によく似ている。ちょうど大臣が羹を和するために塩梅（塩と酢）を以て調理するように、天子を助けて天下を治めようと思われるからであろう。

この詩においては、道真が七つの喩詞を使って、梅の姿をいきいきと詠っている。

第一、二句。道真は従来 of 春風を擬人化する伝統を受けて、春風が人のように、初生児は誰かと追いかける姿をいきいきと描写している。

さらに、道真は梅の木を美人に、梅花を美人の化粧に見立てている。花や木を美人に喩える例は、挙例に暇がないほど多い。梅花を化粧のおしろいに見立てている例として、白居易は「粉片は梅朶を妝い、金絲は柳條を刷す（粉片妝梅朶、金絲刷柳條）」（2330「新春江次」）がある。

---

<sup>82</sup>川口久雄校註・前掲註（5）・652 頁。

第三、四句。第三句は梅の香りを麝香の香剤に見立てている。この句については、第四章の第四節に後述する。第四句は紅梅の花を、紅玉の宝石に見立てている。この句について、「瓊」は美しい玉のことで、従来、白い花、真っ白の雪、及び建物（「瓊楼」）などの喩詞として、よく使われる。例えば、白居易は白牡丹を「瓊」に見立てて、「折來比顔色、一種如瑤瓊（折り來って顔色を比すれば、一種 瑤瓊の如し）」（0031「白牡丹」）と詠じている。また、白蓮を「我慙ず 塵垢の眼、此の瓊瑤の英を見ることを（我慙塵垢眼、見此瓊瑤英）」（0063「潯陽三題之東林寺白蓮」）と、「瓊」に喩えている。

但し、「瓊」は赤い玉のことも指し、道真は彩色をした高樓から、美しい玉の宝石を送り届けてきたと、「粉楼瓊」を紅梅に見立てて、喩詞としての「瓊」を色の面も生かして、新たな見立て表現を詠じたのである。

第五、六句。道真は梅の花を春風が作ってくれた衣裳に見立てている。まず暖かい風が吹いて、まるで火熨斗のように梅の花を伸ばし、そして、「霜刀」になって、梅の衣裳を裁縫する。

この春風が刀のように花を裁縫するというイメージについては、韓愈が「霜刀に汝を剪る 天女の勞、何事か頭を低れて 桃李を學ぶ」（「芍藥歌」）と詠じている。賀知章の名句、「知らず 細葉誰が裁ち出さんと、二月春風は剪刀に似たり（不知細葉誰裁出、二月春風似剪刀）」（「詠柳」）は、柳の葉ははさみのような春風が剪ると詠じている。

白居易が花を何かで剪らせた布に見立てている例も、「淚痕<sup>ゆうそん</sup>裏損す 臙脂<sup>えんじ</sup>の臉、剪刀裁破す 紅綃の巾（淚痕裏損燕支臉、剪刀裁破紅綃巾）」（0593「山石榴寄元九」）、「膩如玉指塗朱粉、光似金刀剪紫霞（膩は玉指の朱粉を塗るが如く、光

は金刀<sup>きんとう</sup>の紫霞<sup>ししか</sup>を剪るに似たり)」(3125「題令狐家木蘭花」)「一叢千朶 闌干を  
壓す、紅綃を剪碎して 卻って團と作す(一叢千朶壓闌干、剪碎紅綃卻作團)」  
(0914「題山石榴花」)など、多数の詩に詠じている。

道真のこうした発想は、これらの用例の影響を受けているだろう。

第七、八句。梅の花を白絹と春の鶯の巢に見立てている。第七句で、道真は  
春風、梅を擬人化して、梅の花を「素を裂いて」作った衣裳と詠っている。花  
を「裂素」に見立てる例としては、蘇頌の「剪刀 素を裂くに因りて、妝粉 紅  
を開くと爲す(剪刀因裂素、妝粉爲開紅)」(「立春日侍宴内出剪綵花應制」)  
がある。

第八句では、道真は想像力を発揮して、梅の花を鶯の巢に暗喩している。花  
を鳥の鶯に見立てるのは、道真以前に用例がない。道真が新たな表現を創出し  
たのである。

第九、十句。梅の見立て表現とは関係ないが、春はまだ早いと述べている。

第十一、十二句。最後に、道真は真っ白な塩を梅の蕊に見立てている。第十  
二句について、川口氏は「『丞相』のことを、『塩梅の臣』というのによる。  
そのことは書経、説命下に『若し和羹を作くれば、爾は惟れ塩梅たらむ』とあ  
るによる」<sup>83</sup>と指摘されている。

道真は様々な喩詞を使って、梅を詠っている。最後に梅を丞相の羹を和する  
塩梅に見立てて、明主賢臣の理想的な君臣関係になりたいという望みを訴えて  
いる。

以上のように、道真は一首の詩作において、多様な喩詞を用いて、集中的に

---

<sup>83</sup>川口久雄校註・前掲註(5)・653頁。

梅のことを詠っている。視覚的な梅の色、形などを見立て表現にするだけでなく、嗅覚的な梅の香りも見立て表現にしており、その比喻表現は立体的といえる。

周知のように、「梅」は中国においては、宋の文人によく愛好されている。唐の前に、詩文にしばしば登場した「梅」は、「青梅」など果実の「梅」が多い。「梅の花」にこれほどに力を入れて、これほど複数の見立て表現を使って、立体的に梅を歌うのは、道真が初めてである。道真は従来の花の見立て表現の伝統を受けて、さらに自分の創意を加えて、梅に多彩なイメージを与えたのである。

#### 第四節 分身としての梅

道真は梅に深い感情を抱いている。梅を擬人化して、梅に話しかけると同時に、時には、道真はさらに梅を自分の分身に見立てて感情移入している。例えば次の例。

月色猶迷臘雪殘	月色 猶お迷 <sup>まど</sup> う 臘 <sup>ろう</sup> 雪 <sup>せつ</sup> 殘れるかと
自知春淺我心寒	自 <sup>おのずか</sup> らに知る 春淺くして我が心寒きことを
若教花口能言語	若し花口 <sup>かこう</sup> をして能く言語せしめませば
定報通宵笑不歡	定めて通 <sup>よもすがら</sup> 宵笑めども歡ばざることを報 <sup>つ</sup> げん
時屬諒闇、故云。	時、諒闇 <sup>りょうあん</sup> に屬す、故に云う。

(241「正月十日、同諸生吟詩」)

仁和四年（八八八）の正月、讃岐守に任ずる道真が自宅で越年するため、し

ばらく京都に戻った。これは送別の詩宴に道真が詠じた句である。

おおよその意味は以下の通り。月の清かな色に、旧年の雪が残っているのかとふと迷う。春は浅く、旅立とうとする私の心も寒い。若し梅の花にものを言わすことができるとしたら、一晩中花は笑み咲いていても心の中では悲しいと言うだろう。

この詩について、川口氏は「道真が一晩中菅家廊下の学生たちと談笑していても、心の底から飲んでいないということを諷する」<sup>84</sup>と指摘している。

詩の第一、二句、月の光を雪と見たてて、月の光を昨年の十二月の残った雪かと疑っている。

第三、四句、道真は梅の花を擬人化して、梅の言葉に託して自分の本音を訴えている。詩の自注には、「時、諒闇に屬す、故に云う」とある。天子崩御の諒闇のため、またもうすぐ都から離れて讃岐に帰任しなければならないという道真の心の中の悲しみが、梅によって表現されたのである。第三句は、白居易の「若し此の花をして兼ねて語を解せしめば（若使此花兼解語）」（0760「酬和元九東川路詩十二首 山枇杷花二首」）をほとんどそのまままねている。

そして次の例。

… …

幽溪轉感求賢詔	ふか	幽き溪も轉た	いた	感ぶ	賢きひとを求むる	みことのり	詔
古木方驚養老恩		古き木も方に驚く		老を養う	めぐ	恩み	
望鶴晴飛千萬里		望まくは		鶴の晴れて		千萬里を飛ばん	ことを

<sup>84</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・295頁。

思梅艶發九重門　　思はくは　梅の艶は<sup>えもい</sup>ず<sup>ここのえ</sup>九重の門に發かんことを  
裏香低翅風莎地　　香を<sup>つつ</sup>裏<sup>つばき</sup>む翅を低る　風莎<sup>ふうさ</sup>の地  
爭得時來入禁園　　<sup>いか</sup>爭でか時來りて禁園に入ること得ん

(285「聞群臣侍内宴賦花鳥共逢春、聊製一篇寄上前濃州田別駕」)

これは仁和五年（八八九）、道真が讃岐にいる時、宮中の公宴を思い出した時、島田忠臣に送った作である。

幽谷の奥深くに居て、君が賢人を天下に求めて人材を登用しようという詔勅を拝して、いたく感慨を催す。古木も、君が養老の恩旨を拝して、驚き感奮した。私は鶴が晴天に乗じて、高く千万里を雄飛する姿を望み見たい、梅を九重の宮居の門辺に早春第一の素晴らしく香しい花を咲かせたいと思う。但し、梅は匂いを包み隠して表さないし、鶴は海の風が吹きすさび海浜の砂地のところで、翅を低れたまま飛翔しない。どうかして天子の園に入りたい。

この詩はで道真は、様々のものを使って、自分と天皇、宮廷を寓している。幽谷の古木は、即ち都から離れて、讃岐に客居している、天皇のお側に戻りたい道真のことを暗喩している。鶴と梅によって、道真自身のことを寓したものである。

道真が自身のことを「古木」、「鶴」、「梅」に暗喩して、天子の仁政を「春」、都のことを「禁園」に寓しているのは、讃岐にいる道真が、自身のことを活気がなく、抱負をかなえられない「古木」と思い、もし都に戻れば、自身も天子のお側で鮮やかな花を咲かせる梅花だということのである。この詩は、宮廷詩人を志向した道真が、自身の抱負をかなえたいという本音を訴えた作品である。

この詩に対して、島田忠臣は以下のように答えている。

……

南郭槁株初著艶      南郭の<sup>か</sup>槁れたる株    初めて艶を著く  
北山傷雀擬酬恩      北山の傷める雀    恩に<sup>むく</sup>酬いんと擬す  
君魂花發馳宮掖      君が魂    花と發いて    <sup>きゅうえき</sup>宮掖に<sup>は</sup>馳するならん  
我意鷗飛到海門      我が意    鷗と飛びて    海門に到らなん  
可惜翰華兼綵鳳      惜しむべし    <sup>かん か</sup>翰華と<sup>さいほう</sup>綵鳳と  
逢春不得共林園      春に逢いて    林園を共にすることを得ざるを

（「奉酬讚州菅使君、聞群臣侍内宴、賦花鳥共逢春見寄什」）

城南の枯れた梅の木には初めて美しい花が咲いている。北山の傷いた雀でさえも、恩返ししたいと思う。君の魂は梅の花の香りのように、宮中まで馳せ至り、私の心も鷗となって、君が居るところに飛んでいく。ただし、花が咲いている君と美しい鳳凰のような天子が、この春の季節にともに林園にいることがないのは残念である。

この詩において忠臣は、道真のことを梅の花、自分のことを鳥、宮中のことをたくさんの花が咲く林園に見立てている。落ち込んでいる道真を励まし、また、道真が自身の抱負をかなえられないため、同情しているという気持ちを伝えたのである。

道真自身も忠臣も、道真のことを、天子の林園に入れないう一株の梅に見立てており、道真の都に戻りたい気持ちが感じられる。やはり宮廷詩人として天子のお側にいるのは、道真にとって、最大の喜びだったのであろう。



道真は自分のことだけではなく、用例 25、26 のように、子供のことも「梅」を使って見立てている。

笑松嘲竹獨寒身      松を笑い竹を嘲る      獨り寒き身  
看是梅花絕不鄰      看よや是梅花      絶つて鄰せず  
何事繁華今日陪      なにごとぞ      繁華      こんにちにはべ      今日陪ること  
一朝應過二天春      一朝      過ぐるならん      二天の春

（用例 25、452「賦殿前梅花、應太皇製」）

これは昌泰二年（八九九）、都での作である。道真は「時に天子、太上皇に朝覲す、故に云う（于時天子、朝覲太上皇、故云）」と自注している。

梅はもともと孤立して、松と竹に嘲笑され、彼らのたぐいと隣合わせになっ  
たことがない。しかし、今日は盛んに花を咲かせているではないか。これはた  
った一日で、二代の天子をいただく春を過ごせるということだろうか

この詩において、道真は娘衍子のことを梅に暗喩している<sup>85</sup>。女御としての  
衍子は、このような盛んな宴会に侍れることは、またとない光栄であるという。

道真が子供のことを「梅」に喩えている詩は、もう一首ある。

.....

孤立如逢衣錦客      孤立立って      錦を<sup>き</sup>衣る客に逢うが如し

---

<sup>85</sup> 波戸岡氏に依る（波戸岡旭著・前掲註 [55]・247 頁）。この詩については、難解なため、様々な解釈がある。一説には、梅は道真が自分のことを比喩したものといい、道真が当時自身の孤立された政治環境を指したものともいう。

四分疑伴散花僧　　四に分れては　花を散ずる僧に伴うかと疑う

菊枯蘭敗梅猶嬾　　菊枯れ蘭敗れて　梅猶お<sup>ものう</sup>嬾し

詩興當迫落葉凝　　詩興は落葉に迫いて<sup>さだま</sup>凝らん

（用例 26、475「冬日感庭前紅葉、示秀才淳茂」）

これは昌泰三年（九〇〇）、道真が政治失脚の直前、当時の政治状況の下、自身の運命に不祥な予感をもって詠じた作である。淳茂は道真の四男である。

詩の前半は当時の厳しい状況を暗喩したものである。自分は今、孤立していて、自分の運命もまるで風に吹かれて四方に飛散する紅葉のようだ。

菊が枯れて蘭も敗れてしまったのに、梅はまだ花を咲かせる時になっていない。ここの「菊」、「蘭」は道真が自分のことを喩えたものである。「梅」は淳茂を暗喩しており、道真は淳茂に詩を研鑽させたいという気持ちを詠じている。

この詩について、川口氏は「文章得業生として、文章道に修業中の淳茂に対して、その詩作を鼓舞するかにみえる」<sup>86</sup>と評している。

道真は特に「梅」を好んだため、梅に感情移入しやすく、「梅」を自身の分身、また子供たちの象徴としたのであろう。

道真の前にも、「梅」を擬人化して何かを象徴している詩がすでにある。例えば、『凌雲集』には、「書閣　閑に來たりて　冬を春に變え、梅花　獨り笑みて　啼く人に向う（書閣閑來冬變春、梅花獨笑向啼人）」（「和進士生初春過菅祭酒宅悵然傷懷簡布臣藤三秀才作一絕」）がある。白居易も、「春風先ず發

---

<sup>86</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・476頁。

く 苑中の梅、櫻杏桃梨 次第に開く。薺花榆莢 深村の裏、亦た道う 春風  
我が爲に來れりと（春風先發苑中梅、櫻杏桃梨次第開。薺花榆莢深村裏、亦道  
春風爲我來）」（2608「春風」）と梅などの花木を擬人化しては、何かを寓してい  
る。

但し、道真のように、明確に「梅」を自分の分身、または息子、娘の象徴と  
して詠じるのは、道真の前代には未見である。道真が梅に込めた感情が誰より  
も深かったから、意義深い「梅」の詩をたくさん詠出したのだろう。

## 第五節 まとめ

本章では、菅原道真の「梅」の見立て表現について考察した。道真は従来の  
「梅」と「雪」がお互いに見立てるという伝統を受け継ぎつつ、侍宴詩を詠じ  
るとき、一首の「梅」の詩の中に、様々な喩詞を使って、「梅」のイメージを  
豊かにした。さらに、視覚的にだけでなく、嗅覚的にも、「梅」を見立ててい  
る。

道真は梅に対して前代の詩人の誰よりも深い感情を持っていた。道真の前代  
の詩人は、梅によって、自分の気持ちを伝える作を詠じたが、道真はさらにそ  
れを乗り越えて、「梅」を自身に最も近いものとして、「梅」に自身のこと、  
また子供のことを象徴させている。

既に述べたように、道真の文学において、「雪月花」の表現はその中軸を  
占めるものである。「梅」は、「雪」と「月」と同じく、道真に最も親しいも  
のとして、道真の人生と深く繋がっているのである。

## 第四章 道真詩における「舞妓」の見立て

### 第一節 はじめに

前述のように、道真は見立て表現をたくさん駆使して、「雪」「月」「花」のことを歌っている。「雪」「月」「花」は道真の人生の一種の象徴と見られるが、道真の「雪」「月」「花」の作には、詩人の都、宮廷での生活への望み、楽しみや未練もよく感じられる。本章では、道真における、都の宮廷生活の一つの象徴としての「舞妓」について、道真がどのように詠出しているのかを考察する。

道真が舞妓の踊る姿を描写している作は五首ある。その題名は以下の通り。

詩題	制作の時と所
027「早春侍内宴、同賦無物不逢春、應製」	貞観十年（八六八）、都
099「九日侍宴、各分一字、應製」	元慶六年（八八二）、都
148「早春内宴、侍仁壽殿、同賦春娃無氣力、應製一首」	仁和一年（八八五）、都
183「早春内宴、聽宮妓奏柳花怨曲、應製」	仁和二年（八八六）、都
284「正月十六日、憶宮妓踏歌」	仁和五年（八八九）、讃岐

前の四首は宮中の宴会の席で詠んだものであり、最後の一首は讃岐での作だが、やはり宮中での宴会を思っの作である。あらかじめ述べておけば、道真

詩における「舞妓」は、道真の都での宮廷生活と強い繋がりがある。本稿では、道真詩における「舞妓」の表現について、どのように白居易詩をはじめとする中国の詩人たちの「舞」表現を受容しているのか考察し、併せて道真にとって「舞」の表現がどのような意味を持っていたのかについて論じたい。

## 第二節 「早春内宴、侍仁壽殿、同賦春娃無氣力、應製一首」における舞の表現

元慶九年（八八五）、道真は都で内宴に侍った時、148「早春内宴、侍仁壽殿、同賦春娃無氣力、應製一首」を詠じている。

紉質何爲不勝衣	しらぎぬ <sup>し</sup> なた <sup>か</sup> す <sup>な</sup> 質 <sup>す</sup> の 何 <sup>なん</sup> 爲 <sup>す</sup> れぞ衣 <sup>ころも</sup> に勝 <sup>た</sup> えざる
謾言春色滿腰圍	いつわ <sup>い</sup> りて言 <sup>い</sup> えらく 春 <sup>はる</sup> の色の <sup>いろ</sup> 腰 <sup>こし</sup> の圍 <sup>めぐ</sup> りに満 <sup>み</sup> てりと
殘粧自嬾開珠匣	ざんしょう <sup>ざ</sup> おのずか <sup>お</sup> ものう <sup>も</sup> 自 <sup>し</sup> ら嬾 <sup>い</sup> し 珠匣 <sup>しゅこう</sup> を開 <sup>ひら</sup> くすら
寸歩還愁出粉圍	すんぽ <sup>す</sup> ま <sup>ま</sup> 還 <sup>かへ</sup> た愁 <sup>し</sup> う 粉圍 <sup>ふんい</sup> を出 <sup>で</sup> でんことを
嬌眼曾波風欲亂	こ <sup>こ</sup> 嬌 <sup>め</sup> びたる眼 <sup>まなこ</sup> は 波 <sup>か</sup> を曾 <sup>か</sup> ねて 風亂 <sup>かぜみだ</sup> さんとし
舞身廻雪霽猶飛	舞 <sup>ま</sup> える身 <sup>み</sup> は 雪 <sup>ゆき</sup> を廻 <sup>めぐ</sup> らして 霽 <sup>は</sup> れても猶 <sup>なほ</sup> お飛 <sup>と</sup> べるがごと
	し
花間日暮笙歌斷	はな <sup>は</sup> ひま <sup>ひ</sup> 日 <sup>ひ</sup> 暮 <sup>く</sup> れて 笙 <sup>しょう</sup> の歌 <sup>うた</sup> 斷 <sup>き</sup> えぬ
遙望微雲洞裏歸	はる <sup>は</sup> 遙 <sup>か</sup> かに微 <sup>かす</sup> かなる雲 <sup>う</sup> を望 <sup>もち</sup> みて 洞 <sup>ほら</sup> の裏 <sup>うち</sup> に歸 <sup>かえ</sup> る

この作において、詩人は細やかな技法を駆使して、内宴の時の舞妓の姿を、その動きに注目して描写している。

この詩には、道真が長い詩序を書いており<sup>87</sup>、内宴の歴史を述べ、それに宮妓の「纖手細腰」や、髪と肌が「軟雲襪李」である状態を述べ、「韶光骨に入り」、「変態繽紛」たる美しい姿を描写している。

詩のおおよその意味は以下の通り。

「妓女たちのしらぎぬのような細やかな肌には、薄絹の舞い衣さえ重たげだが、それはなぜかと尋ねると、腰のあたりを春の気配がとりまいているからですわと答えそう。踊り終わった舞妓は化粧が融けてしまい、珠の手箱をちょっと開けるのもものうげで、小きざみに歩いて飾った宮門を出てゆくのも愁わしげ。媚びるまなざしは波の花が重なり風に乱されるよう、舞う姿は雪がひるがえり晴れてもなお飛びかっているようだ。春の花の間にいつしか日も暮れ笙の笛の音も消えていった、舞妓たちは王子喬が鶴に乗って雲を見ながら仙洞に帰ったようにひきあげていく」。

周知のように、道真は白居易の影響を強く受けているが、この詩には、とりわけ白詩における舞妓の表現の影響がはっきりと見える。

この詩題、「早春内宴、侍仁壽殿、同賦春娃無氣力、應製一首」について、川

---

<sup>87</sup> 詩序は以下の通り。「それ早春の内宴は、荊楚の歳時に聞かず。姫、漢の遊樂を踵ぐにも非ず。君の故を作せし自り、我が聖朝に及べり。殿庭の甚だ幽かなる、嵩山の鶴架に逢いしことを咲う。風景の最も好き、曲水の鶯と花の老いたるを嫌う。節は則ち新たなり、一人慶び有り、年はこれ早し、萬壽疆り無し。是に粧樓才を進め、粉妓事に従う。纖手細腰、之れを父母に受け、軟雲襪李、髮膚に備われり。況や陽氣神を陶らかしぬれば、玉階を望みて餘りの喘ぎあらんや。韶光骨に入りぬれば、紅袖を飛ばして羸れたる形あらんや。彼の羅綺の重衣爲る、情無きことを機婦に妬み、管絃の長曲に在る、閑えざることを伶人に怒る。変態繽紛として、神なり又神なり。新聲婉轉として、夢なるか夢に非ざるか。臣籍を重門に通じ、綵霞を蹈みて歩を失ふ。仙に登ること半日、青鳥に問いて音を知る。樂の身に逼る、詞は口に容れず。祝して堯帝に請い、封人に代らんとすと云うことしかり。謹みて序す（夫早春内宴物、不聞荊・楚之歳時。非踵姫、漢之遊樂。自君作故、及我聖朝。殿庭之甚幽、咲嵩山之逢鶴架。風景之最好、嫌曲水之老鶯花。節則新焉、一人有慶、年惟早矣、萬壽無疆。於是粧樓進才、粉妓從事。纖手細腰、受之父母、軟雲襪李、備于髮膚。況陽氣陶神、望玉階而餘喘。韶光入骨、飛紅袖以羸形。彼羅綺之爲重衣、妬無情于機婦、管絃之在長曲、怒不閑于伶人。変態繽紛、神也又神也。新聲婉轉、夢哉非夢哉。臣通籍重門、蹈綵霞而失歩。登仙半日、問青鳥以知音。樂之逼身、詞不容口。請祝堯帝、將代封人云余。謹序」。

口氏は「文集の[洛中春遊、呈諸親友]に[春樹花珠顆、春塘水麴塵。春娃無氣力、春馬有精神。〈詠春遊一時之態。〉]とあるによる」<sup>88</sup>と指摘している。春娃は美人、即ち、道真は白居易を学んで、「氣力の無い」、なよなよとした美人を詠じたのである。

詩序にも舞妓を描写している句がある。「玉の階<sup>たま きざはし</sup>を望<sup>のぞ</sup>みて餘<sup>あま</sup>りの喘<sup>あえ</sup>ぎあらんや（望玉階而餘喘）」、舞妓たちは舞台の階段を見ただけでもう息が切れる、というように、舞妓たちの「なよなよとした」美しさを描いている。また「彼の羅綺<sup>わうい</sup>の重衣<sup>た</sup>爲る（彼羅綺之爲重衣）」と、うすぎぬにさえ耐えがたいほどの舞妓たちのか弱い様を描写している。

第一・二句、「紈なす質の何爲れぞ衣に勝えざる、謾りて言えらく春の色の腰の圍りに満てりと」は、舞妓の薄絹の舞い衣にさえ耐えない可憐でなよなよとした姿を描写している。白詩 0914「題山石榴花」に「風<sup>じょう</sup>嫋として 舞腰<sup>ぶよう</sup>に香り盡きず、露<sup>き</sup>銷えて 妝<sup>しょうけん</sup>臉に涙新たに乾く（風嫋舞腰香不盡、露銷妝臉淚新乾）」とあるのは、山石榴の花を舞妓に喩えたものであり、また 0152「牡丹芳」に「葉に映じては 他情<sup>た じょうしゅうめん</sup>羞面を隠し、叢<sup>くさむら</sup>に臥しては 力無くして醉<sup>すいしやう</sup>妝を含む（映葉多情隱羞面、臥叢無力含醉妝）」というのも、牡丹の花を美女に喩えたものだが、これらの「なよなよとした」美の表現が、道真のこの句の表現のもとになっているだろう。「舞腰」、それは細い腰であり、なよなよとした「か弱い」美しさがここにある。

白詩には、他にも、「か弱い」美しさ、「なよなよとした」美しさがしばしば見える。0582「江南遇天寶樂叟」には「貴妃<sup>えんてん</sup>宛轉として 君側<sup>はべ</sup>に侍る、體弱く

---

<sup>88</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・676 頁補注 1。

して 珠翠の繁きに勝えず（貴妃宛轉侍君側、體弱不勝珠翠繁）」、楊貴妃は鮮やかな珠翠の頭飾りにさえ堪えないほどだと、その繊細な美しさを誇張して表現している。「侍兒扶起嬌無力、始是新承恩澤時」（0596「長恨歌」）、「小しく手を垂れて後 柳力無く、斜に裾を曳く時 雲生ぜんと欲す（小垂手後柳無力、斜曳裾時雲欲生）」（2202「霓裳羽衣歌」）、「歌臉情有りて 睇を凝らすこと久し、舞腰力無く 裙を轉ずること遅し（歌臉有情凝睇久、舞腰無力轉裙遲）」（3378「與牛家妓樂雨後合宴」）などの句も同様である。

この美人の「なよなよとした」美しさの先蹤としては、『玉台新詠』の「集序」に、美人を唱う「纖腰力無くして、南陽の搗衣を怯れ、深宮に生長して、扶風の織錦を笑う（纖腰無力、怯南陽之搗衣、生長深宮、笑扶風之織錦）」<sup>89</sup>という句がある。曹植の樂府「妾薄命行一首」も「腕弱くして 珠環にも勝えず、坐者は歎息して顔を舒ぶ（腕弱不勝珠環、坐者歎息舒顔）」（『玉台新詠』卷九）と、美人の腕が珠環に耐えないほど細いさまを描写している。また劉綏は、「纖腰轉た力なし、寒衣に 恐らくは勝えざらん（纖腰轉無力、寒衣恐不勝）」（『玉台新詠』卷八「雜詠和湘東王三首」其一「寒閨」）と詠じ、楊広（隋煬帝）は「歩むこと緩やかに 力無きを知る、臉は曼しく 動もすれば餘嬌あり（歩緩知無力、臉曼動餘嬌）」（『先秦漢魏晉南北朝詩』隋詩卷三「喜春遊歌二首」其二）と詠じている。したがって、『玉台新詠』や『文選』において「なよなよとした」美しさの表現はすでに成立している。

『遊仙窟』には、「細細なる腰支は、參差として勒かば斷えなんと疑わる（細

<sup>89</sup> 『玉台新詠』の本文及び訓読は、鈴木虎雄訳『玉台新詠』（岩波書店、一九五六年）に拠る。



細腰支、參差疑勒斷)」<sup>90</sup>と「弱體輕身」の崔女郎のか弱い美しさを描写している。

唐代では、「花を看て 情有るが若く、樹に倚<sup>よ</sup>って 力無きを疑う（看花若有情、倚樹疑無力）」（劉希夷「采桑」）、「夜<sup>うすもの</sup> 羅<sup>とばり</sup>の帳に還<sup>かえ</sup>れば 空<sup>むな</sup>しく情有り、春<sup>くんよう</sup> 裙腰<sup>き</sup>を著<sup>おのずか</sup>て 自<sup>おの</sup>ら力無し（夜還羅帳空有情、春著裙腰自無力）」（王適「古別離」）、「羅袖<sup>ら しゅう</sup> 嬋娟<sup>せんけん</sup> 力無きに似たり、行きゆきて落花を拾<sup>ひろ</sup>い 容色<sup>ようしよく</sup>に比す（羅袖嬋娟似無力、行拾落花比容色）」（王翰「春女行」）、「舞いては 銖衣<sup>しゆい</sup>の重きを怯<sup>おそ</sup>れ、笑いては 桃臉の開くかと疑う（舞怯銖衣重、笑疑桃臉開）」（賈至「贈薛瑤英」）、「西施<sup>すい ぶ</sup> 醉舞して 嬌として力無し、笑いて 東窓白玉の床に倚る（西施醉舞嬌無力、笑倚東窓白玉床）」（李白「口號吳王美人半醉」）、「媚語 嬌として聞かず、纖腰 軟かくして力無し（媚語嬌不聞、纖腰軟無力）」（元稹「寄吳士矩端公五十韻」）、「力無く 慵として腕を移し、嬌多くして 躬<sup>み</sup>を斂むるを愛おしむ（無力慵移腕、多嬌愛斂躬）」（元稹「會眞詩三十韻」）など、美人の「か弱さ」を唱う句は多数ある。

このように魏晉以来、多数の詩人が美人の「か弱い」「なよなよとした」姿を唱っているのだが、他の詩人がこの題材を、いずれも一首、もしくは二首（元稹）詠じているのに比べて、白居易は一人で四首詠じている。道真は白居易詩を最も愛読していたから、遠くは『玉台新詠』や『文選』、近くは『遊仙窟』を意識し、そして特に白詩を強く意識しつつこうした表現をしたのであろう。

第三・四句、「殘粧 自ら嬾し 珠匣を開くすら、寸歩 還た愁う 粉闥を出でんことを」は、舞妓たちが舞終わった後、化粧が崩れて控え室で珠の手箱を

<sup>90</sup> 『遊仙窟』の本文及び訓読は漆山又四郎訳『遊仙窟』（岩波書店、一九四九年）に拠る。

開けるのさえ懶げで、小刻みに歩いて退き下がる姿を描写している。

この美人の崩れた化粧、唐詩においては、「殘妝に 石黛を添え、艶舞して 金鈿を落とす（殘妝添石黛、豔舞落金鈿）」（劉長卿「揚州雨中張十宅觀妓」、一説に張謂作）、「殘妝色浅くして 髻鬟開く、笑み朱簾に映りて 客の来たるを<sup>み</sup>観る（殘妝色浅髻鬟開、笑映朱簾觀客來）」（盧綸「古豔詩」）、「自ら愛す 殘妝 曉鏡の中、<sup>すずろ</sup>謾に<sup>かんざ</sup>簪す環釵 緑絲の叢に（自愛殘妝曉鏡中、環釵謾簪緑絲叢）」（元稹「離思五首」）、「殘妝涙を含み 簾を下して坐し、尽日春を傷めども 春知らず（殘妝含淚下簾坐、盡日傷春春不知）」（白居易「傷春詞」）などの句が見える。

美人の化粧が崩れたさまは、一層なよなよとした艶麗さを増す。道真のこの句は、白詩を含むこうした詩句を意識して、なよなよとした美しい舞妓の姿を唱っている。

第五句、「嬌びたる眼は波を曾ねて風亂さんとす」について。これは白詩に用例を見ない。ウィンクを波に喩える例は、初唐の梁鍠に「仍お憐みて 嬌眼を<sup>てん</sup>轉じ、別れを恨みて 一たび横波す（仍憐轉嬌眼、別恨一横波）」（「觀王美人海圖障子」）と見える。

第六句、「舞える身は雪の廻りて霽れても猶お飛べるがごとし」については、川口氏が「雪の舞いひるがえるように舞うさま。白居易、新樂府、胡旋女に[迴雪飄飆轉蓬舞、左旋右轉不知疲]とある」<sup>91</sup>と指摘している。白詩には、舞妓の舞い姿を雪が翻るのに見立てる例が多い。他にも、「艶に舞裙を動かせば 渾て是れ火、愁えて歌黛を凝らせば煙を生ぜんと欲す。風有れば 縦い能く雪を廻らすと道うも、水無くして 何に由りてか<sup>たちま</sup>忽ち<sup>れん</sup>蓮を吐く（豔動舞裙渾是火、愁凝

<sup>91</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・677頁、148補注27。

歌黛欲生煙。有風縱道能迴雪、無水何由忽吐蓮」(0906「酔後題李馬二妓」)、「飄然<sup>ひょうぜん</sup>轉旋<sup>てんせん</sup>して 迴雪<sup>かいせつ</sup>輕し、嫣然縱送<sup>えんぜんしょうそう</sup>して游龍<sup>ゆうりょう</sup>驚く(飄然轉旋迴雪輕、嫣然縱送游龍驚)」(2202「霓裳羽衣歌」)、「身輕くして 迴雪<sup>かいせつ</sup>に委ね、羅薄<sup>らうす</sup>くして 凝脂<sup>ぎょうし</sup>を透<sup>とお</sup>す(身輕委迴雪、羅薄透凝脂)」(3190「楊柳枝二十韻」)、「雪飛んで舞袖<sup>ぶしゅう</sup>を廻<sup>めぐ</sup>らし、塵起<sup>ちりおこ</sup>りて 歌梁<sup>かりょう</sup>を繞る(雪飛迴舞袖、塵起繞歌梁)」(3689「江南喜逢蕭九徹因話長安舊遊戲贈五十韻」)の句があり、全部で五首に「迴雪」の表現が見える。

ただし、この表現は白居易の独創ではなく、白詩以前にすでに以下のような先例がある。

曹植「洛神賦」に「髣髴<sup>ほうふつ</sup>たること 輕雲<sup>けいうん</sup>の月を蔽<sup>おほ</sup>うが若く、飄飄<sup>ひょうよう</sup>たること 流風<sup>りゅうふう</sup>の雪<sup>ゆき</sup>を廻<sup>めぐ</sup>らすが若し(髣髴兮若輕雲之蔽月、飄飄兮若流風之迴雪)」<sup>92</sup>(『文選』卷十九)と見える。また南朝の何思澄は、「洛浦に迴雪かと疑い、巫山 旦雲に似たり(洛浦疑迴雪、巫山似旦雲)」(『玉台新詠』卷六「南苑逢美人詩」)、隋の弘執恭は「舞いを合せて 俱に雪を廻<sup>めぐ</sup>らす、歌を分<sup>わか</sup>ちて 共に塵を落とす(合舞俱迴雪、分歌共落塵)」(『先秦漢魏晉南北朝詩』隋詩卷七「和平涼公觀趙郡王妓詩」)と、美人の舞姿を歌っている。

『遊仙窟』にも、曹植「洛神賦」の句を意識して、「洛川 雪を廻<sup>めぐ</sup>らして、只衣裳を疊ましむるに堪う(洛川迴雪、只堪使疊衣裳)」といい、また「一搦<sup>にぎ</sup>りの腰支は、洛浦に其の迴雪を愧づ(一搦腰支、洛浦愧其迴雪)」と十娘の舞う姿を「迴雪」に喩えている

唐以後では、「自ら憐む 雪を廻<sup>めぐ</sup>らす影、好し取りて 洛川に歸らん(自憐迴

<sup>92</sup> 『文選』の本文及び訓読は小尾郊一・花房英樹著『文選』(集英社、一九七四—一九七六年)に依る。

雪影、好取洛川歸）」（李義府「堂堂詞二首」其二）、「雲を凌ぐ<sup>しの</sup> 詞客の語、雪を迴らす 舞人の嬌<sup>きょう</sup>（凌雲詞客語、迴雪舞人嬌）」（張子容「九日陪潤州邵使君登北固山」）、「舞盤<sup>うずま</sup>きて 迴雪の動くがごとく、弦奏して 躍魚の隨うがごとし（舞盤迴雪動、弦奏躍魚隨）」（獨孤及「李卿東池夜宴得池字」）などの句が見える。

日本では、道真より前、小野岑守にも「洛津の廻雪 影を韜<sup>たう</sup>むに当たり、巫嶺<sup>ちようろうん</sup>の朝雲 行を斂<sup>のぞ</sup>むに應ず洛津廻雪当韜影、巫嶺朝雲應斂行）」（「奉和觀佳人蹋歌御製」）と舞妓の舞う姿を描写している例がある。

以上のように、白居易以前に舞妓の舞姿を「廻雪」で表現する例はすでに見える。しかし、白居易以前の詩人においてはいずれも一首のみである。これに対して白詩では五首も用例があり、白居易がこの表現を極めて好んだことは明らかである。道真は主として白詩を意識して、「廻雪」の表現を用いたものと見てよい。

第七・八句、「花の間に日暮れて笙の歌斷えぬ、遙かに微かなる雲を望みて洞の裏に歸る」は、歌舞が日暮れとなってようやく終わり、舞妓たちが下がっていく時の姿を描写している。

「洞の裏に歸る」とは、即ち彼女たちを仙女に見立てている。道真において美人と「仙洞」が繋がるのは、仙女との愛の交歓の物語である『遊仙窟』の影響も受けていると考えられる。

また美人を仙女に喩える例は、中国の詩によく見える。早く『莊子』「逍遙遊篇」に、「藐<sup>はる</sup>かなる姑射<sup>こや</sup>の山に神人の居<sup>す</sup>める有り。肌膚は冰や雪の若く、淖約<sup>しとや</sup>かなること處子<sup>おとめ</sup>の若し（藐姑射之山、有神人居焉。肌膚若冰雪、淖約若處子）」と

美女の肌の美しさを神女のそれに比す例があり、曹植「妾薄命行一首」に「妙舞<sup>みょうぶ</sup>仙仙<sup>せんせん</sup>として 體輕し、裳解<sup>しょうと</sup>履遺<sup>くつのこ</sup>され 纓<sup>えい</sup>を絶つ（妙舞仙仙體輕、裳解履遺絶纓）」と、舞妓を仙女に喩える例がある。

白居易は「長恨歌」で、亡くなった楊貴妃を仙女とし、「中に一人有り 字は太眞、雪膚花貌 參差として是れなり（中有一人字太眞、雪膚花貌參差是）」と詠っている。白詩には、他にも「上元 鬟<sup>かん</sup>を點<sup>てん</sup>じて 萼<sup>がくりよく</sup>緑を招き、王母 袂<sup>たちと</sup>を揮<sup>ふる</sup>いて飛瓊<sup>ひけい</sup>に別る（上元點鬟招萼緑、王母揮袂別飛瓊）」（2202「霓裳羽衣舞」）、「文君よりも 好<sup>かほよ</sup>く 還<sup>ま</sup>た酒に對し、神女に勝<sup>まさ</sup>れども 雲に歸<sup>き</sup>せず（好似文君還對酒、勝於神女不歸雲）」（0907「盧侍御小妓乞詩座上留贈」）など、美しい妓女を仙女に見立てる例がある。

前述の小野岑守「奉和觀佳人蹋歌御製」は、「還<sup>ま</sup>って知る 人間仙路近く、重ねて見る 桃李目前の生を（還知人間仙路近、重見桃李目前生）」と、舞妓を仙人に見立てている。

道真はこうした伝統及びそれを継承した白居易の影響を受けて、舞妓たちを仙女に喩えている。

### 第三節 踊りの最高潮での悲しみ

183「早春内宴にして、宮妓の柳花怨の曲を奏するを聴く、應製」、全詩はこう詠じている。

宮妓誰非舊李家	宮妓 誰か 舊 <sup>むかし</sup> の李家 <sup>りか</sup> にあらざる
就中脂粉惣恩華	就中 <sup>なかんづく</sup> に 脂粉 <sup>しふん</sup> は惣 <sup>す</sup> べて恩華なるものを

應綠奏曲吹羌竹 曲を奏して羌<sup>きやうちく</sup>竹を吹くに綠<sup>よ</sup>るべし  
 豈取含情怨柳花 豈に 情<sup>あへ</sup>を含みて 柳<sup>りゅう</sup>花<sup>か</sup>を怨<sup>うら</sup>むこと取らんや  
 舞破雖同飄綠朶 舞いは破<sup>は</sup>にして 綠<sup>えだ</sup>なる朶<sup>ひるがえ</sup>を飄<sup>ひるがえ</sup>すに同じくとも  
 歡酣不覺落銀釵 よろこ<sup>よろこ</sup>びは 酣<sup>たけなわ</sup>にして 銀<sup>しろがね</sup>の 釵<sup>かみざし</sup>を落とすことを覺えず  
 餘音縱在微臣聽 よういん<sup>よういん</sup> 縦<sup>たと</sup>い微<sup>び</sup>臣<sup>しん</sup>が聽きに在りとも  
 最歎孤行海上沙 最も歎<sup>なげ</sup>くは 孤<sup>ひと</sup>り海<sup>うみ</sup>の上<sup>ほとり</sup>なる沙<sup>ゆ</sup>を行かんことを

(183「早春宴、聽宮妓奏柳花怨曲、應製」)

仁和二年（八八六）、讃岐へ出立する前、都から離れる直前の作である。おおよその意味は以下の通り。

「宮妓はみな唐の梨園の弟子に劣らない、化粧のおしろいなどはみな天子より下賜されたもの。羌（中国西方辺境）の曲を演奏しているからなのか、あるいは柳花怨の舞の閨怨の思いを含んでいるのだろうか。舞は今や最高調に達して序破急の破を舞い緑の青柳の枝をひるがえすようだ、急調子の舞で髪に挿した白銀の釵が髪から落ちるのにも気づかない。この華やかな音はまだ私の耳に残っているというのに、とりわけ悲しいのは一人海浜の道を讃岐へ行かなければならないことだ」。

第五・六句で、道真は、舞が最高潮に達している時の舞妓の乱れた姿の美しさを表現している。舞のクライマックスで、舞妓の舞が激しすぎて、釵が髪から落ちるのである。

この表現は、白詩に幾つかの例がある。「香<sup>こう</sup>飄<sup>ひるがえ</sup>って歌<sup>か</sup>袂<sup>べい</sup>動き、翠<sup>すい</sup>落<sup>お</sup>ちて舞<sup>ぶ</sup>釵<sup>さ</sup>遺<sup>い</sup>つ（香飄歌袂動、翠落舞釵遺）」（0608「代書詩一百韻寄微之」）、「髮<sup>なめらか</sup>滑<sup>なめらか</sup>に

して歌釵墜ち、妝<sup>よそおい</sup>光<sup>ひか</sup>りて舞汗霑<sup>ぶ かんうるお</sup>う（髮滑歌釵墜、妝光舞汗霑）」（2412「奉和  
汴州令狐令公二十韻」）、「袖<sup>そで</sup>は聲<sup>こえ</sup>を収<sup>おさむ</sup>るが爲<sup>ため</sup>に點<sup>てん</sup>じ、釵<sup>さ</sup>は節<sup>せつ</sup>に赴<sup>おもむ</sup>くに因<sup>よ</sup>りて遺<sup>お</sup>つ  
（袖爲收聲點、釵因赴節遺）」（3190「楊柳枝二十韻」）。さらに、舞の最高潮の  
後の倦怠の美を表現している例として、「鈿頭<sup>でんとう</sup>の銀篋<sup>ぎんべい</sup> 節<sup>う</sup>を撃<sup>う</sup>ちて碎<sup>くだ</sup>け、血色<sup>けっしよく</sup>の  
羅裙<sup>らくん</sup> 酒<sup>さけ</sup>を翻<sup>ひるが</sup>へして汚<sup>けが</sup>る（鈿頭銀篋撃節碎、血色羅裙翻酒汚）」（0603「琵琶  
引」）をあわせれば、全部で四例である。

舞の途中、転調や、舞のスピードの変化により、簪が落ちる表現を白居易は  
特に好んだことがわかる。道真は白居易のこの表現を学んでいる。

舞妓は白銀の釵が髪から落ちるのにも気づかないほどに舞は最高潮を迎えて  
いるのだが、道真はこの時、天皇及び繁華な都から離れる沈痛な思いを吐露し  
ている。

波戸岡氏はこの作について「道真は華麗な舞と楽とを描きつつ、その柳花怨  
の曲本来の流離の主題に自らの境涯を絡めて[怨柳花][落銀釵]などを伏線とし、  
華麗な宴描写から左遷の悲哀の情へと大きな落差をもって結ぶ。その耽美性と  
境涯性とが高度の修辞と手法とにより巧みに融合している。この内宴の詩に限  
らず、道真の公宴詩に、右のごとき自らの悲哀の情を帯びた境涯性が顕著にな  
るのは、この讃岐守赴任当時からである」<sup>93</sup>と述べている。

宮中での舞妓たちの舞いは、道真の宮廷生活の一部である。そしてこの公宴  
や歌舞と別れるのは、道真が都の華やぎと、天皇のお側にいる生活から離れる  
ことを意味している。

他の公宴詩、例えば、以下の句、

---

<sup>93</sup> 波戸岡旭著・前掲註（55）・65頁。

微臣縦得陪遊宴　　<sup>びしん たと ゆうえん はべ</sup>微臣 縦い遊宴に陪ること得るとも

當有花前腸斷人　　<sup>まさ</sup>當に花の前にして <sup>はらわた た</sup>腸斷ゆる人も有らん

(377「有敕、賜視上已櫻下御製之詩、敬奉謝恩旨」)

これは寛平六年（八九四）に侍宴した時の作である。「私はいま楽しく天皇の側に侍宴できているけれど、いま、世の中のどこかには花前月下の美景を見ても腸を断つほどに切ない人がいるだろう」。この栄光の中に在りながら詠われる苦い思いについて、川口氏は「讃州時代のことを思っているところもあろう」<sup>94</sup>といわれている。今、天皇のお側に戻って、宮廷詩人の身分を回復できた道真は、盛んな宴会の場に身を置きながら、不遇に見まわれている人に同情し、また曾ての不遇の時の自分を思って悲しくなっているのであろう。

この、宴会の最高潮で訪れる悲しみは、白詩にもしばしば見える。例えば：

一抛學士筆　　一たび　學士の筆を<sup>なげう</sup>抛ち

三佩使君符　　三たび　使君の符を<sup>お</sup>佩ぶ

未換銀青綬　　未だ　銀青の綬を換えず

唯添雪白鬚　　唯だ　雪白の鬚を添う

公門衙退掩　　公門は　衙より<sup>しりぞ</sup>退きて<sup>おお</sup>掩ひ

妓席客來鋪　　妓席は　客來りて<sup>し</sup>鋪く

履烏從相近　　<sup>り</sup>履烏　<sup>せき</sup>相い近づくに從い

---

<sup>94</sup> 川口久雄校註・前掲註（5）・404頁



謳吟任所須　　おうぎん 須もちうる所に任す  
 金銜嘶五馬　　きんかん 金銜して　五馬を嘶いななかせ  
 鈿帶舞雙姝　　でんたい 鈿帶して　そうしゅ 雙姝を舞まわしむ  
 不得當年有　　とうねん 當年に有るを得ざるも  
 猶勝到老無　　な 猶お老に到るまで無きに勝まされり  
 合聲歌漢月　　聲を合せて　漢月を歌い  
 齊手拍吳歎　　手をひと齎ひとしくして　吳歎を拍つ  
 今夜還先醉　　今夜　還先ず酔う  
 應煩紅袖扶　　應に　紅袖の扶たすくるを煩わすべし

(2437「對酒吟」)

これは宝暦元年(八二五)、蘇州での作である。おおよその意味は以下の通り。

「翰林学士の職を辞めた後、州の刺史を三度勤めた。今も昇進はかなわず、ただ鬚が白くなるばかり。公務が終わると妓女の侍る宴席を設けて客を招く。美妓はかたわらで舞い踊り、思いのままに歌を詠う。刺史として五頭立ての馬を持ち、螺鈿の帯をしめて二人の美妓に舞を舞わせる身分だ。この楽しみを若い時に経験できなかったのは残念だが、年老いるまで識らないよりはいい。そこで声を合わせて「漢月」の歌を唱い、手拍子を打って吳歌を唱った。今夜はまず第一番に酔っぱらって、美妓に介抱してもらおう」。

この「物極まれば則ち反す」<sup>95</sup>の思いは、白詩にしばしば見える。「楊柳枝二十韻」に「春は芳しき華の好きを惜しみ、秋は顔の色の衰うるを憐れむ。取り

<sup>95</sup> 万物は極点に達すればまた初めに返る。出典は、『鶡冠子』「環流」に、「物極まれば則ち反す、命づけて環流と曰う」とある。

来たりて 歌の裏に唱い、笛中に向かい吹くに勝れり。曲罷<sup>おわ</sup>りて 那んぞ能く別れん、情多くして 自ら持せず。纏頭 別物無し、一首 斷腸の詩（春惜芳華好、秋憐顔色衰。取來歌裏唱、勝向笛中吹。曲罷那能別、情多不自持。纏頭無別物、一首斷腸詩）」と詠うのは、簪が落ちるほどの舞の最高潮の後にやってきた悲しみを表現している。また「坐<sup>ざ</sup>しては黄金の帶を耀<sup>かがや</sup>かし、酌<sup>く</sup>みては赭<sup>てい</sup>玉の質<sup>あか</sup>を酤<sup>かん</sup>くす。酣<sup>か</sup>歌して 口停らず、狂舞<sup>きやうぶ</sup>して 衣相い拂う。平生 賞心<sup>しょうしん</sup>の事、施展<sup>してん</sup> 十に未<sup>いま</sup>だ一ならず。會笑<sup>かいしょう</sup> 始め啞啞<sup>はじ あくあく</sup>たり、離嗟<sup>り さ</sup> 乃<sup>すなわ</sup>ち唧唧<sup>しつしつ</sup>たり。餞筵<sup>せんえん</sup> 纔<sup>わずか</sup>に收拾<sup>せいしゅう</sup>し、征棹<sup>にわか</sup> 遽<sup>はい</sup>に排比<sup>ひ</sup>す（坐耀黄金帶、酌酤赭玉質。酣歌口不停、狂舞衣相拂。平生賞心事、施展十未一。會笑始啞啞、離嗟乃唧唧。餞筵纔收拾、征櫂遽排比）」（2258「和微之詩二十三首 和寄樂天」）も、元稹と久しぶりに出会っての、宴の楽しみが未だ尽きない時に、はや襲われる別離の悲哀を詠じている。

以上のように、宴会で舞妓の踊りを見、酒を存分に飲み、歓楽を極めた後、あるいはその時に訪れる嘆老惜春の悲哀は、白居易の舞妓を詠ずる詩によく詠じられている。

道真の白居易受容は全面的である。詩の表現技法はもちろん、その心のありようについても白居易の影響を強く受けている。道真が盛んな宴会に臨みながら、哀感を表出するのは白居易の影響の表れである。そして自分のかつての不遇を思い起こすと、白居易の切なさが一層よく理解でき、白居易の思いに深く共感するのである。

#### 第四節 道真詩における喩詞としての「舞妓」

道真は、しばしば舞妓を喩詞として花や木に喩えている。

例えば、

羅袖猶欺霑舞汗　　羅袖　猶<sup>あざむ</sup>お欺く　舞いの汗に<sup>うるお</sup>霑うかと

花袍自怪沐恩波　　花袍　自<sup>おのずか</sup>ら怪しむ　恩<sup>めぐ</sup>みの波に<sup>あら</sup>沐わるるか

(085「早春、侍内宴、同賦雨中花、應製」)

これは雨中の花を舞妓の「舞汗」に喩えたものである。雨の中、舞妓の薄絹の袖のような花が潤ったのは舞いの為の汗かと思われ、侍臣の花模様のわたいれも天子の恩情の波を浴びるかのように濡れている。

川口氏は、「文集に[和雨中花]の詩がある。元稹の作に和したもの、ただし元詩は、今日秩(佚の誤りか……潘)」<sup>96</sup>と述べる。白居易の「和雨中花」から、その内容の面においては影響を受けていないが、題名は白詩を意識しているのは明らかである。それだけではなく、袖(花びらの喩え)を潤している雨を「舞汗」と形容しているが、「舞汗」という表現は白詩にしばしば見える。

白詩の「舞汗」の例としては、「髮<sup>なめらか</sup>滑にして　歌釵<sup>か　さ　お</sup>墜ち、妝<sup>よそおい</sup>光りて舞汗<sup>ぶ　かん</sup>　霑<sup>うるお</sup>う(髮滑歌釵墜、妝光舞汗霑)」(2412「奉和汴州令狐令公二十韻」)、「歌鬟<sup>か　かん</sup>　翠<sup>すい</sup>羽<sup>う　た</sup>を低れ、舞汗<sup>ぶ　かん</sup>　紅珠<sup>こうしゅ</sup>を墮<sup>おと</sup>す(歌鬟低翠羽、舞汗墮紅珠)」(0908「東南行一百韻寄通州元九侍御澧州李十一舍人果州崔二十二使君開州韋大員外庾三十二補闕杜十四拾遺李二十助教員外竇七校書」)がある。

この「舞汗」という表現は、恐らく白居易が先行する美人の「汗」の表現を

<sup>96</sup> 川口久雄校註・同4・657頁、085補注1。

進化させたものである。始めて「舞妓」と「汗」を結びつけるのは沈約である。

「雲鬢 寶花を垂れ、輕き粧い 微なる汗に染まる（雲鬢垂寶花、輕粧染微汗）」  
（『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷七沈約「樂將殫恩未已應詔詩」）と、美女が汗をうっすらとかいている様子を唱っている。詩中、美人の具体的な身分と、何故汗が出ているかについては詠じていない。しかし詩の題名と内容より、美人は舞妓であり、舞妓が舞を踊って汗をかいている可能性が高い。

沈約以降、「簾文 <sup>たんぶん</sup> 玉腕 <sup>ぎよくわん</sup>に生ず、香汗 紅紗を浸す（簾文生玉腕、香汗浸紅紗）」（『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷二十一蕭綱〔梁簡文帝〕「詠内人晝眠詩」）、  
「汗濕 <sup>うるお</sup>いて 偏 <sup>ひとえ</sup>に粉するに宜し、羅輕くして 詎 <sup>な</sup>んぞ身 <sup>つ</sup>に著けん（汗濕偏宜粉、羅輕詎著身）」（孟浩然「宴崔明府宅夜觀妓」）、「香汗 輕塵 顔色 <sup>けが</sup>を汚せば、新を開き 故 <sup>こ</sup>を合 <sup>と</sup>じて 何 <sup>なん</sup>の許 <sup>もと</sup>にか置く（香汗輕塵汚顔色、開新合故置何許）」（杜甫「白糸行」）、「羅袖 徊翔 <sup>らしゅう</sup>に従い、香汗 寶粟 <sup>うるお</sup>を沾す（羅袖從徊翔、香汗沾寶粟）」（李賀「河南府試十二月樂詞 五月」）など、美人の「微汗」「香汗」「珠汗」を詠じている詩句は多数ある。

「舞妓」と「汗」を組み合わせる例としては、「微風 <sup>びふう</sup> 羅帶 <sup>らたい</sup>を動す、薄き汗 <sup>こうしょう</sup>を染す（微風動羅帶、薄汗染紅粧）」（『先秦漢魏晉南北朝詩』隋詩卷二李德林「夏日詩」）、「舞い來れば 汗は羅衣 <sup>うるお</sup>を濕 <sup>とほ</sup>し徹る、樓上 <sup>たす</sup>人は扶けて玉の梯を下る（舞來汗濕羅衣徹、樓上人扶下玉梯）」（王建「宮詞一百首之八十」）、  
「箏の弦 <sup>きよくし</sup> 玉指 <sup>ふんかん</sup>調え、粉汗 <sup>こうしょう</sup> 紅綃 <sup>こうしょう</sup>拭う（箏弦玉指調、粉汗紅綃拭）」（元稹「寄吳士矩端公五十韻」）などの句がある。劉禹錫が白居易に和した詩「樂天の柘枝に和す」には、「殘拍 鼓 <sup>こ</sup>催 <sup>もよお</sup>して 腰身軟らかなり、汗は羅衣 <sup>す</sup>を透かし 雨花に點ず（鼓催殘拍腰身軟、汗透羅衣雨點花）」の句もある。さらに、白居易自身

にも「鬱金香<sup>うつこんかう</sup>の汗は 歌巾<sup>うたおし</sup>を裏<sup>うら</sup>し、山石榴<sup>さんせきりゅう</sup>の花は 舞裙<sup>まきん</sup>を染<sup>そ</sup>む（鬱金香汗裏歌巾、山石榴花染舞裙）」（0907「盧侍御小妓乞詩座上留贈」）、「新衣<sup>な</sup>を惜<sup>おし</sup>しむ莫<sup>な</sup>くして 柘枝<sup>しゃし</sup>を舞<sup>ま</sup>え、也<sup>また</sup> 塵汚汗霑<sup>じんおかんてん</sup>の垂<sup>た</sup>るるに從<sup>まか</sup>せよ（莫惜新衣舞柘枝、也從塵汚汗霑垂）」（2359「看常州柘枝贈賈使君」）と、舞妓の汗を詠じている。

白居易は従来の美人の汗の表現を意識して、美人の「汗」と美人の「舞」を結びつけた。美人の汗を従来よりもいっそう生き生きとした、艶やかな、「舞汗」という詩語に進化させたのである。

「舞汗」の語は、『全唐詩』中、白詩の二例しかない。道真の「舞汗」は直接白詩を学んでいる。

白詩の「舞汗」の語を学びつつ、それを雨の中の花の形容に転用し、花のしっとりとした美しさを見事に表現しているのは、道真の創意である。道真は、白詩の2268「和雨中花」の詩題と「舞汗」の表現とを融合して、新たな「舞汗」の表現を生み出したといえる。

道真は、柳を詠うのに舞妓や舞妓の美しさを借りることがある。これも白詩に学んだものだろう。438「賦新煙催柳色、應製」、全二十句の第五句から第十四句を挙げる。

纖脆 <sup>せんぜい</sup> 慙 <sup>かす</sup> 顔 <sup>げん</sup> 鉛粉素 <sup>えんぷん</sup>	纖脆 <sup>せんぜい</sup> 顔 <sup>かす</sup> に慙 <sup>は</sup> じて 鉛粉素 <sup>えんぷん</sup> し
染陶 <sup>せんとう</sup> 隨手 <sup>しう</sup> 麴 <sup>きく</sup> 塵 <sup>じん</sup> 黃 <sup>き</sup>	染陶 <sup>せんとう</sup> 手に隨 <sup>したが</sup> いて 麴 <sup>きく</sup> 塵 <sup>じん</sup> 黃 <sup>き</sup> なり
因風 <sup>かぜ</sup> 次第 <sup>よ</sup> 任 <sup>にん</sup> 抽繹 <sup>ちゅうえき</sup>	風 <sup>かぜ</sup> に因 <sup>よ</sup> りて 次第 <sup>よ</sup> に 抽繹 <sup>ちゅうえき</sup> に任 <sup>にん</sup> す
過雨 <sup>か</sup> 參差 <sup>さんし</sup> 且 <sup>かつ</sup> 展張 <sup>てんちやう</sup>	雨 <sup>か</sup> を過 <sup>かつ</sup> ぎて 參差 <sup>さんし</sup> として 且 <sup>かつ</sup> がつ展張 <sup>てんちやう</sup> す

疑帶前庭餘燼燎	前庭に 餘燼の 燎 を帶ぶるかと思ひ
誤薰中殿半燒香	中殿に 半燒の香を薰ずるかと思ふ
花無舞妓欲含怨	花無くして 舞妓 怨みを含まんことを欲し
枝有行人折斷腸	枝有りて 行人折りて 腸 を斷つ
翠黛開眉纔畫出	翠黛 眉を開きて 纔に畫き出だす
金絲結繭未繰將	金絲 繭を結びて 繰り將らず

大意は以下の通り。

青柳のやわらかい新芽のおもむきは、白粉をつけた宮女が、はずかしげに化粧した顔をそむけるかと思われ、黄緑の柳の枝を垂れる姿は、舞姫の麴塵に染めなした衣のすそが、手さばきにつれてうごくかとあやまたれる。春風が吹くにつれて、次第に柳の芽が糸を引き出すように顔を出してくる。春雨が降り過ぎると、ようやく柳の新芽は長短さまざまにひらいてくる。それは庭さきで庭火をたいて、その燃え残りがいぶっているかとあやしまれ、青柳に新煙がかかると、殿上にたきかけた香がくすぶるかと思われる。柳の緑だけで紅い花が無いので舞妓はそれを悲しく思うかも知れない、路行く人が柳の枝を折って遠くの恋人を思い出すと腸を断つほど悲しくなる。緑の枝は、美人が愁えの眉を開いて、みどりのまゆずみを描き挙げたばかりのところ、黄色い若葉は、蚕が結んだ繭の金色の糸を、まだ繰りださないところ」。

白居易もよく柳を美人に喩えている。例えば「葉は濃露を含みて 啼眼の如く、枝は輕風に嫋みて 舞腰に似たり（葉含濃露如啼眼、枝裏輕風似舞腰）」（3144「楊柳枝詞八首之七」）、「人は言ふ 柳葉愁眉に似たりと、更に 愁腸の柳絲

に似たる有り（人言柳葉似愁眉、更有愁腸似柳絲）」（3145「楊柳枝詞八首之八」）などに見える。

ところで、この 438「賦新煙催柳色、應製」の詩と同じように、前述したように、道真の詩には、007「賦得折楊柳、一首」にも「葉<sup>さいき</sup>遮りて 鬟<sup>わげ</sup>更に亂る、絲<sup>き</sup>剪れて 腸<sup>はらわた</sup>俱に絶<sup>た</sup>ゆ（葉遮鬟更亂、絲剪腸俱絶）」と、「楊柳枝」と「美人」と「腸を断つ」とのイメージの組み合わせが見える。おそらく道真の美意識の中で、楊柳枝と美人と腸を断つ悲しみとは、いつもワンセットになっているのだろう。

では、道真のこの美意識の源は何だろうか。

柳と美人の眉や腰を互いに寓している詩は、中国及び日本の詩文に、挙例の暇がないほど多い。そして、美人の悲しみが「断腸」だと形容している詩も多数有り、また、「楊柳」を見ると、「断腸」の悲しみに襲われることを詠じている詩もよく見える。ただし、「楊柳枝」と「美人」と「腸を断つ」を結びつけている例は、白居易以前の詩人の作品では「垂柳<sup>すいりゅう</sup> 萬條の絲、春來たりて 別離を織る。行人 攀折する處、閨妾<sup>けいしょう</sup> 断腸の時（垂柳萬條絲、春來織別離。行人攀折處、閨妾断腸時）」（戴叔倫「堤上柳」）と「涙を拭って 楊柳を攀<sup>よ</sup>じる、長条 地に宛<sup>かが</sup>みて垂る。白花 歷乱として飛び、黃鳥 參差として思う。妾<sup>おのずか</sup>が 自ら肝腸を断つ、傍人<sup>ぼうじん</sup> 那ぞ知るを得ん（拭淚攀楊柳、長條宛地垂。白花飛歷亂、黃鳥思參差。妾自肝腸斷、傍人那得知）」（沈佺期「折楊柳」、一説に宋之問の作）の二首だけである。それが、白詩においては、白居易が妓女のために作った 3138—3145「楊柳枝詞」と、3190「楊柳枝二十韻」結句の「纏頭は別物無し、一首断腸の詩（纏頭無別物、一首断腸詩）」（3190「楊柳枝二十韻」）、および「楊

柳枝を唱うる莫れ、腸の君が與に斷ゆる無からんや（莫唱楊柳枝、無腸與君斷）」（2975「山遊示小妓」）と、少なからぬ用例を見る。

道真はこの「賦新煙催柳色、應製」で、舞妓を素材にしている。前述の白詩の3138—3145「楊柳枝詞」と、3190「楊柳枝二十韻」も、白居易が妓女のために詠じた作である。詩に詠じられた対象が妓女であることから判断して、道真詩は戴叔倫と沈佺期の詩より、白詩により近い。道真の楊柳枝と美人と腸を断つ悲しむがセットになった表現は、やはり白居易の影響を受けているものだと思われる。

道真は舞妓を使って花と柳を描写するだけではなく、さらに花木を舞妓の化粧に見立てている。例えば、

春風便逐問頭生	春風 便ち逐いて頭生を問う
爲翫梅粧繞樹迎	爲に梅粧を翫び 樹を繞して迎う
偷得誰家香劑麝	誰が家の香劑の麝をか 偷むこと得たる
送將何處粉樓瓊	何れの處の粉樓の瓊をか 送將れる
……	

（067「早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅、各分一字」）

道真は梅の美しさを「梅粧」という化粧に喩え、梅の香りを香水の麝香に喩えている。第三句、梅が香りを放っている。この香りは、梅が誰かの家から麝香の香劑を盗んだからだろうかという。



「麝」は古代、服のどこかに収めて香りをただよわすのによく使われた。香麝、蘭麝など、舞妓や美人たちは必ず持っているものである。梁の武帝蕭衍は「蘭麝氛氲らんじゃふんうんとして 體芳かんばしく滑なめらかなり、容色玉のごと耀ようしよくき 眉は月の如し（氛氲蘭麝體芳滑、容色玉耀眉如月）」（『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷一「遊女曲」）と詠じていて、美人の体の香りを「蘭麝」で形容している。蕭衍以下、蘭麝、麝香を用いて美人の香りを描写する例は多い。

但し、道真は、従来例に工夫を加えて、反対に梅の香りを美人の麝香の香りに喩えている。それに、梅を擬人化して、美人の麝香を盗んだ泥棒だと諧謔味を持たせている。道真以前、日中両方の詩作において、この表現技法は見当たらない。

このように、美人の化粧を喩詞として、花の美しさを詠うのは道真の独創である。

上に見たように、白居易は山石榴や牡丹の美しさを、舞妓・美女を用いて表現しており、花木の美を舞妓や美女の姿態を借りて表現するのは、白詩得意の手法だった。道真はその手法を学びつつ、彼自身の独創的表現を生み出したのである。

## 第五節 まとめ

道真がこのように白居易の「舞」の表現をふんだんに摂取しているのは、白詩を常に愛読したのは当然として、家族累代の宮廷詩人としての家風が大きく影響している。

『菅家文草』の巻首、001「月の夜に梅花を見る」の題記には、「嚴君田進士

をして試みしめ、予始めて詩を言えりき(嚴君令田進士試之、予始言詩)」と道真が自ら述べている。この詩題について波戸岡氏は次のように述べている。「この詩題で、父是善あるいは島田忠臣が、少年道真に作らせたのは、道真が近い将来、宮中に侍座するであろう詩宴の題詠のことなどを慮ってのことであったとかんがえられる」<sup>97</sup>。

宮廷詩人たらんことを目標としていた道真は、少年時代から、宮廷詩宴の題材を詩に詠んでいる。道真は若いころ、詩の創作を学ぶ時、すでに宮廷詩宴に必須の題材について練習を積んでいた。「月の下にして 徒<sup>いたずら</sup>に沈醉<sup>しんすい</sup>することより醒<sup>さ</sup>むべし、花の前にして 獨<sup>ひとり</sup>り放歌<sup>ほうか</sup>することを嚙<sup>つぐ</sup>まんと擬<sup>す</sup>。他日愁<sup>たじつ</sup>えず 詩興<sup>しきよう</sup>の少<sup>すく</sup>からんことを、甚深<sup>じんしん</sup>の王澤<sup>おおたく</sup> 復<sup>また</sup>如何<sup>いかん</sup>とかせんとする(應醒月下徒沈醉、擬嚙花前獨放歌。他日不愁詩興少、甚深王澤復如何)」(094「勸吟詩、寄紀秀才」)は、紀秀才に、詩作を怠りなく続けるように勧める作だが、ここに道真自身の志が現れている。天子の恩沢に答えるために、「花前月下、放歌高吟し、狂舞沈醉すること」を辞めて、詩を研鑽し学問に励むようにといている。道真が宮廷詩人としての務めをしっかりと果たそうと、どれほど真剣に努力していたかがよく分る。そして、内宴は宮廷生活での重要な行事であり、舞妓の歌舞はその場面に不可欠のものであった。

道真の舞妓を詠じた詩は、始めに挙げたように、ほとんどが侍宴詩である。「詩臣<sup>ししん</sup> 膽露<sup>きもあらわ</sup>れて 行樂<sup>こうらく</sup>を言う、女妓<sup>じょぎ</sup> 粧<sup>よそお</sup>い成れて 歩虚<sup>ほきよ</sup>を舞う(詩臣膽露言行樂、女妓粧成舞歩虚)」(027「早春侍内宴、同賦無物不逢春、應製」)という句により、道真の宮廷詩人としての気持ちを推し量ることができる。今日の宴

---

<sup>97</sup> 波戸岡旭著・前掲註(55)・160—161頁。

会は特に盛り上がっているから、詩臣としての私も本音を流露して、楽しく舞妓の踊りを楽しめる。即ち、いつもの宴会では謹厳な態度を守り、自分の言行を抑えなければならないのである。美しい舞妓の踊りを楽しむと同時に、道真は天皇のお側において、宮廷詩人としての使命を一時も忘れることがなかった。この句は、かえって道真が宮廷内宴に侍る時、いつもどれほど謹厳に自己を律しているかを示すものである。

道真の舞妓を詠ずる詩はすべて侍宴詩である。これに対して、白居易が宮妓のことを唱う侍宴詩は、0747「上巳日恩賜の曲江宴会の即事」一首しか見られない。この詩では、天子の清明な政治を賛美しているし、妓女のことにも褒めている。存分に楽しんだといいつつ、矜持や謹厳な思いも現れている。即ち、白居易の場合も舞妓を詠ずる侍宴詩は上掲の道真の詩の主題、また情感などとはほぼ同じである。

白居易の詩において、舞妓の姿を詠じている詩は多数あるが、それは大部分が友達との宴会で、舞妓や家妓のことを唱っているものである。白居易の世界において、妓女の登場する空間はほとんど自分が宮廷から離れて、友達と一緒に楽しみ、閑適の生活を楽しんでいる場合である。

白居易にとって舞妓は日常生活の一部である。白居易は杭州刺史の時代以後、洛陽に在る晩年も、ほとんど毎晩、酒を飲みつつ舞妓の歌舞を楽しんだ。舞妓は白居易にとっては、酒とともに、閑適の生活を充実させる最も楽しい要素になっている。

一方、道真においては、詠じている舞妓が総て宮妓であり、舞妓は道真にとっては、終始宮廷生活と強いつながりを持っている。

道真は、068「書齋雨日、獨對梅花」に、「今年内宴に敕有り。[春雪早梅に映ず]』ということ<sup>ごうちょう</sup>を賦す。内宴の後朝、右丞相、詩客五六人を招き、[東風梅を粧う]』ということ<sup>はむべ</sup>を賦す。余れ不才なれども、此の兩宴に侍り、故に云う（今年内宴有敕。賦春雪映早梅。内宴後朝、右丞相招詩客五六人、賦東風粧梅。余雖不才、侍此兩宴、故云）」と自注している。連続して、天皇また右丞相の内宴に侍宴できることは、道真にとって喜びであり誇りであった。舞妓は道真にとって、楽しむ対象であるとともに、それ以上に、宮廷詩人としての生活に不可欠な要素だったのである。

284「正月十六日、憶宮妓踏歌」に、「此の夜 應に新月の色と同じかるべし、他郷<sup>た きょう</sup>にして 舊年<sup>きゅうねん</sup>の心に似ず。舞いは春の夢にあらず 行きて見る事難し、歌は是昔聞くところ 便<sup>すなわ</sup>ち臥<sup>ふ</sup>しながら吟<sup>ぎん</sup>ず。佳辰<sup>かしん</sup>公宴<sup>こうえん</sup>の日に屬<sup>あた</sup>る毎<sup>くうくう</sup>に、空空<sup>くうくう</sup>濕<sup>うるお</sup>い損<sup>そん</sup>す 客衣<sup>かくい</sup>の襟<sup>えり</sup>（此夜應同新月色、他郷不似舊年心。舞非春夢難行見、歌是昔聞便臥吟。每屬佳辰公宴日、空空濕損客衣襟）」と詠じているように、道真にとって、舞妓の歌舞は、遙かな都と宮廷を想わせる情景であり、舞妓は常に、天皇の側にいる宮廷詩人としての自己に伴うものであった。

## 結 論

本論においては、道真詩における「比較表現」、および「見立て表現」が白居易の影響を強く受けていること、道真は白詩をヒントにしつつ、それを活用して、新たな表現を創出していることを論じた。

第一部は、道真における「比較表現」について考察した。第一章は、道真詩における白居易の比較表現の受容の考察を行い、讃岐に赴任した時には、白居易の「兼濟」と「独善」の精神をよく受け入れており、太宰府に追放された時には、白居易の「…より…ました」という表現の力を借りて、自分自身を慰めていたことが分かった。

第二章では、まず道真の子供を詠ずる詩における白居易の比較表現の影響を検討した。その中で、子供に対する様々な温情、家学への誇りなど情の深い父親としての道真姿を提示した。それによって道真が日常的、具体的で、描写が細密であるという白居易詩の特徴を受け継いでいることが確認できた。

第二部は、道真詩における見立て表現について、白居易の影響を論じた。第一章では、道真が、白居易の年齢の表現を意識しつつ、雪を喩詞として、白髪を雪に見立てて、さらに白居易の美人を雪に見立てた表現を意識して、「雪」で美人自体を比喻するのではなく、美人の化粧を比喻したり、また、「鵝毛」（「鶏毛」）や「玉」、「柳絮」、「布」のような雪を見ながら、自分自身のことよりも、民の幸福を先に考えていたりしていることを論じた。道真が白居易の「兼濟」、「閑適」の精神を受け取れていることを示して、これらの詩を詠じた時、道真が地方官僚として真剣にその職務に取り組んでいたことを確認した。

第二章では、道真が従来の月の見立て表現を意識しつつ、日本の漢詩人において、初めて月を自身のことに見立てていることを論じた。道真は月の「透明、清澄」、及び「不変性」を愛し、それに白居易の「比興」説を受容して、時には月と友達のようにつきあい、時には月の姿に自分を重ね合わせている。また、これはあまり指摘されていないが、道真は自身のこと以外に、月を天皇にも見立てており、これは道真の独創である。こうして道真は、日本の漢詩史のみならず、中国詩史においても前例を見ない、独特の比喻表現を作りだしたことを指摘した。

第三章では、道真の人生との深い関わりが見られる梅花の見立て表現における、中国詩の影響を考察した。特に道真が梅に従来の詩人の誰よりも親しい感情を持っているため、特別の創意を詠出したことを考察した。道真は一首の作で複数の比喻表現を使って、「梅」を立体的に歌っただけではなく、梅に深い思いを込め、梅を擬人化して、漢詩史において、初めて「梅」を自分の分身及び子供たちの象徴とした詩を吟じたことを論じた。

第四章では、道真は白居易の舞い表現をよく学んで、美人の「気力の無い」、なよなよとした美しさを愛し、「舞汗」、「廻雪」の表現及び舞のクライマックスで、舞妓の舞が激しすぎて釵が髪から落ちる等の表現を摂取していることを論じた。また、花木を舞妓の化粧に見立てる表現を創出したこと、道真は家学の影響を受けて、侍宴の時に必須の題材として小さい頃から舞妓の表現を学んだことを指摘した。但し、詩人の社会環境、歴史、性格などの違いより、道真と白居易における、「舞妓」の意義には根本的な違いがあることを確認した。

本論文では、道真詩における「梅花」の表現のみを論じたが、道真は「菊」、

「竹」、「蘭」などをはじめとして、花木の作をたくさん詠じて、しばしば自身の感情を投影させている。それらについて扱えなかったのは反省点である。今後、この見立て表現と比較表現の研究を糸口として、さらに花、及び年齢、時間などの見立て表現について、道真は白詩の表現をどのように摂取しているのか研究を進めていきたい。また、表現の研究を通じて、道真と白居易の思想の違い、道真のアイデンティティの変化などをも追究したい。



## 参考文献

- 菊池寛『太宰府と菅公』（岩波書店、一九四三年）
- 遠藤泰助『菅原道真と天満天神』（帝国出版協会、一九四四年）
- 川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究上』（明治書院、一九五九年）
- 川口久雄校註『菅家文草・菅家後集』（岩波書店、一九六六年）
- 川口久雄『平安朝日本漢文学の開花一詩人空海と道真一』（吉川弘文館、一九七二年）
- 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集一道真の文学研究篇第一冊一』（芸林舎、一九七七年）
- 金原理『平安朝漢詩文の研究』（九州大学出版社、一九八一年）
- 後藤昭雄『平安朝文学論考』（桜楓社、一九八一年）
- 三谷栄一・山本健吉編『日本文学史辞典・古典編』（角川書店、一九八二年）
- 菅野礼行『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』（大修館書店、一九八八年）
- 大岡信『詩人・菅原道真—うつしの美学—』（岩波書店、一九八九年）
- 坂本太郎『菅原道真』（吉川弘文館、一九九二）
- 太田次男等『白居易研究講座・全七巻』（勉誠社、一九九三—一九九八年）
- 下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠社、一九九六年）
- 中国舞蹈芸術研究会舞蹈史研究組編『全唐詩中の楽舞資料』（人民音楽出版社、一九九六年）
- 大曾根章介著『大曾根章介日本漢文学論集・第二巻』（汲古書院、一九九八年）

小島憲之・山本登朗校注『菅原道真』(研文出版、一九九八年)

藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』(東京大学出版会、二〇〇一年)

藤原克己『菅原道真・詩人の運命』(ウェッジ、二〇〇二年)

和漢比較文学会編『菅原道真論集』(勉誠出版、二〇〇三年)

神社と神道研究会編『菅原道真事典』(勉誠出版、二〇〇四年)

興膳宏『古代漢詩選』(研文出版、二〇〇五年)

波戸岡旭『宮廷詩人菅原道真―「菅家文草」「菅家後集」の世界』(笠間書院、二〇〇五年)

下定雅弘『白樂天の愉悅―一生きる叡智の輝き』(勉誠出版、二〇〇六)

谷口孝介『菅原道真の詩と学問』(塙書房、二〇〇六年)

下定雅弘『長恨歌―楊貴妃の魅力と魔力―』(勉誠社、二〇一一年)

秋山虔氏の「古代官人の文学思想」(東京大学『国語と国文学』三十四一十、一九五五年)

幸田露伴「梅と菊と菅公と」(『露伴全集・第十九卷』岩波書店、一九七九年)

「白居易の詩における「雪月花」の表現の成立について」(『日本中国学会報』三十、一九七八年)

後藤昭雄「菅原道真の詠竹詩について」(福岡女子大学国文学会『香椎潟』第二十七号、一九八二年)

藤原克己「菅原道真研究史」(『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、一九九〇年十月)

遠藤光正「讃州時代の菅原道真と「寒早十首」」(『東洋研究』一一三号、一九九四年)

新聞一美「菅原道真の子を悼む詩と白詩」『京都語文』第十号 二〇〇三年

江藤高志「菅原道真の擬人的表現と尤物の受容—雨中の花と汗に潤う妓女との重なり」(都留文科大学国語国文学会編『国文学論考』第四十七号、二〇一一年)

# 初出一覧

## 第一部 比較表現を中心として

### 第一章 菅原道真における比較表現の受容

原題：「菅原道真における白詩の比較表現の受容」、『岡山大学大学院社会文化研究科紀要』第三〇号、二〇一〇年十一月。

## 第二部 見立て表現を中心として

### 第一章 道真詩における「雪」の見立て

原題：「菅原道真における白詩の受容—その「雪」の比喻表現」、『中国文史論叢』、第七号、二〇一一年三月。

### 第二章 道真詩における「月」の見立て

原題：「菅原道真における「月」の見立て」、『岡山大学大学院社会文化研究科紀要』第三二号、二〇一一年三月。

### 第四章 道真詩における「舞妓」の見立て

原題：「菅原道真における「舞妓」—白居易詩の「舞」表現の受容をめぐって—」、第一一三回和漢比較文学会西部例会に発表して、『岡山大学大学院社会文化研究科紀要』第三四号に発表予定。